

---

# 転生して異世界に指導者として出向くことになった

---

よぎそーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生して異世界に指導者として出向くことになった

### 【Nコード】

N8584DT

### 【作者名】

よぎそーと

### 【あらすじ】

原始時代と言って良い状態の異世界。そこに派遣された主人公は、ここから文明を発展させていく事になった。頼れるものは己一人。

与えられたのは、技術を習得する方向を自分で選べるという事だけ。

果たしてこれで上手くいくのか分からないが、やらねば何も手に

入らない。

発展させなければ自分が苦労する事になるのだから。

感想、誤字脱字の報告などはメッセージにてお願い。

## 1 歩目 転生したは良いけれど

(いやはや)

あらためて芳野ヒロフミ……という名前だった彼は現状を振り返る。

分かっていた事だが、やはりかなり酷いものだった。とはいえ、それは非難できるようなものでもない。

ここでは当たり前前の常態なのだから。

(とはいえ、このままってわけにもいかないよな) 周りを見渡して考える。

一緒に行動してる数十人の集団。

ヒロフミの家族も含めたこの一団は、現在移動しながら生活を続けている。

採取と狩猟による生活は、安定に程遠い。

食料の確保の為に常に移動を余儀なくされる。

定住しようにも、食料が近くに無ければそれも出来ない。

よって、常に移動を繰り返していくしかない。

それでもまだ運が良い方である。

採取や狩猟できる対象を常に見つけ続けるという幸運に巡り会えたのだから。

いつまでも続くという保障は無いが、その幸運に感謝しなくてはなるまい。

(けど、このままってわけにもなあ)

何とかしてここから脱却せねばならなかった。

この原始時代的な生活から。

というより、原始時代そのもの時代から。

その為にヒロフミは転生してきたのだから。

宗教や様々な創作物で出て来た転生。

それが実際に起こるとは思わずヒロフミは前世で生きて、そして死を迎えた。

とりたてて信心深くもない、一般的に日本人なみの宗教観しかもっていないかったヒロフミは、その瞬間そこで全てが終わると思った。死後の世界があるかどうかは分からなかったし、あったとしてもあの世での生活（？）がよりよいものになるとは思っていなかった。褒められたものではない生き方をしてきた自覚はあった。

それに、見聞きしてきた死後の裁きとやらを考えるに、ろくでもない結果になるとも思っていた。

やってきた事を振り返ればそれも仕方ないとは思うが、何とも憂鬱な気分になった。

それが人生最後の瞬間であつたのが、何ともやりきれなかった。

(それがこれだからなあ)

途中にあつた出来事を飛ばし、今の現状に意識を戻す。

何でこうなつたのかと過去を振り返って考えてしまう。

本当にこれで良かったのか、選択肢はもっと他にあつたのではないかと。

もう今更、本当に今更でしかないが、やはり繰り返しそう思ってしまう。

現状が現状だけに特にそうなってしまうのかもしれない。

これももつと楽な状況だったら、むしろ積極的に今を受け入れていたかもしれないのだから。

(でも、どうするよ)

あらためて現実に戻り自問自答していく。

過去の出来事を振り返ってもどうにもならない。

反省材料にはなるにしても、現状を打破する役には立たない。

蓄積や経験を否定するつもりはないが、死亡直後から転生してくる直線までの出来事はとりあえず今は必要無い。

とにかく今の常態を打破しない事にはどうにもならない。もとよりそのつもりであった。

しかしこの状況でどうすれば良いのか見当も付かなかった。

(まず、何からやればいいのかのやら)

最低限この状態から抜け出さねばならない。

安定した生活を確保しなければ先行き不安でしようがない。

採取・狩猟生活など延々と続けていくわけにもいかないのだ。

衣食住の確率と安定化がとにかく急務である。

確実に手に入る食料、雨や風を凌ぐ為の住居。

そして、身につける衣服。

このどれもが不足していた。

衣服などほとんど身につけてない。

言っってはなんだが、周囲にいる数十人全員が素っ裸である。

ヒロフミも例外ではない。

全員がそんなものだからもう慣れてしまってきてるが、風や雨が直接肌に触れるのはさすがにつらい。

体温保持や、草木などが肌をひっかく事から身を守るためにも、

何かしら身にまとうものが欲しい。

ヒロフミがおかれてる状況というのはそれくらい原始的なものだった。

文明が懐かしいと思うのも無理からぬ事である。

そして、新たに生まれてきたこの場所を少しでもよりよく改善していききたいと思う。

でなければわざわざ生まれてきた意味が無い。

(とにかく、技術を身につけないと)

何をするにもある程度の技術や知識が必要になる。

幸いというか、それについては多少は利点となるものも与えられている。

目の前にそれを表示して、今の自分を確認していく。  
能力表。

ロールプレイングゲームのように自分の能力を表示するそれがヒロフミに与えられた力だった。

(とりあえず経験値は貯まってるんだよな)

それこそゲームのような調子で成長も出来る。

普通、知識や技術は練習や実地での体験経験で知識や技術は身につけていくはずである。

なのだが、ヒロフミはそれを一旦経験値(この能力を与えた者は徳と言っていた)として蓄積する。

それから経験値を手に入れたい技術に割り振っていく事が出来る。実際にはたいいていの人間が無意識にこれを行っており、やるうと思えば誰にでも出来るのだと聞いている。

ただ、多くの者達が経験値を知らず知らず自分が為した行為に振り分けているのだとか。

それが本当かどうか分からないが、とりあえずヒロフミはそれを自分の意志で自由に行う事が出来る。

目に見える形で自分の現状を把握し、なおかつ成長も選択している。

大きな利点ではあった。

(当面は狩りに関係するものがいいいんだろうけど。

でも、それだと先が無いし)

選ぶ事が出来るから悩みます。

何せ徳……………経験値はそう簡単には貯まらない。

目安として半年から一年でレベルアップに必要な量に到達する。

そんな調子なので、その場の勢いで技術を身につけるわけにもい

かない。

先の事を考えて何かを手に入れていかねばならない。

それでも、まずは目先の事をどうにかしないとイケないので、必要な技術を中心に身につけている。

何かしらの変化に気づくための『探知』

動物の行動を知る為に『動物知識』

道具を作成するための『工作』

今までの十三年で得られた経験値でこれらを手に入れた。

おかげで狩猟が大分はかどるようになった。

この集団が生き延びてるのは、ヒロフミの手に入れた技術によるところも大きい。

これらを身につけたのは間違いではないと言える。

(けど、この先もこれを上げていくのもな……)

ここからの脱却が必要だった。

その為の一手を指していかねばならない。

(どうすりゃいいのかねえ、神様)

ここに来る事になった原因である存在に、胸の中で問いかけた。

答えが返ってくる事がないと分かっけても。



## 2 歩目 死んだらこんな奴に呼び出されたようだ

「やあ」

何とも軽い調子だった。

友人に声をかけるような、見知った者同士の挨拶のように。しかし、見ず知らずの相手にそうされれば警戒の方が先に立つ。まして状況が状況だった。

「誰だ？」

そう言ったとしても咎められる事は無いだろう。相手もそこは気にしてないようで、

「まあ、そういう反応になるか」と言っつて肩を落とした。

もっとも、落胆してるといって程でもない。

やむをえない、仕方ないといった感じで、特に深刻な感じはしない。

だが、ヒロフミの方はそうはいかない。

そもそも、相手に気を向けてる余裕もなかった。

「……どこだよここは」

全く見知らぬ場所である。

どこまでも拡がる草原。

そんな所に何故か突っ立っている。

もちろんこんな所に足を運んだおぼえはない。

直前までビルの間の路地に身を潜めていたのだ。

おおっぴらに出来ない理由により負傷し、そこで出血と共に意識を失った。

そこに至る経緯を考えれば、そのまま命を失っていくのが当たり前だった。

仮に治療などの措置が間に合い、奇跡的に命を繋ぎ止めたとしても、こんな場所に出て来るわけがない。世の中完璧はないと言われるが、目をさますのは病院のベッドの上が妥当なところだろう。

なのに、居るのは屋外である。

何よりおかしいのは、負ったはずの傷が綺麗サッパリ消えている事だった。

(どうなってるんだ?)

とにかく疑問しか出てこない。

答えが出てくる事はないが。

そんなヒロフミに目の前の男が声をかけてくる。

「色々と思う所はあるだろうけど、とりあえず一つだけはっきりさせておこうと思うんだ」

何だと思ってるそちらに目を向ける。

相手はその視線を受けて口を開く。

「君は死んだから、ついさっきね」

「……はい？」

「うん、信じられないだろうね。

でも嘘じゃないから。

君だつて分かつてると思うけど、あの怪我である状態であるから、あの怪我である状態で生きながらえるなんてあるわけないから。

体を数力所撃ち抜かれて出血多量。

しかも一発は急所に入っていたし。

即死はないにしても、まず確実に助からないよ。

手術したつて無理だろうしね」

恐ろしい事を淡々と喋る男に、ヒロフミは啞然としていく。

「じゃあ、ここはどこなんだよ。

俺は何で生きてる？」

「いや、死んでるから。」

それでここに来てるんだから、君は。

分かりやすく言うと、死後の世界だから、ここは

「……………」

「まあ、すぐには信じられないだろうね。」

でも事実をしっかりと受け入れてもらいたい。

でないと話を進める事も出来ないから」

混乱する、というか意識が停止してしまっているヒロフミに要望  
がつけつけられる。

もちろん対応する事も出来ず、ヒロフミは男の言葉を頭の中で繰  
り返していった。

「落ち着いたかい？」

「ああ、なんとか……………いや、まだ何がなんだか分からん」

「しょうがないね。」

むしろ、ちゃんと話せるだけありがたい」

「そうなのか？」

「他の人だと全然話が出来ない事もあったから」

「ちよつと待て。」

つまり俺以外にも会ってきたつてののか？」

「もちろん。」

候補者として色々な人間を見繕ってるから。

さすがに一人に全てを期待するわけにもいかないし」

「危機管理としては妥当だな」

可能な限り手数を増やして、全部が失敗する可能性を減らす。

悪い方法ではない。

「それで、鉄砲玉の一人として俺をどうしたいんだ？」

「まあ、そう卑下しないで。」

確かにそうしてるとしか言えないけど、決して悪いようにしたい

わけじゃないから」

「どうだか、としか思えなかった。」

「何が良くて、どれが悪いのかなんて判断材料がないのに決められない。」

「例えばどれほど都合がよい展開があったとしても、それが目の前のこの男の都合でしかない可能性は十分にある。」

「結局掌の上で踊ってるだけというなら、それはそれで気分が悪い。」

「何をやらせるつもりか分からんけど、あんたの都合だけで流されるのはごめんだぞ」

「そう言われるときついな。」

「何せ、俺の都合で動いてもらう事になるわけだし」

「じゃあ、他をあたれ」

「ヒロフミは即座に返答をした。」

「お前の都合なら、あんたがやればいいだろ。」

「他人を使うな」

「正直に言うあたりは好感がもてないでもない。」

「だが、利用されるのが分かって、はいそうですかと納得するつもりもなかった。」

「例えばどれほど好条件でも、どれほど便宜を図ってもらうにしても、他人を利用しようとする奴とは行動しない。」

「それもまたささやかな人生経験で得た貴重な教訓だった。」

「やりたきゃ自分で動け」

「それが出来ない奴、裏に隠れてうまい汁を吸おうとする連中は決してやらない事である。」

「なるほどね」

「男はヒロフミの言葉に、何故か満足げな表情を浮かべた。」

「確かにその通りではある」

「分かってんのか」

「そりゃね。」

「こつちも今まで色々あったから。」

「で、自分なりにあれこれ考えて動いてるところだよ。」

「ふーん」

「まあ、他の誰かを使ってるのは確かだが」

「俺はそれにのっかるほどお人好しじゃないぞ」

「だろうね。」

「となると難しいかな」

「何が？」

「こつちの用件について。」

「君にやってもらいたい事があるんだ」

「何を？」

「異世界の指導者」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「うん、もう一度言ってくれ」

「異世界の指導者」

「……………なあ、あんた何を言ってるんだ？」

「いや、本当に本気で言ってるんだよ」

「軽い口調による台詞は、とてもそう思わせるようなものではなかった。」

### 3 歩目 どこまで信じてよいのかと思いつつ

「つまり、どついう事だよ」

「言葉通りだよ。」

異世界に行つて、指導者になつてもらいたい。

そこの人間を導いてもらいたい。

そつして欲しい世界を用意してある」

「なんで？」

「文明を發展させたいからさ」

「そつじゃない」

男の言う事をヒロフミは止めた。

「なんで發展させたいんだ。」

發展させてどうするんだ。

そもそも、なんで異世界なんてもんを作る。

異世界を作るあんたは何者なんだ」

聞きたい事がどんどん出てきた。

とにかく全てが謎だった。

疑問は言葉になつて男へと向かった。

「そつだなあ」

男はその言葉に答えを向けていく。

「文明を發展させるのも異世界を作つたのも、理由は同じだ。

対抗する為」

「何に？」

「それに答える前に、俺の事だけだ。

君らの言葉でいえば、神が一番近いのかもね。

どちらかというつ造物主や創造主の方が正確だけど」

「なんだそりゃ」

どちらのどれだけの違いがあるのかが分からない。

そもそも神（造物主・創造主）というのが本当なのかも分からない。

「俺は世界や宇宙を作っただけ。」

その後の事については余り介入出来ない。

そこに何かを送り込んだり作り出す事は出来るけど。

それがその後どうなるのかについては介入出来ない」

「作っただのに？」

「製造担当者と運営担当者の違いって言った方がいいかな。」

作り出した後の運営は手を離れる。

そういうわけで、介入は極限まで制限されるんだ。

なので、俺は作り出した世界そのものに直接手が出せない」

「本当か？」

「真実かどうかを証明する手段はない。」

なので、この話は信じてもらうしかない」

「嘘だと思ったら？」

「どうしようもないね。」

あきらめるしかない」

男　造物主は肩をすくめた。

「それで、異世界を作って文明を発展させる理由だけど」

「ああ」

「こっちの世界に対抗するため」

「は？」

「いやね、こっちの世界のほうなんだけど、妙に考えが凝り固まっちゃってね。」

自分らの世界だけしか認めないっていうか、自分らの存在が唯一だってことになっちゃってるんだ」

「はあ……」

「まあ、それだけなら良いんだけど。」

なんでかそれを他の世界にも及ぼそうとしててね」  
造物主は呆れて嘆く調子で語る。

「自分達と同じような展開を遂げない世界は認めない。  
他の可能性なんて全部否定するって事にまでなっちゃってね。  
はつきり言えば侵略しようとしてるんだ、これが」

「おいおい」

さすがに話の大きさに呆れた。

「だから、それを止めたい。」

止めたいというか、止められないから対抗するしかない。

でも、こちらは世界を作ることとは出来ても運営に介入は出来ない。  
なので、これはと思った者達に指導者になってもらって送り込む  
しかない」

「いや、ちよつと待ってくれ」

色々突っ込みたいことが出てきた。

「止められないってどうしてだよ。」

それに、侵略ってなんだ」

「まず、俺達は世界の創造は出来ても介入は出来ない。

なんていうか、土台となる居場所とか世界を作ることとは出来るけど、そこで動き回るプレイヤーを作ることは出来ない。

プレイヤーはあくまでこちらから独立した存在だ。

それらを作り出すことは出来ないんだ」

「それって、俺達みたいな人間がって事なのか？」

「そうだな。」

それが一番分かりやすいだろうな。

多人数参加型のオンラインゲームが一番分かりやすいかもしれんな。  
な。

神だ魔神だ造物主だ創造主だって言っても、俺達で作れるのは世界だけだ。

せいぜい、ノンプレイヤーキャラクターくらいが限界だ。

生命をもった存在を作り出すことは出来ない」



「だったら、俺達はどうやって作られたんだよ」

「生命の根源から」

また新しい言葉が出てきた。

「そういうのがあるんだよ。」

で、そこから生命となるものが作った世界にやってきて、形をとっていく。

俺達はその受け皿を作るのが仕事って事になるな」

「仕事って、会社員じゃあるまいに」

「一番近い言葉それだと思ったからね。」

なんなら、役目でもいい。

とにかく、それが俺らの存在理由になってる」

「なんか、それこそプログラムか何かみたいだな」

「近いね。」

その範囲の中でしか行動できないってのは正しい。

そして、その中に世界の維持というのものもある。

受け皿を保つっていつのかな。

受け皿の上でのことはどうにもならないけど、受け皿事態は保つ

ていかなくちやならないんだ」

「それがなんで文明の発展とかに絡んでくるんだよ」

「世界の保持って部分で引っかけたってね。」

さっきも言ったけど、こっちの世界の中だけで留まってくれるんなら良かったんだ。

けど、他の世界まで手を出し始めてね。

どうやったのか知らないけど、別の世界ともつながりだしたんで、それに対抗しなくちやなくなっただんだ」

「それで、文明の発展と？」

「そつだ。」

対抗するために、世界を守るために文明を発展させなくちやならない。

別の世界をつなげることで何がどうなるか分からないけど、世界

の保全に障害が出る可能性が出てくる。

最低でもそれだけは避けたい」

世界の保持という観点からすれば確かにそうなのだろう。

「でもよ、世界そのものとはもかく、そこで生きてる連中がどうなるかと関係ないんじゃないのか？」

少なくともあんたらにとってはどうでも良いことだと思っただけ  
ど」

「それがそうも言ってもらえなくてね。

生命の根源からくるものの受け皿としては、そこで発生した生命も保全することも仕事なんだ。

間接的なことではあるけど。

世界の中だけで何かが潰えるなら、それは仕方ないって事になるけどさ。

でも、今回の場合は外部からの、別の世界からの侵略だからそれも言ってもらえない。

なので対抗策を編み出さなくちゃならなくなったわけよ」

「それで俺を異世界に？」

「そうなる。

もちろん、別の世界から生命を運んでくる事になるから、これも難しいんだけど」

「おいおい。

禁止事項って事か？

やって大丈夫なのか？」

「なんとかギリギリ。

成長した魂を指導者として迎えるのは認められてるから。

そうやって文明の発展を短期間でまとめることも手段として存在してる。

生命の発展のためなら、これくらいは良いみたいなんだ」

「そのあたりの区切りが良く分かん」  
「俺もだ」

造物主にも分からないことはあるようだ。

「そんなわけであんたを別の世界に勧誘したい」

「えー」

「引き受けてくれると助かる」

「なんで俺なんだよ」

「それだけのものを持つてると思ったからだ」  
造物主は本気のように言った。

3 歩目 どこのままで信じてよいのかと思いつつ (後書き)

続きを20:00に公開予定

#### 4 歩目 そんなこんなでやっては来たけども

ここに至る理由と経緯を思い出してため息を吐く。

なんだかんだあり、条件交渉もしてやってきたのだが。

あまりにもあんまりな状況に絶望しそうであった。

少なくとも落胆は避けられなかった。

(本当にどうしたもんだか)

手をつけるべきものが何なのかすら見えない状況にため息が漏れていく。

やりたい事は多いが、選べるのは一つだけ。

それがかなり厳しい。

とにかく今後の展開に必要な部分が見えてこない。

(何か良いの無いかな)

そう思いながら能力表を見ていく。

ついでに、選択出来る技術の一覧を。

かなり膨大な数があるそれらの全てを見ていくのは面倒だったが。

(とにかく、次の事を考えておかないと……)

そう思った瞬間に、技能一覧の表示に変化があらわれる。

目的に沿った技術が選別された結果だ。

こういった絞り込み検索のような機能も備わってるのが助かる。

(妙にパソコン扱いよな、このあたり)

神様というか造物主とやらも人間にならうのだろうかと思ってしまう。

あるいは、人間の方が無意識に造物主達の方に向かっていくのかもしれない。

その結果として、似たような機能のついた物が作られていってるのかも。

確かめようがないが、そういう可能性も考えた。

（まあ、それはそれとして。

この中から選ぶにしてもなあ）

候補としてあがってるので外れはないだろうが、それでも複数の技術が並んでいる。

その中には農業や星見、天候予測など実際に必要そうなものがあるがっている。

しかし、そのどれかを選ぶにしても何か決め手に欠ける気がした。確かに目先の問題や先々の事を解決していく手段が欲しい。

なのだが、それだけでは足りない。

体系的に行動していくための、無駄なく技術を会得していくための筋道が欲しい。

考え方を示す何かがあった。

（そういう便利なものが無いかねえ）

そう思った瞬間にまた表示される技術が変わる。

条件が変更された事で選べる技術も変わったようだ。

その一つにヒロフミは注目する。

（なるほど、これか）

即座に役立つ事はないだろうが、今後を考えるのに便利そうな技術だった。

迷わずヒロフミはそれを選び、経験値を消費した。

その瞬間、選んだ技術がレベル1になり、頭に様々な考えが浮かんでいく。

今までどの順番でやるうかと悩んで居た悩みが、一つの方向性をもって絞られていく。

呆気ないほど簡単に結果は出てきた。

（なるほど、こうすりゃいいのか）

そう思ってヒロフミは次の道筋を見つけた。

修得した瞬間に頭の中が整理されていき、必要な技術を絞る目安が思い浮かんできた。

存外馬鹿に出来ない技術だと理解する。

『教養』という技術はそれだけの効果があった。

考え方の基本や、常識的な行動や言動。

それらの土台となる知識や考え方、頭の働かせ方。

教養とはそういった技術であった。

先々を見通すという程では無いが、筋道をつけた考え方が出来るようになり、これからの方針が決まっていく。

より専門的な技術として『戦略』というものもあるが、これはとりあえず後回しにする事にした。

まだそれが必要な段階ではないと思ったからだった。

実際、教養を身につけた事でそれなりに考えがまとまった。

今はまだこれで十分に思えた。

しかし、これで経験値を使ってしまったので、あと半年から一年は次の行動に移れない。

それがもどかしく思えるが、こればかりはしょうがなかった。

やる事も多い。

先の事を更に考える事が出来るようになり、やるべき事が数多いのに気づかされた。

欲しい技術はたくさんある。

その中から今必要なものだけを選んでいく。

寿命という形で時間は限られている。

特にこの時代、寿命は極端に短い。

せいぜい二十年から三十年といったところだ。

栄養状態と生活環境が余りにも隔絶してるのでこうなってしまう。

これをどうにか改善せねばならなかった。

この限られた時間を有効活用せねばならない。

とにかく無駄な事はしてられない。

ともかくにも経験値である。

これを稼ぐために作業に励んでいかねばならない。

日々の積み重ねのなかで経験値は積み重なっていく。

一回一回の獲得は少ないが、これを繰り返さない事にはレベルを上げる事は出来ない。

ありがたいのは、生活に関わる事を繰り返すだけで経験値が入る事だった。

頭の中であれこれとやり方を考えるだけでも経験値は貯まってい

く。

実際に行動にうつせば更に多くが手に入る。

行為の成功ならもっと大きい。

失敗しても、何もしない時よりは多くの経験値が入る。

本当に何もしていない時には全く手に入らないが、作業などに

関連する事で頭を使っていればほぼ確実に入手出来た。  
おかげで狩りをしている間はかなりの経験値を手似入れる事が出来た。

残念ながら教養は狩りの成果を上げる事はなかったが。

それについてはもっと別の技術が必要なのだろうと思った。

より高いレベルが求められるのかもしれない。

どちらにせよ、すぐに確認する事は出来そうにない。

次の技術を手に入れるだけの経験値が入ってこなければ。

そんなこんなで半年。

予定通りにヒロフミは次の技術を手に入れるだけの経験値を手に入れた。

それを用いて『植物知識』を手に入れた。



## 5 歩目 ようやく土を耕せる

(よしよし)

技術の効果を探る為に周囲の草木を見渡していく。すぐにそれらの特性がある程度把握出来るようになった。食用になるかどうか、何かの材料になるかどうか。成長までに必要な期間と、栽培のために必要な条件など。全部が分かったわけではないが、おおまかな事は把握出来るようになった。

何より必要な情報は手に入る。  
それで十分だった。

「お、あったあった」

技術から得られた情報をもとに探していったら、存外早く見つかった。

目的のものは結構多く生えており、採取は簡単にできた。

「助かるわ」

そう言っただけで生えていた大量の麻を手に入れた。

「これで縄が作れる」

工作の技術がここに来て更に生きていく事になる。

縄が作ればそれで制作出来る物の幅が広がる。

物を組み合わせる事が出来るようになる。

これでようやく次の段階に移行する事が出来る。

麻から縄を作り出したヒロフミは、それを用いて細めの木々を使って道具を作っていた。

いぶかしがる他の者達を他所に、ひたすら道具を作り出していく。それが出来上がると水源にしてる川へと向かい、それを沈めた。木材で出来てるから基本的に沈みはしないのだが、それに石をくくりつけてどうにか川底に落とす。

幅十メートル程度の小さな川なので、さほど深くもないのも助かった。

それが出来上がると次の作業へとうつっていく。

縄が出来上がった事でやれる事の範囲も広がっている。

適当な木の棒に、切断面を鋭くした石を湯賄付け、斧としていく。それを用いて、適当な木材を切って言った。

必要な数の木材を確保したところで、それらを縄で結って組んでいく。

形はお世辞にもとのつてるとは言い難いが、それでも必要な形にはなってくれた。

そこに束ねた茅を葺いていき屋根とする。

円錐の形が出来上がったそれ 　　竪穴式住居の完成である。

これで住む場所の確保が出来るようになった。

そうしてる間の食料調達は、川に沈めた道具でまかなくなっていった。かなり昔、一度だけテレビで見た漁具、ウケを使って。

そうそう簡単に魚は獲れなかったが、一日中貼り付いてなくて良いのがありがたかった。

安定というにはおぼつかないが、その第一歩が踏み出せた。

とはこのウケを大量に設置して、より多くの魚を獲れるようにすれば次の段階に進める。

( ようやくここまで来れたな )

魚を手に入れ家を建てる。

それにより定住がほぼ確定となってきた頃。

新たに貯まった経験値で次の目標とする技術を手に入れる。並んでる技術から一つを選び、そのレベルを上げていく。

(ようやくだな)

狙ってはいたが、なかなか届かなかったものである。

安定した食糧確保のためにはどうしても必要だったが、手を回す余裕がなかったものでもある。

それが今、ようやく手に入った。

ここに来てようやく手に入れ、ヒロフミは次への一步を踏み出せるようになった。

『農業』によつて。

栽培すべき作物はもう既に目星をつけてある。

川から水を引き、簡単な水路も作った。

非情に小さな畑であるが、一人で栽培する限度を考えると大きく場所を確保するわけにはいかない。

また、畑にかかりきりにならなくてはならなくなる。

種をまいてそれで終わるといふわけにはいかない。

収穫までの長い戦いがこれから始まっていく。

(人手が借りられればいんだけど)

そもも思うが、今の段階では無理な話である。

収穫が確実にできれば誰も手を貸さないだろう。

だからこそ作物を手に入れるまでは一人でがんばらねばならない。

幸い、魚の確保で信用や信頼は得ている。

家という快適な空間を作り出した事も大きい。

集団の他の者達は、

『何をやってるのか分からないが、また何かを作り出してくれるだろ』

と思ってくれている。

だから変なちよつかいをかけてきたりはしない。

そんな事をする者がいれば、他の者達が制裁を加える。

食べるものを手に入れる確立をはねあげたヒロフミを無碍にするような輩はほとんどいない。

それが、おこぼれ狙いの善意であったとしても、邪魔を排除してくれるのがありがたかった。

反面、絶対に失敗が出来ないという事でもある。

もし収穫がなければ、誰もが掌を返すだろう。

十分にありえる事である。

狩りや採取に出かける人間を一人減らす事になってるのだ。

その分他の者達への負担が増している。

新しい事を始めるのだから、失敗はどうしてもつきまとう。

それは仕方が無い事である。

しかし、それを理解出来る者がここにどれだけいるかが分からない。

このあたり、そういった教訓がないとどうしようもないものがある。

(そういう事も伝えていかないといけないのかもなあ……)

成功に至るまで様々な失敗を繰り返す。

新しい挑戦とはそういうものだといいことを伝えていく。

それが今までになかったものを手に入れていくための通過儀礼になる事を教えねばならないのかもしれない。

もちろん、下手に新しい事に挑戦して今まで培ってきたものを否定するわけにもいかない。

失敗も、なるべく他に影響が出ない範囲での小さな所に限定する努力は必要だろう。

(どうやって教えていくかな……)

土を耕しながら、今後の事を考えていった。

培った農業などの技術を受け継いでいく事も含めて。

**5 歩目 よろやく土を耕せる（後書き）**

まだもうちょっとだけ続きを今日中に出したい。

できれば21:00に。

出なかったら、また明日という事で。

## 6 歩目 成長を見守るのも一苦勞だった

とにもかくにも大変な事だった。

虫が集り、動物が食い荒らしにきて、鳥が空から襲ってくる。

日照りや冷害におびえ、ちゃんと成長していつてるかを気にかける日々が続いた。

作物がちゃんとなるのをただただ待ち続けるしかない。

そんな日々が何ヶ月も続く。

(ちゃんと収穫出来るのかな……)

常にこの不安と隣り合わせだった。

獲物が獲れるかどうかを心配する日々とそれは変わらない。

栽培すれば食料確保は安定すると思っていたが、現実はそれほど甘くはなかった。

それでも、土から芽が出て、少しずつ茎を伸ばし葉っぱを広げていくのを見て安心をおぼえた。

せめて動物の侵入を阻止しようと、畑の周りに堀を作り、柵を設けて対処にあたった。

おかげでイノシシなどをつかまえてご馳走になったのは嬉しい誤算であった。

魚とあわせて、集団への貢献を果たしている。

それが命綱にもなっていた。

何の成果もなければ追放を覚悟しなければならぬのだから。

何の成果もあげられない者を何時までも抱えてるわけにはいかな  
い。

集団が成り立ってるのは、それぞれが食料を確保してくるといって成果をあげてるからだ。

もちろん何の成果もあげられない場合もあるが、それでも、いずれは何らかの収穫を手にしてくる。

そういう期待があるからこそ協力していた。

しかし、一ヶ月二ヶ月と何の成果もあがらなければそれも言っただけなられない。

狩りにしろ採取にしろやはり慣れや才能が求められる部分がある。人間、向き不向きがある。

どうしてもこれらに向いた才能や能力を持たない者もいる。

そういった者は、かわいそうだが集団から追放するしかない。

何も成果を得られない者が一人でもいれば、その分他の者達の負担が増大する。

そして、養えたはずの一人を、無駄飯くらいのために捨てなければならなくなる。

他の多くの為に少数を犠牲にするのも忍びない。

しかし、わずかな人数の為により多くの者達に負担をかけるのも許される事ではない。

それだからこそ、何も成果を上げられなかった者は集団から追放される。

ヒロフミも例外ではいられない。

畑を耕して将来の収穫を確保しようとしている。

しかし、そのための何ヶ月かの間、何の収穫もなしではさすがに問題になってしまうだろう。

あげた功績の大きさは無視出来ないだろうが、今現在の成果がなければ、集団の負担が大きくなりすぎる。

それを無視してまでかつての功労者を養っておく余裕は無いのだ。

それを考える事が出来たから、遠回りしてでも魚を捕獲するウケを作ったのだ。

(あれが無かったらどうなってたんだか)

少しでも足しになればと思いつつ作ったウケだが、それが今は集団にとって大きな救いになっている。

仕掛け罠なので確実な成果は期待できない。

しかし、放つておいても成果が得られる可能性がある。

それが受けて水の供給源である川は、同時に魚の捕獲場所にもなっている。

それが無ければヒロフミはとつくに放逐されていたであろう。

今は縄の作り方も含めて他の者に教え、更に多くのウケを作って広範囲に展開している。

一日で行き来出る範囲に限られるが、川のうちここに仕掛けられたそれは、かなりの漁獲量を示してきている。

正直、乱獲が心配になってもいた。

それも畑から収穫が上がるまでの間だけと思っではいる。

畑から作物がとれるようになれば、そこまで魚に固執する必要は無い。

魚を取り尽くす前に、収穫が来て欲しいものだった。

思わぬ成果として、作業分担がはつきりしてきた事がある。

麻から縄を作り、縄を使って他の道具を作る。

それを一人で全部やるとしたらとても手が足りなくなる。

幸い、食料供給が比較的手軽に安定して行えるようになったので、人手が余るようになった。

それを利用してヒロフミは、手の空いた者にこれらの作成をさせていった。

特に狩りや採取で成果を上げられなかった者に優先して作業をさせた。

工作作業の才能があるかどうかは分からなかったが、それでも構



わなかった。

狩りなどで無駄になつてる人手を有効活用しようという、言つてはなんだが廃品活用程度の気持ちでいた。

狩りなどで成果をあげてる優秀な人材を引き抜くわけではないから、軋轢や衝突も発生しない。

もちろん、放逐するつもりだった人間、つまりは無能と判断された者達を確保する事で怪訝な目で見られはした。

無駄が増える、無駄飯くらいを困つて、といった不満も聞こえてきた。

しかし、多少時間はかかるにしても、やり方をおぼえてくれれば他の者が助かる。

縄を作り、それを用いて道具を作る事で他の者も助かる。たつたそれだけの事で、放逐される者達が生きてきている。

また、作業に専念する者が出来た事でより巨大な、手間のかかる道具作成にも乗り出せる。

縄を網にして狩りに使つたり、漁に用いる事も出来る。それでも手が余るなら、石斧を持って木を切り倒して木材を確保しにいける。

それは今までにない新しい作業分野の誕生であつた。

原始的な形であるかもしれないが、職人の誕生である。

これらもたらした生活環境の改善は大きく、以前に比べれば快適な環境が手に入るようになった。

定住する事で移動という負担が極限まで減少し、定位置にて活動するようになった。

これにより失われたものも大きいだろうが、得られたものもまた大きかつた。

定住する事で妊婦の負担が減り、子供の出産・育児の手間がかなり減少した。

それでも医療が未発達な状態の事、乳幼児死亡率の高さは大きい。まともな育つ子供はなかなかいない。

十人産んでも成人するのは二人かそこらという状況である。なのだが、それでも移動しないでいられるという事は利点が大きいようだった。

確かに子供を引き連れて移動するのは大きな負担だし、そんな事をしないで済むというのはかなり大きい。

心なしか出産数が増えた気もした。落ち着いていられるというのは大きいのかもしれない。

畑につきつきりで集団の事も身近で見える事が多くなったヒロフミにはそう思えた。

結果として人口が少しずつ増えていつている気がした。

もつとも、そうはつきりと分かるほど確りとした人口統計があるわけではないが。

(そのうち、記録もとれるようにしないといけないか)  
その為には紙や墨が必要だが、当分の間はそれは期待できそうにない。

ならば木の板などに彫り込む事を考えるが、その為の金属製品がない。

(採掘とか金属加工も必要だな)

記録するというのが意外と大変なのを知った。

あらためて、文明というのはとても偉大なのだを知る。

もつとも、そんな先の事より目の前の畑からの収穫の方が重要である。

まずはそれをどうにかしないといけない。

ここで失敗したら、大きな後退を余儀なくされるかもしれない。

(どうか上手く作物がなりますように……)

やる事をやっただけに、あとは祈るしかなかった。

**6 歩目 成長を見守るのも一苦労だった（後書き）**

22:00にいけないか？

もうちよつと頑張ってみたいと思う

## 7 歩目 成果があがれば人が割り振られてくる

「……良かった」

目の前の畑でなつてる作物を見て、ヒロフミは安堵をおぼえた。気が気でなかった数ヶ月がこれで報われる気がした。

ありがたい事に作物は順調に育ち、それなりの収穫となった。もちろん全てを刈り取るわけではない。

今後の事も考え、幾らかは種にして来年に向けて補完していく事にする。

それでも結構な漁の収穫になったので、十分に他者達に分け与える事ができた。

そこからが大騒ぎだった。

何をしてるのかと思っていたヒロフミが大量に成果をあげてきたのだ。

他の多くの者達は驚きのあまり硬直していった。

「こりゃ、えらいこつちゃ」

集団の長はそう言つて呆然と収穫物を見つめていった。

おかげでヒロフミは遠慮無く申し出る事ができた。

「来年はもつと大きく収穫したい。

そのために、畑を拡大したい。

でも、一人じゃ無理だ。

一人でも二人でもいい。

作業を手伝ってくれる人間が欲しい」

今後、安定した収穫を得る為にも何人かには農作業をしてもらいたい。

そのためにも、後進を育成せねばならなかった。

ただ、すぐに受け入れられるとは思ってもいない。

一人か二人でも良いから、とにかく誰かが手伝ってくれれば、と思った。

だが、今回の成果は本当に大きな衝撃を与えたようで、

「おお、かまわん、かまわんぞ。

どんどんやってくれ！」

と集団の長は乗り気だった。

成果を見た者達も、これだけのものが得られるならばと思ったのだらうか。

我も我もと名乗りをあげてきた。

そんな希望者の中から選抜するのに一苦労となってしまうた。

なんとか人を選び終わり、二人が新たに農作業に入る事となった。

その二人と共に、春の種まきまでにより大きな畑を作っていく。

石器の鍬なども用いて可能な限り作業を進めていく。

野菜を育ててない間もやる事は多い。

そして、貯まった経験値を用いて必要な技術も会得していく。

自分自身の技術を上げたいところだが、今回はそうもいかない。

教え子となった二人に技術を伝えていくための技術を身につければならなかった。

『教育』がヒロフミの技術に新たに加わる。

また、よほどがんばったのか、この年はより多くの経験値を得る事が出来た。

それを用いて、『陶器』の技術も身につけた。

水を汲んでくるのに役立つし、調理にも使える食器が欲しかった。

これはさすがにすぐに手を出す事は出来なかったが、将来を見越して用意しておいた。

来年の収穫が終わったら、そちらに取りかかる為に。

ただ、急激な技術・知識の向上がどうしても頭打ちになる。ヒロフミの方の問題ではなく、人手が足りなくなったのだ。

まだまだ狩猟に人数を割かねばならない状況ではどうしようもない人口が増えていけば良いのだが、今いる子供達が順調に育つにしてもあと数年は待たねばならない。

これから生まれる子供達については、それこそ十年以上の時間がかかる。

その間は、数十人の人数の中でやりくりするしかない。

生活環境が改善され、死亡率も減ったであろうが、発展するにはまだまだ時間がかかる。

更なる発展のために必要な人的資源を得るには、これから二十年三十年という時間が必要だった。

世代も三世代四世代と重ねていかねばならない。

さすがに一代でこれ以上を求めるのは無理があった。

(とりあえずはここまでか)

この世代におけるヒロフミの役目はこのあたりが限界のようだった。

もちろん、全てが終わったわけではない。

ヒロフミが積み上げたものを次の世代に渡していかねばならない。教育して、技術を継承させ、途切れる事無く続けさせねばならない。

そうしていくなかで、改善や改良もさせていってもらわねばならない。

他の誰の為でもなく、この場にいる者達自身の為に。

次の世代あたりが更に発展する為の仕込みをこれからしていく必要がある。

単純な技術の開発やその確保だけではない。

内部の、精神的な部分の充実をはからねばならなかった。

(考え方をどうにか出来ればいいんだけど)

先々の事を考え、次の一手のために今何をやるかを考えるように。少なくともそれを大事に出来るような考え方を。

思想や思考といったものにある程度の方向性を与えたかった。

もちろん統制や独裁をするためではない。

よりよい方向を示し、悪い方向へ向かっていかないように。

善悪と言っても良いかもしれない。

進めば発展と繁栄がある善なる方向と、陥れば衰退して滅亡するしかない方向を。

それをどうにかして示し、今後の発展につながるようにしたかった。

(何か良い方法ないかな)

やるのはまだ少し先になるだろうが、適切な方法がないか能力表と見ながら考える事になりそうだった。

そんなヒロフミに予想外の話が舞い込んでくるのは、冬が終わって種をまく季節が近づいて来た頃だった。

**7 歩目 成果があがれば人が割り振られてくる（後書き）**

続きは明日。

何話か公開出来れば良いのだけど、ちょっとどうなるか分からない。

可能な限り活動報告やツイッターで時間をお知らせ出来るようにしたいと思ってはいるけど。

現状ではどうなるか分からない。

なるだけ頑張っていくので、ご了承ください。



## 8 歩目 なんとびっくり、嫁取りとあいなった

「何ですかいったい」

集団の長に呼び出されたヒロフミは、用件を尋ねた。

畑の拡張や整備が終わっていたので余裕はあるが、わざわざ呼び出される理由が思いつかない。

小さな集団なので、この中の最高位である長とも顔見知りではある。

だが、重要な話し合いに呼び出されるほどではない。

(何の用だ?)

そう思うのも無理はない。

そんなヒロフミに長は思いも寄らない事を言い出した

「どうだ、嫁をとらないか？」

言われたヨシフミは何を言われたのかを理解するのに時間をかけることとなった。

当たり前と言えば当たり前だが、出来る奴にはさっさと結婚させようというのがおおかたの考えである。

たいていは狩りが出来るやつだったり、力が強い奴だったり。

この状況で生き残れる奴がそれにあたる。

評価基準は簡単だ。

『食べるものをより多く持ってくる者』

言い方を変えるなら、

『より多くの稼ぎをあげる者』

となるだろう。

世知辛い話だが、おかれた環境は世知辛いどころではないから仕方ない。

(まあ、それもそうだろうけどさ)

ヒロフミもそのあたりは理解をしている。

かつての文明社会であっても、家族を養っていけない者が結婚しても破綻が待ってるだけだ。

自分一人だけの食い扶持だけしか稼げないなら家庭を持ちようがない。

ましてこの世界ではそう簡単に稼ぎ(食料)を増やす事が出来ない。

生き残る才覚がかつての文明社会以上に求められる。

言ってみれば、究極の能力至上主義である。

格差社会の究極形態とも言える。

ヒロフミはそこにあって、超優良物件なのだろう。

何せ、稼ぎが他の者達に比べて頭何個も抜けている。

さつさと嫁をとらせておこうという考えも頷ける。

そうしなければならぬ切実な理由もあるのだから。

一番の理由は、より多くの子供を産んで育てる事にある。

死亡率が高い状況なので、子供はなるべく多く欲しいのだ。

もちろん子供が可愛い、という素朴な、そして本能的で純真な想いもある。

否定される事の無い要素である。

しかし、子供がもたらす効能もまた大きい。

要するに次世代の担い手である。

今だけ良くて、次の世代が存在しなければ滅びる。

誰もがそれは避けたいと願っている事である。

また、もつと単純に労働力の確保という意味でも新しい命は必要なのだ。

どうしても話が世知辛くなるが、新たな誕生がなければやがて確実に行き詰まる。

それを打破するためにも、確実に稼げる者が家庭を持って家族を  
生み出して養わねばならない。

特に狩りが主流な現状では、獲物を捕りに行った者が死ぬ可能性  
が非常に高い。

そうなった場合に発生する損失の大きさを少しでも減らす為にも、  
次の世代になる子供がいないと困るのだ。

全てが存続と滅亡のせめぎ合いの上で成り立っている。

稼げる者が養っていかないとしようがないのだ。

本人の気持ちもあるだろうが、それ以前に生きるか死ぬかの二者  
択一がある。

それを無視出来るわけもない。

「まあ、そういう事なら」

事情を理解しているヒロフミも特に断る事は無い。

そういう話が来たのならば受け入れる事もやぶさかではない。

ただ、相手を多少は選びたかった。

選択肢などほとんどないが。

「で、誰を嫁にとれと？」

「それがな、つがいのない女のほとんどがお前を指名している」

「はい？」

「その中からお前が『これぞ』と思った者を選ぶがよい

あつさり言ってくれる長の声に、ヒロフミは再び呆然とした。

まさかそんな事になってるとはおもってもいなかった。

(なんちゅう贅沢な事を)

そう思わずにはいられない。

それだけの成果をヒロフミはあげたのだ。

そんなわけでヒロフミは嫁をめとる事となった。

立候補してきた五人の中から一人を選び、夫婦となる。

結婚とか式を挙げるといった考えがないので、顔合わせをしてから、

「これからよろしく」

「こちらこそ」

と言って終わりといったものだった。

ただ、これでもにもかくにも所帯をもつ事となった。

より大きな責任を負わねばならない。

嫁となった女と、生まれてくる子供達の間である。

おまけに長やその周辺からは、

「早く二人目の嫁をもらえ」

「三人目もがんばれよ」

などと言われる始末である。

稼いでる奴がより多くを養うのが義務というような面がある。

嫁を多くめとるのは推奨される事であった。

(やれやれ……)

人のいない所のため息を吐く事が多くなる。

だが、収穫の工場は望む所である。

春が来て種まきが始まると同時に、今年の収穫を目指しての行動が始まっていった。

**8 歩目** なんとびっくり、嫁取りとあいなった（後書き）

たくさんブックマークありがたい。

書ける所までどんどん書いて行きたいもの。

本日、更に続きを出す予定。

次は18:00に公開するのでよろしく。

## 9 歩目 もっと拡大したいが今は無理、だったらどうするか

田畑を耕しながら新人達にやり方を教える日々が続く。

何せ完全な素人なので全く何も出来ない。

農業そのものがこの世界では完全な新技術なので見本もない。

全てが一からやらねばならない状態だった。

どうしても根気強く教えていく必要がある。

手間と面倒は一人でやっていった時以上になった。

人が増えれば楽が出来ると思っていたが、これは完全な誤算だった。

いや、手間がかかる事は分かっていた。

教えるというのが難しい事も。

しかし、知識として理解してるのと、実際にやってみて直面する問題と困難は簡単に比較出来るものではなかった。

予想以上に大変な事に、ヒロフミは天を仰ぎたくなった。

しかし、それでも教えてやり方を理解すれば楽が出来るようになる。

ヒロフミの目から見ればまだまだ不完全ではあるが、教えた事は忠実に実行してくれる。

その分だけヒロフミの手間も省け、他の事に時間を割けるようになる。

最初の二ヶ月三ヶ月ほどは大変だったが、多少は目処がつくようになった。

余裕が生まれれば考える時間も出来てくる。

その時間でこれから先の事を考えていった。

次に何をやるべきかを。

とりあえず畑はもう少し広げようと思った。

新たにやってきた二人を加えて仕事をしてるが、まだ余裕がある。実験的な部分もあるので畑の広さはさほどでもないから、もう少し拡大しても十分にやっていける。

それに、すぐに使う事はなくても、少しずつ整地や整備をしていきかかった。

今の人口ではそれらを引き受ける事が出来る人間がいないが、これからは違う。

新たに生まれてきた子供達が成長した時に譲り渡せば良い。

十年以上先の事になるが、畑を作る労力を考えると早めに行動しておいた方が無難だった。

また、栽培する品種をもっと増やしていきかかった。

それを発見する為に探検に行く必要がある。

その為には、畑からの生産をとにかく高める必要があった。

自分が外に出ても困らないように。

これについても何年も先の事になると思っていた。

もしかしたら、子供に畑を任せられるようになってからかもしれない。

と同時に、どうしても確立しなければならぬ事があった。

規律である。

人がより集まって生活してる以上、どうしても規律は必要になる。何をしたら悪いのか、悪い事したらどうなるのかを制定しなくてはならない。

その逆に、何をしたら褒め称えられるのかも決めておかねばならない。

今はまだヒロフミに従ってくれてるが、この先ずっとそうである

とは限らない。

ヒロフミが頂点に立つつもりもないが、得た利益を横取りされた  
くはない。

そのためにも、誰が何を持っていて、それを侵害してはいけない  
という所有の考え方をはっきりさせておきたかった。

また、自分も他人も尊ぶという事を規律を通してはっきりと確立  
したかった。

それが無ければ、無法地帯になってしまう。

(どうしたら良いかな……)

悩んでも答えはなかなか出てこない。

やむなく能力表を開き、技術を成長させる。

配下についた二人を教える事なども経験として勘定されてるよう  
で、経験値の増加が早くなっている。

おかげで収穫まで間がある時期にレベルアップに必要な経験値に  
到達していた。

(じゃ、これを上げるか)

そう考えて技術を成長させる。

選んだのは『教養』

これでレベル2となった。

途端に様々な考えがまとまり、再構築されていく。

その上で様々な可能性を考え、成功しそうな方法を模索していく。

(そうすると、これでいった方がいいのかな)

出て来た答えをからヒロフミは最も成功率が高そうな手段を実行  
する事にした。

翌日。

家を出る前、畑についてから、昼の休みにと。

ヒロフミは手をあわせて祈り始めた。

「何をしてるんですか？」



最初は一緒に家にいる嫁から。

そして部下の二人から。

同じ質問をされてヒロフミは答えた。

「お願いと感謝をしてるんだ」

言われた者達は首をかしげた。

**9 歩目 もっと拡大したいが今は無理、だったらどうするか（後書き）**

本日中にまた投稿したいと考えてる。

これを投稿してる時点ではまだ書いてる途中だけど。

出来るなら19:00や20:00に投稿したいと考えている。

10歩目 回りくどいと思うが、こんな方法しか思いつかなかつた

これにどれだけの効果があるかは分からない。

しかし、考えに考えた結果 というよりレベルの上がった『教養』のもたらしてくれた成果としてこれが出て来た。

それが祈りである。

といつても別に信仰に目覚めたわけではない。その点においてヒロフミは前世と変わらぬ日本人らしい考えをもっていた。

困れば神頼みをするし、お祭り騒ぎはありがたく楽しむという事になっている。

教義などに興味はなく、神の存在など果てしなくどうでもいい。罰当たりというか、悪さはさすがにしたいと思わないが殊更神様とやらの服従したいとは思わない。

実際に神というか造物主なる存在と対面し、こうして転生までできてこそそれは変わらない。

本当にいたからといって、それで仰ぎ見るような事はしない。

そういうつもりにもなれなかった。

だが、使うには便利な存在ではある。

そして、祈りというのは簡単にできて、しかも意外に影響力があるようだった。

何日も続けていくうちに、他の者が気にしだし、理由を聞いてきた。

待ちに待った瞬間である。

「いやな、ちょっと思いついてな」

そう言って切り出したヒロフミは、もの凄く簡単に説明をしていた。

「今、こうして生きてるのも、お天道様と大地からのお恵みあつての事だからな。」

それに感謝をしておこうって思ったんだよ」

魚がとれたのも、畑を作って栽培をはじめたのも、言ってみれば偶然である。

だけど、その偶然がもの凄く大きな成果になっている。

たまたま気づいて、たまたまやってみようと思ったけど、こうなるとは思ってもいなかった。

「なんでそうしようと思ったのか自分でも分からん。」

けど、何かに導かれてるような気がしてな」

もちろん嘘である。

そんなものはない。

強いて言えば、身につけた技術が様々な事を教えてくれたのがそれにあたるかもしれない。

しかし、必要な情報を手に入れる手段として技術を用いてはいるが、それらが自発的に助けに来てくれるわけではない。

あくまでヒロフミがそれらを使ってるから成果となってあらわれるのだ。

おとぎ話のように、見えない何かに導かれたりしてるわけではない。

だが、あえてそういう設定にしておく事にした。

「もしかしたら、何かが俺に教えてくれてたんじゃないかなあつて思っただよ」

「だから、感謝をしたの？」

「ああ、そうだ。」

いるかどうか分からないけど、もしいるんなら『ありがとう』って言った方が良いと思っただよ。」

ついでに、今後も上手くやっていきますようにって」

「お願いも？」

「そうだ。」

かなうかどうか分からんし、そもそも頼む相手もないだろうけどな。

でも、そういう事をしておいたら上手くいくかもしれない。

そう思うと少しは気分が楽になるからな。

何もしないよりはありがたいわな」

「なるほど」

納得したのかどうかは分からないが、聞いてきた者はたいていそう言った。

それから程なく、何人かが手を合わせるようになった。

いわゆる合掌である。

そして日々の生活が順調にいつてる事への感謝と、これからの生活が順調にいくよう願い始めた。

(よしよし)

上手くいつてほつとした。

これらが本当に意味を持つ事はないだろう。

ほとんどヒロフミによる出任せなのだから。

しかし、より大きな存在がいるかもしれないと思い始めてくれば良かった。

大切なのは、守るべき何かがあると各自が自覚していつてくれる事。

祈るのはそのきっかけを作る為である。

それからのヒロフミは、何かを教えるにしても、提案をするにしても、

「それが理にかなってると思っんですよ」

と言いだめた。

「上手く言えませんが、それがこの世で生きていくために適してると思っんです」

言葉に、自分すらも従ってる何かがあると含めていく事で、周り

の者達に少しずつ意識をさせていった。

毎日何かしら事あるごとに。

繰り返し返すというのは、浸透させるための基本的な手段である。

時間はかかるが、効果は大きい。

更に、

「俺もそういうのに従ってやってるんですが、それでこの成果ですから」

と理由を付ける。

誰もが「それならば」と納得していくようになれば儲けものだった。

そして最初に戻って言うのだ。

「だから、お願いと感謝をしてるんだ」

これで他の者も何となく理解してきたようだった。

ヒロフミも好き勝手にやってるのではなく、何かしらに従って活動してると。

そうなれば、好奇心の強い者がそれについて質問をしてくる。

「じゃあ、それはいつたいなんなんだ？」

「この世の理と云うしかないですね」

ここまでやってくるのに結構な時間がかかった。

「やり方とか色々あるんですけど、正しい方法というのがあるみたいですよ。」

それから外れたら、絶対に失敗するってというのが

「へえ、そんなもんなのか？」

「少なくとも、魚の取り方とか、縄の作り方とか、畑で作物をつくる時にはそうですね」

実験をもとに説明をしていく。

「ウケは魚が入り込んだら出られなくなる性質を使っています。」

縄も、麻の丈夫さと、編み方を統一して作っています。

畑の作物だつて、種を植えて芽が出る時期と、作物自体がどうやって育つかに基づいてやっています。

それを損なつたら、成功するはずがありません」

「まあ、そりゃそうだろうな」

話を聞いた者達はたいていそれで納得してくれた。

「それと同じで、人にも守らなくちゃならない事があるんだと思います。

たとえば、やり方を教える時。

教わる方が教えた事を無視していけば、絶対に成功する事はないでしょう。

最初から上手なやり方を身につけてないかぎりは」

「まあな。

狩りだつて、やり方を教えてもらわなくちゃ上手く出来ないし」

「他にもそういうのがあると思うんですよ。

たとえば……」

そう言つて実際に見聞きした事から考えた事などを話していく。

聞いている方も実際に見聞きしてる事とその結末を思い出し、納得をしていく。

そうした話の中で、少しずつヒロフミは規律についても混ぜ込んでいく。

「人の物を盗んだらまずいですよ」

「騙して奪つてはいけませんよ」

「嘘をつくより正直に話しましょうよ」

「罵つたり挑発したら殴られるのも当たり前じゃないですか」

「勝手にものを持っていったりしたら、後で返してもそりゃ許せませんよ」

「人を傷つけたなら、やり返されても文句は言えないじゃないですか」

当たり前と言えば当たり前な事を連ねていく。

だが、今まではつきりとしてこなかつた物事が分かりやすく説明

されていく事で、確実に定着していった。

聞いている者の頭や心に。

「これが俺達を守らなくちゃいけない理だと思っんです」  
祈る事から始まって、ヒロフミはそこまでこぎ着ける事が出来た。  
自分だけの独りよがりではなく、皆が守らなくちゃならない決まり事。

しきたりや掟と呼ばれるようなものが発生していく。  
少なくとも、それが少しは意識されるようになった。

それも誰かが決めた事、という形はとらない。

知らず知らず皆が守ってきた事を意識させたのだから当然ではある。

ヒロフミが口にしたのは、言葉や形にしなくても何となく皆が守ってきた事ばかりである。

「俺もそれに従ってるだけですから。」

それが俺達人間の理だと思っんです」

そういう形にする事で、ヒロフミの発案ではない、他の誰の意見でもない印象づけた。

実際にその通りなのだから何も問題は無い。

人が衝突をせず集団を形成するための最低限の取り決めである。

それを改めて浸透させただけである。

(でもまあ、これで上手くいくかな)

伝えたい事をはっきりと形にする事で全員が自発的に規律を守り始めていく。

そして規律を踏みにじった場合には、他の全ての者が非難する流れになっていく。

ある意味相互監視の状態になっていった。

(あとは上手く発展していつてくれると良いけど)

こればかりはどうにもならない。



せめて最善の結果が出るよう願うしかなかった。

最初の出発点にはなれても、その後の発展については予想出来ない。

生きてる間は目が届くかもしれないが、死んでしまえばどうなるか分からない。

寿命が来たあとについては、次の世代に任せるしかないのだ。

だが、今はその道筋を作るのが仕事であろう。

(あの野郎が求めてるのつても、こういうのはずだしな)

造物主と名乗っていた存在を思い出し、そう考えていった。

指導者として最低限の事はやってるはずだと。

10歩目 回りくどいと思うが、こんな方法しか思い浮かばなかった(後書き)

もうちょっと続きを今日中に書いていきたい。

出来るかどうか分からないけど。

駄目だったら明日以降に投稿する。

## 11 歩目 それでは二人にも嫁を抱えてもらおう

祈り始めてから最初の大事事となった収穫。

その成果に感謝の祈りを捧げ、形式を作っていく。

見えやすい方法というのは訴えかける手段として最善である。

それを行い、日々の生活の事あることに何かしらの形式を入れていく。

とにかく他の者達の印象づけていく必要があった。

そんな形式が大事なのではないが、あると便利な勧誘手段なので利用していく事にする。

一方で実務もしつかりと行っていく。

畑の方は二人が仕事をおぼえてくれていたので、目を離してもあまり問題がなくなった。

ヒロフミがない所ではサボってるかもしれないが、その場合は自分達が食い扶持を失うという問題を抱える事になる。

それぞれ担当する畑を割り振っており、出来たものはそれぞれが手に入れる事になっている。

手を抜いて損をするのは本人だけだ。

その場合、例えば泣きついてきても取り合う事はない。

自業自得という事をはっきりと体験してもらう必要がある。

幸い二人はそこまで愚かではなく、実入りは相応のものになった。因果応報が良い方向で表れてくれた。

おかげでヒロフミは、集団の長に自信を持って進言する事が出来た。

「あの二人に嫁を寄越してくれ」  
再び嫁をとらないかと打診されたヒロフミは、逆に二人を推挙した。

これは長もびつくりしたようで、かなり驚いていた。

「本気で言ってるのか？」

「当たり前でしょ。」

あの二人がどれだけががんばったのかわからないわけじゃあるまいに

「そりゃあまあ………けど、本当に大丈夫なのか？」

「まあ、今年と同じ調子で来年も頑張ってくれば。」

それでも、天気とか次第じゃどうなるかわからないですけどね

「それでも、あいつらに嫁を？」

「何が問題ですか？」

来年、あいつらが失敗するとしても？

だったら俺も同じですよ。

誰かだけが失敗するってわけじゃない」

慎重になる長の気持ちも分かるが、ここは上手く押し通したかった。

確かに女は欲しい。

ハーレムには憧れる。

しかし、今はまず人手の確保が急務でもある。

それなら、二人が嫁をもらってくれた方が効率は良い。

ヒロフミが二人三人を相手にしても限界があるのだ。

まだしも二人が嫁をめとった方が次世代が誕生する確立は高い。

何より、野郎共のやる気が変わってくるだろう。

『女房と子供のためにもがんばらないと』という気概がわいてくるのはヒロフミ自身が体験している。

同じ事が二人にも起こる事を期待したかった。

「そんなわけだから、あの二人に嫁をめとらせてやってくれ」

「ううむ、しかしなあ」

「何か問題でも？」

「お前の言いたい事は分かるがなあ。

出来ればお前にも二人目をめとってもらいたい」

「おいおい……」

そこまで粘るか、と思った。

ありがたい申し出ではあるのだが。

長からすれば、やはりヒロフミに新たな子供をもうけてもらいたいという想いがある。

昨年もそうだったが、今年は人を指導して成果をあげている。

これはこれで大きな快挙である。

自分一人だけが優れてるのではなく、人を教導く事が出来るというのが大きな才能だ。

それを発揮してくれる者には、やはりそれだけの大きな実入りが期待出来るのでは、という思惑がある。

女の方からしても、食べる物を確実に手に入れてくれる者が魅力的にうつる。

嫁にいける者達の多くがヒロフミを名指ししてるのだから。

そちらからの願望も無視するわけにはいかない。

これを断られては長の権威が疑われかねない。

どうしてもヒロフミには受け入れてもらわねばならなかった。

長も引くに引けない事情があるのである。

結果として。

二人は見事に嫁をめとる事となった。

自分には無縁だと思ってたらしく、この話を持っていった時にはなかなか信じなかった。

しかし、長がはつきりと言ってくれた事で真実だと納得した。

それからは狂喜乱舞の有様だった。

それだけ嬉しかったのだろう。

ただ、ヒロフミももう一人嫁をめとる事にはなつた。

さすがに長の方もこれは妥協できなかったようだ。

出来ればもう一人、という所をどうにかこうにか一人に絞つてもらつた。

「どうにかならんのか」

と泣きついてくる長を、

「余裕があれば来年にでも」

と言って避けるのが精一杯であつた。

もっとも、問題を来年に持ち越しただけでも言える。

来年になつてやはり「嫁にもらつてくれ」と言ってくるかもしれない。

その時はさすがに逃げようがない。

出来れば一年の間に他の誰かが嫁にもらつてくれれば、と願うところだつた。

その望みは現在の所かなり薄いが。

(でもなあ)

さすがにそこまで負担はできないと思いつつも、未練が残る。

(ハーレムだよなあ。)

出来ればやってみたいもんだ)

男として挑戦せずにはいられない何かがあつた。

11歩目 それでは二人にも嫁を抱えてもらおう（後書き）

一話書いたらそのまま次にうつり、数を稼いでいく。

そんなわけで誤字脱字が減らない。

読み返せば良いのは分かってるが、そんな精神的な余裕が無い。  
良い子のみんなは決して真似してはいけません。

そして、続きだが、果たして今日中に出せるかどうか。

さすがに疑問である。

出来るだけやっていきたいが。

まあ、こればかりは期待しないでいただきたい。

なお、ブックマークに評価点ありがたい。

まさかこれだけでもらえるとは。

感想や誤字脱字の報告も嬉しいもんです。

## 12 歩目 新たな嫁と、新たな命と、新たな展開と

そして収穫期である秋も深まり、冬がやってこようとしている。

新たに嫁をもらった二人と共に、更なる畑の拡張に勤しむ。

三人で手が出せる限界を知る為でもあるし、これから増加していく人口（主に三人の子供）に割り当てる為でもある。

もちろん三人だけでなく、他の家庭で生まれた子供達も参加しても良い。

現在、畑は常に拡張を目指している。

集団全体の人口増加も見込んで、今のうちに広げるだけ広げたいところだった。

食糧事情の改善も果たしていきたい。

特に一人当たりの栄養状態は確実によくしたかった。

今のままでは病気になった時の抵抗力すらも期待出来ない。

単なる風邪であっても、命を失う危険があった。

薬もないようなこの状況において、病気や怪我は死に直結する災難である。

それをどうにかするには文明を更に発展させていくしかない。

その為の土台作りを今やってる最中であつた。

そんな中で、ヒロフミの家において色々な変化が起こっていった。

まず、新たな嫁を迎えるにあたり、家を一つ用意した。

同じ家に二人も嫁をかかえるわけにもいかない。

家が狭いのでこれは仕方が無い。

また、やはり嫁同士だと争いが発生する。

仕切りも何もない家の中で顔を合わせ続けるのは問題が起こりやすい。



なのでどうしても家を新たに用意するしかなかった。幸い、それだけの余裕は村にもあった。

畑からの収穫で、狩りにいかなくても食料は確保出来る。

それで余った人手を用いて家を造る事にした。

それも二軒。

もともとの家を加えれば三軒となる。

一件が新たな嫁のためのもので、もう一件がヒロフミ用のものである。

隣接して建設するので、実質的には部屋を増やしたようなものだった。

こうでもしないとどちらかと一緒に時間が出来てしまい、もう一方の不満がたまる事になる。

それに、どうしてもこうしておかねばならない事情もあった。

第一夫人の方が出産を迎えようとしていたのだ。

子供の育成のためにも、変に騒々しくするわけにはいかない。彼女が子供を育てるのに専念出来る環境を作る必要があった。

そんな準備を進める一方で、ようやくとりかかれる事があった。土器の生産である。

今の状態だと、食料にしても水にしても、保存しておく手段がない。

調理らしい事も出来ず、野菜にしる肉にしる、火に直接あてて炙るしかない。

そこから少しでも脱却したかった。

幸い技術があるからある程度はどうにかなる。

畑の拡張をする傍ら、様々な形の土器を作っていく。

水を溜めておけるもの、肉などを入れておけるもの。

収穫した野菜を入れておくためのものなど、とにかく様々なものを作っていく。

それらによって水を補完する事が出来るようになり、生活水準は更に向上していった。

水を汲んでくる手間はかかるが、それでも一々川まで出向く必要がなくなる。

それが大きかった。

そして、その土器を使って産湯をつかわせる。

それすらもろくに出来なかった今までに比べれば大きな違いだった。

初めて生まれた自分の子供為だけではなかったが、こういう使い方もあるという事を周りに示す事にもなった。

煮沸消毒が出来るようにもなった事を示しもした。

衛生観念がほとんどない状況にそれを持ち込む事が出来た。

良くを言えば、風呂なども作りたいたのだが、さすがにそこまでやる技術力がない。

それは何世代も先の事として今は諦めるしかなかった。

身近な所では、調理法に『煮る』が加わった。

焼く・炙るだけだったから、幅が大きく広がる。

これで豆なども柔らかくして食べられるようになった。

(あとは、米だな)

元日本人としては、やはり外せない。

稲は既に見つけていたのだが、調理法が無かったので放置するしかなかった。

それに、農業としても田を作らねばならないので手間がかかる。

とりあえず今の人数ではどうにもならない。

せめて三倍五倍くらいの間人がいなければお話しにならないだろう。

ヒロフミがかなり改善をしているとはいえ、まだまだ足りない所が多い。

それを一つ一つ解決していくにはまだまだ時間が必要だった。

そして、冬の畑作りの最中、ヒロフミは新たな技術を得ていく。

出来れば農業などの他の技術を上げたかったのだが、それよりも先と思っていたものである。

それを身につけると、今度は開けた平野の一部を柵で囲い始めた。その周囲には堀を作っておく。

動物からの襲撃対策である。

また、柵の内側にも段差をつけ、中から外に出られないようにしていく。

そこに、畑を狙ってやってきた動物を入れていく。

特にイノシシを。

これなら外に逃げ出す心配をほとんどしないで済む。

今までは捕らえたら食料にしていただけであるが、これからは違う。

『飼育』という新たな技術を用いて今度は牧畜を始めていくつもりだった。

12歩目 新たな嫁と、新たな命と、新たな展開と（後書き）

さすがに今日はこれ以上無理だろうと思う。

続きは明日以降

19:00とか20:00あたりに出そうとは思ってる。

しかし、ここにファンタジーのようにモンスターとかを加えられればとか思ってしまう。

### 13 歩目 他愛のない約束

イノシシの飼育がはじまり、食料生産は更に安定を増した。広い土地が必要になるが、それは順次拡大する事で対処する事となる。

さすがに一度に作れる牧場の広さは限られており、一気に必要な広さを確保する事が出来ない。

それには、今まで狩りに出ていた者が対応する事となる。

成績をさほど上げる事が出来なかった者であり、そのあたりは畑を耕して二人と境遇は似ている。

狩りの成績は幾分畑組の二人よりは良かったが、満足行く成果にはほど遠かった。

その為、飼育の方に回された時には、少しばかり安心しているように見えた。

役立たずとして追放される事がなくなり安心して居るのかもしれない。

ともかく、これで新たな人員の確保も出来た。

手に入れた技術が教えてくれる飼育方法を早速教え、牧場経営を安定させるようつとめていく。

もちろんすぐに出来るようになるわけではないが、そこは根気強く付き合う事で解消していく事にした。

ありがたい事に畑の方は二人が頑張ってくれている。

昨年一年の成果が出ていた。

細かい所は心配であるが、それでも二人にある程度任せてヒロフミは牧場の方に専念する事にした。

何かあれば相談してくれれば良いし、大概の事は二人に任せても

問題はない。

この一年頑張ってくれば、来年あたりは何も言わないでも大丈夫になるかもしれない。

そんな期待を抱けるくらいに二人の成長はめざましい。  
ヒロフミもつかうかしていらなかった。

飼育の方も様々な失敗と共にやり方が分かるようになっていった。イノシシたちの生活環境のととのえ、どんな生き方をしているのかを見極め、育成を進めていく。

その間に、畑の周囲の堀にはまるものも出てきて、数は順調に増えていった。

その中には雌や子供のイノシシもあり、将来の安定した増加も期待できそうだった。

その為に必要な飼育場所を考えると、早急に牧場の拡大が必要になったが。

ただ、これがかなり難しかった。

場所を確保するために柵が必要で、そのために木材を切り出さなければならぬ。

しかし、石器ではそう簡単に伐採も出来ず、どうしても限界が生まれる。

必要な数が揃うまで時間もかかり、拡張に歯止めをかけてしまう。やむなく、ある程度の数になったところでイノシシの確保は打ち切りとなった。

その後には捕らえられたイノシシは、他の動物同様に食料として処理していく事となる。

そうだった作業と前後して、無視出来ない問題も出てくる。

家にしろ柵にしろ、木材を切り出しているのだから当然平地が増え

ていく。

それは良いのだが、だんだんと樹木が周囲から減っていった。まだまだ森は生い茂り、そうそう無くなる事は無い。

しかし、このまま人口が増えれば、いずれ近くの森を平地にしてしまふようになる。

対策として植林も考えていかねばならなくなってきた。

幸い植物知識があるので、ある程度のやり方は分かる。

しかし、レベル1では大した事は分からない。

あらためて経験値をどこに割り振るかを考えていく必要が出てきていた。

仕事の事だけ考えてるわけにもいかない。

新たに生まれた子供の世話も重要な仕事である。

そちらは集団の女性陣が中心になって世話してくれている。

男の出る幕はほとんどないが、それでも一日一回は様子を見に行っていた。

何せ乳幼児死亡率が高い時代である。

ちよつとした変化も見逃せなかった。

とにかく無事に生まれることをひたすらに願っていく。

医療が全く無いので、それしか出来る事がない。

あとは、可能な限り栄養状態を良くしておくために、食料の確保をしつかりするしかない。

その為にも畑を広げていきたいが、どうしても作業員の数のために生産が頭打ちになってしまっている。

捕獲したイノシシなどの動物がありがたいご祝儀扱いになつてる程だ。

子供が成長して働いてくれるようになれば、などと考えてしまふ。

その子供を養うために畑の拡大なども考えてるのだから、本末転倒と言えた。

目出度い話もちゃんとする。

嫁をもらった二人であるが、その嫁が懐妊した。

野郎共は、「やった、やったよ」と喜んでいいる。

そして二人に嫁をと斡旋したヒロフミに、「ありがとうございます、ありがとうございます」と土下座せんばかりの感謝を示した。

「これも旦那が俺達に畑仕事をさせてくれたからです」

「大将がいなければ俺達、ここから追放されてました」

誇張でもなんでもない事実だけに、そこからここまで一気に逆転させてくれたヒロフミへの感謝は本物のようだった。

そんな事言われれば当然感激もする。

「そうか、ありがとうございます」

この二人とならなんとか上手くやっていけそうな気がした。

そして収穫の季節。

収穫をし、作物のできばえに感謝の祈りを捧げ、冬へと向かっていく。

牧場の方も少しずつであるが拡張し、イノシシの方も繁殖する事が出来た。

今は新たに生まれた子供のイノシシが牧場内を動き回っている。

長からの嫁取り話も前年同様に繰り返された。

ヒロフミは当然のように、

「今年は牧場でがんばったこいつに……」  
と話を振っていった。

さすがにしようがないと理解してる長は、牧場担当の男に嫁をとらせる事にした。

その斡旋をした事で、牧場担当がヒロフミに感謝をしていく。

畑担当の二人組と同じように、ヒロフミへの忠誠心がうなぎ登り



だった。

その三人は、事あるごとに、

「いつかこのお礼を！」

と言ってくる。

その言葉にヒロフミは、最近冗談交じりにこう答えていた。

「なら、女の子が生まれたら、うちの男の子の嫁にくれ。」

こっちも、生まれた女の子をお前達のところの子供に嫁がせるか  
ら

息子と娘の将来を考えての事である。

特別何かを考えてのものではなかった。

血の結びつきによる縁戚関係に発展していく事など想像すらして  
いかなかった。

しかし、後々これが子孫を強く結び付けるきっかけとなる。

言われた方も、

「そりゃいいや」

「よろしく頼みますよ」

「是非お願いします」

と気軽にあわせてくる。

彼等も半分は冗談のつもりで話をしていた。

残り半分で、そうなればいいなあと夢を抱いて。

何はともあれヒロフミと三人にとっては、子供達の将来を支える  
明日の事が最優先だった。

あくまで他愛のない冗談のつもりでの語り合いでしかなかった。

### 13 歩目 他愛のない約束（後書き）

誤字脱字の報告をもらっていても、なおしてる余裕がまだにない。  
とにかく書き為を作って余裕をひねり出さねば。

21:00に続きを投稿予定。

## 14 歩目 十年がもたらしたものの

イノシシによる牧場が作られてから十年ほどの歳月が流れる。その間に集団の様相はかなり変わっていった。

まず、移動を前提とした集団ではなく、定位置に居住する集落となつた。

田畑と牧場が食料供給の中心になつたのだから当然であろう。それに伴い、狩りによる獲物の確保は重要度を下げていった。

ただ、全く必要なくなつたわけではない。

周辺の偵察と、村に近づく動物の排除などが作業の中心となっていく。

そう言つてよければ、狩りをしていた者達は防衛の為の軍事力へと性質を変化させていった。

ヒロフミ達の畑や牧場も順調に拡大……とはいかなかった。

やはり人手が限られてるので迂闊に広げるわけにはいかない。

広げればそれだけ手間がかかり、収穫量の確保も難しくなる。

一度に工作に用いる事が出来る範囲はどうしても限られていた。

だが、新たな畑を全く作らなかつたわけではない。

休耕地を作る為にも、畑そのものは増やしていった。

おかげで、年ごとに畑を代えて作物を育てていく事が出来た。

その間に休んでる畑の地力を少しでも回復させるよう努めていった。

牧場の方も、管理者が一人しかいないので迂闊に拡大する事が出来ずにいた。

イノシシは掴まえた当初より増えているのだが、一定数以上にはならないように調整していた。

それでも牧場として使う場所は拡大させ続けていった。  
余談であるが、牧場で飼ってるイノシシの排泄物は、堆肥として用いていた。

その間にヒロフミの技術も成長している。  
見る事は出来ないが他の者達もそれは同じだろう。  
手際がよくなり、新たな考えが浮かんできたりしている。  
それらの蓄積が改善をもたらしている。  
成果はさほど大きく無いが、手際は良くなっていった。

そして十年の歳月は人を成長させていく。  
ヒロフミ達の所に生まれた子供もそれなりに大きくなってきた。  
まだ大人のように働く事は出来ないが、手伝いくらいは出来るようになっていている。

最年長であるヒロフミの子供は、今では父と同じように鍬を担いで畑に出るようになっていている。

おぼえる事は多いが、確実に畑に必要な智慧を身につけつつあった。  
た。

他の子供も同じである。

本格的な仕事は無理でも、小さな頃から親の手伝いとして仕事をおぼえていつている。

七歳くらいからは本格的に仕事をおぼえ始める。  
それを見てヒロフミは拡大の時期が近づいてるのかもしれないと考えていった。

この子供達が、それぞれの家にだいたい三人から五人ほどいる。  
ヒロフミは嫁が二人なので合わせて八人となっている。

残念な事に、ここに来るまでに死んだ子供もいる。

ヒロフミの家で一人、他の所でも一人か二人が幼くしてあの世へと旅だった。

やむを得ない事と分かっているつもりでもやりきれないものがあつた。

だからかもしれないが、無事に成長した子供達の姿を見てると嬉しくなる。

その子供達が成長し、少しずつ仕事をおぼえていつている。

この集落の将来がそこにあつた。

このままいけば集落の発展は間違いないだろう。

少なくとも安定した食料の確保は出来るようになってきている。

次世代への技術伝承も進んでいつている。

更なる発展を求めたいところだが、それはまだ先の事だろう。

それがなくても、ヒロフミがやり遂げた事だけでも十分な技術向上になっている。

今後はこの技術の保全と継承だけでも十分である。

それを為していくなかで、何かしらの改善や改良、そしてそれらを土台にした新技術が生まれていくかもしれない。

それだけで十分だった。

そんなヒロフミは、最後の仕事としてある物を作つた。

紙と墨、そして筆。

材料を探すのに時間はかかったが、それを見つけてからは意外と早かつた。

紙を作るのも手間がかかったが、上昇させた工作のレベルなどがそれを補ってくれた。

イノシシの毛から作つた筆を用いて墨を引いていく。

記憶の中にあるノートなどは比べるのもおこがましい程の質ではある。

しかし、紛れもなくそれは紙であり、書いたものは文字だった。

(これで記録が残せる)

技術や知識の伝承が出来るようになった。

他の仕事を差し置いてでもやり遂げたかった事である。

これらの作成に成功すると、ヒロフミはこれらを可能な限り量産していった。

そして、息子の一人に文字や文章を教え、それを他の者にも伝えるように指示をした。

出来るだけ多くの記録を残し、後世に伝えるために。

その積み重ねが後々大きな成果になってあらわれると知ってるからだ。

相続に継承。

これが世代を超えて文明を発展させる手段である。

そこによくやく手が付けられるようになった。

自分がここに生まれてきた理由を果たす事が出来ると、ヒロフミは安堵をおぼえた。

わきあがるような歓喜とは違う。

しかし、深く静かに、何処までも広く拡がっていくような安らぎを得ていった。

## 15 歩目 終わりを迎えて

子供達が成長し、本格的に仕事をするようになってから、ヒロフミの次なる仕事が始まった。

自分が蓄えてきた知識や経験をなるべく記録していく事。その為に他の仕事から完全に撤退していった。

幸いにも仕事の方は子供達が引きついで暮れてるので問題は無い。一番上の息子は畑を耕している。

二番目の息子は縄を作ったり石器を作ったりと工作に従事している。

三番目の息子は植林をして木材や木炭を作ったしている。

そして四番目は、ヒロフミから文字や計算を習い、記録をしていく事を学んでいた。

ヒロフミが記した書物を教科書として読み書きを身につけ、自分でも記録をつけていけるようになっていく。

集落で起こった事を記録させ、少しでも練習の材料にさせていった。

出来れば子供達全員に読み書きや計算などはおぼえさせたかったがそこまでの余裕はなかった。

それについては次世代に託すしかない。

ヒロフミに残された時間はそれだけ少なくなっていた。

寿命がせいぜい三十年といった世界で、もう三十歳になろうとしている。

栄養状態が良いから老化はそれ程でもないが、何時命運が尽きるか分からない。

そんな状態で何人も人間に教える余裕はなかった。

それでも、末の息子と同年齢の子供達にも文字を教えはした。

出来るだけ記録をとれる者が増えるように願いながら。

そして娘達は他の家へと嫁いでいった。

かつて冗談交じりに言った言葉通り、畑と牧場を営んでる者達の所に一人ずつ。

もう一人は狩りをしてる者達の所へと嫁いだ。

同様にそれぞれの家からも嫁が来て、ヒロフミの息子と夫婦となっていく。

一番上の子供との間に子供も生まれた。

寿命を考えれば孫を見る事が出来るのは幸運と言えるだろう。

その孫の為にも、集落をよりよい状態にしていきたかった。

その為の布石として出来る事をやり遂げたかった。

紙が出来て文字を伝え、記録が出来るようになる。

今まで個人のものでしかなかった記憶が、紙をとおして共有できる記録になる。

その威力は計り知れない。

すぐには分からないものであるが、必要な時に取り出せるというの大きい。

実際、ヒロフミが生きてる間は記録を読み返すという事はほとんどなかった。

だが、畑や牧場、その他様々な技術について確認を取ろうとした者達は記録をとる事の意味を知る。

ヒロフミの子供によって引っ張り出された記録にある言葉は、疑問を抱いた者達にヒロフミの言葉を届ける事が出来た。

それは疑問や問題への直接の解答にはならなかったが、解決柵を考える手引きになった。

「なるほどこういう事が……」

その時、ヒロフミの末っ子である男子は、記録をとっておく意味



をしつかりと理解する事が出来た。

以後、可能な限り詳細に記録を残すようになる。

そこまで予測していたわけではないが、ヒロフミは晩年、可能な限りの記録を残す事につとめた。

自分の知ってる事、皆で培った事、思い出せるだけの記憶。

必要と思えるものから、何の役にたつのか分からない物事まで、出来るだけ多くを筆にのせて紙に記した。

その間にも増えていく孫達を眺めつつ。

家も仕事も既に息子に任せ、余生を紙に向かって費やした。

そして最後を迎えた。

享年、四十一歳。

この時代としては驚異的な長生きであった。

その死は子供達だけでなく、集落の多くの者達に惜しまれた。

人口が一百人に到達しようとしていた集落全体が嘆き悲しんだ。

それだけの影響力をヒロフミは持っていた。

本人はそうと気づく事はなかったが。

跡を継いだ息子達は、父の業績を伝えていくかのように仕事に打ち込んでいった。

そして、再び同じ場所へと戻る。

「お疲れさま」

出迎えた造物主は、転生してこの世界に生まれる前と変わらぬ調子で話しかけてきた。

## 16歩目 終わった前回とこれからの次回の間で

「……………」

「どうした？」

「いや、なんて言うかね。」

またここに来るとは思わなかったなー、ってね」

「転生前に言ったじゃん。」

死んだらここに戻るって」

そう言っ腕を広げて周囲を示す。

確かにこの場は前世で死亡直後にやってきた場所である。

ここで勧誘を受け、色々話を聞き出し、様々な条件を見当して  
転生した。

それはおぼえている。

死んだらここにやってくる事も含めて。

「本当だとは思わなかった」

「嘘吐いても仕方ないだろ」

「いや、どこで引っかけてくるか分からないだろ」

「そりゃどうかもしれないけどさ……………」

すねた様子を見せる造物主に笑いそうになる。

笑みを浮かべたまま気を引き締める。

こつやっって相手を油断させて心理的な防御を崩して溶かすのは、  
騙す者の常套手段である。

目の前の造物主がそうである可能性はまだ捨てられない。

転生させる理由なども未だに不明なのだ。

本音を語ってるならともかくだが。

しかし、相手が事実や真実を述べてるとは限らない。

仮に嘘はないにしても、黙ってる事はあるかもしれない。

いくつかの事実を隠し、本音と正反対の事を伝えてきてるかもし

れない。

黙ってるというのも、嘘の一つだとヒロフミは考えている。全てを洗いざらい喋るまで相手を信用する理由は無い。

それでも望み通りに転生してやっているが、それは相手の真意を知るためである。

危険ではあるが、踏み込んでみないと分からない事はある。

かなり難しい事だが、実際にやってみるしかない。

そう思って、造物主なるこの男の世界とやらに出向いている。本当にそれが世界と呼べるものなのかすら疑いながら。

「それで、これからどうすればいいんだ？」

前に、一度人生が終了したら時間をおいてまた転生して欲しいって言ってたと思うが」

「ああ、おぼえててくれたんだ。

もちろんそうしてもらいたい。

多少は文明的になってきてるけど、まだまだ全然進歩が足りないからね。

もっと加速させてもらいたい」

「でも、そう簡単にできるか分からんぞ」

「それも分かってる。

失敗するかもしれないとは思ってる。

それでも、何もしないよりは可能性がある。

多少失敗するくらいはしょうがないさ」

そのあたり割り切ってるようだった。

「それに、失敗しても次でやり返せば良いし。

下手な鉄砲だったら、いっぱい撃てばいいだけだしね」

「つーと、俺はばらまく弾丸の一つって事か？」

「そういう事になるね。

だから、気楽にやってくれればいいよ。

上手くいけば儲けものくらいな調子で。

もちろん、上手くやって欲しいけど」

「まあ、才能が無いのは認めるけど」

「そうじゃないよ。」

変に気負って自分を追い込んだりしないで欲しいんだ。

何せ長丁場だから。

頑張りすぎたら続かないよ」

「それもそうか」

すんなりと納得してしまった。

「でも、次もあるんだろ？」

「ああ。」

暫くして、君がいたところがある程度安定したら行ってもらいたい。

今度は前よりは楽だと思うよ。

少なくとも生活の方は。

君の努力の賜だよ」

言いながら造物主は空中に映像を浮かべる。

ヒロフミがいた村の様子が映し出されている。

「君がこっちに戻ってきた直後あたりから、少し早回しで見えていくよ」

そう言つと、映像の端の方に、経過時間が表示され、それが勢いよく動き出した。

あわせて映像の中の村の様子も動いていく。

そこにいる人々が目にもとまらぬ早さで動き、村の姿が少しずつ変わっていく。

田畑が増え、牧場が広がり、家が増えていく。

行き交う人々も増え、人数は前回よりもかなり増えていた。

それがある程度まで進んだところで、年月を示す数値の勢いが落

ちていく。

月日はざつと一百年ほど経過していた。

「だいたいこれくらいかな。」

世代で言えば五世代くらいは進んでいる。

その間に、君のいた村はこれくらいになってるよ。

人口は、だいたい二百五十人くらいかな？

生まれる者や死んでいく者がいるから多少は変動してるけど。

だいたいそれくらいだと思ってくれ。」

「結構増えたな。」

「うん、君が生み出したものを発展させていってるし、まあまあ頑張ってるんじゃないかな。」

途中経過は大幅に省略されたが、結果を見れば概ね成功してるのが分かる。

あの環境で潰える事無く続いているというだけでも運が良い。

「ここから何が出来るか分からないけど、また上手くやって欲しい。出来る事だけでいいから、確実な一步を踏んでいってもらいたい。」

「出来るだけ頑張るわ。」

何が出来るか分からないながらもそう返事をした。  
造物主も頷く。

「それじゃ送り込むけど、いいかな？」

「ああ、やってくれ。」

「うん、それじゃいくよ。」

前の人生で身につけた技術はそのままもっていけるから。

さすがに物は無理だけど。」

「まあ、必要なものは現地で調達するわ。」

「そうしてくれ。」

君の子孫が頑張ってるから、何かしら手に入れられると思う。」  
「だいたいいいけど。」

「まあ、子孫というか、君の血筋の所に生まれるんだから、それに融通はきくでしょ。」

赤の他人ってわけじゃないんだから」

「どうだかねえ。」

「こればかりは分からんよ」

「まあ、頑張ってくれ。」

それと、血筋はちゃんと残してくれよ。

でないとなんか転生させる先で困ることになるから」

「はいはい。」

なるべく努力はするよ」

このあたり転生の難しいところであった。

血筋を持つ子孫の所に生まれると、前世の記憶などを持ち越す事が簡単らしい。

子孫には先祖の霊魂が分かれていくからだと言っ。

詳しい事は分からないが、血を分けた子孫がいると便利だという事だ。

ただし、男の霊魂は男子の血筋に、女の霊魂は女子の血筋でないと駄目らしい。

霊魂にも性別というものがあるようだ。

まあ、ヒロフミにそのあたりの詳しい事は分からない。

そつというものなのかと納得するしかない。

ただ、血筋と関係のない所に生まれると、前世の記憶などを失ってしまふ事になるとは聞いている。

完全になくなるわけではないらしいのだが、かなりの欠落を覚悟する事になるとか。

転生そのものは出来るらしいのだが、このあたりが面倒な部分になる。

「まあ、血を絶やさないように頑張るよ」

「そつしてくれ。」

まあ、君が子供を作れなくても、他の血筋が生き残ってればいい

「ただけだね」

つまり、遠く離れた親戚であっても、男なら男の血筋で繋がってれば良いという事になる。

これまた不思議なものだと思った。

「それと、念のために前回の嫁さんもお嫁さんも転生させるから  
「なに？」

意外な事を言われて驚く。

「一度結ばれた者同士で何かしらの縁が生まれやすいものだから。  
お互い引き合う可能性は高くなるよ。」

相手が見つからない場合の保険ってことで

「はあ……」

何と言えば良いのか分からない。

「でも、良いのか？」

あいつらの気持ちとかはどうすんだ。

嫌だと思ってるかもしれないし」

「それは大丈夫だろ。」

お前さんがよっぽど酷い事をしなければ。

もちろん、お前さんがあの二人が嫌だっというなら、その気持ちを大事にすればいいし」

「断ってもいいってこと？」

「もちろん。」

相手がどうしても駄目なら無理は出来ないさ。

その時は、もっと良い相手を見つけてくれ。

そこは努力と運による事になるけど」

「まあ、それくらいは」

「前回の二人と一緒にやっついていくのにも、努力と運が必要だけどね」

「結局それなりに苦労はするって事か」

「何でもそつだよ。」

多少楽になるって程度でね。

もつとも、手間を省けるならその方が良いと思っけど」

「違うない」

しなくて良い苦勞はしない方が良い。

苦勞なぞ買つてでもするようなものではない。

したいならやりたい奴がやれば良いとヒロフミは思っている。

「そんなわけだから、次の人生もがんばって」

話をおえた造物主は、そう言うのとヒロフミを転生させていった。

浮遊とも落下ともつかない感覚をおぼえながら、ヒロフミは新たな人生へと向かっていく。

(次はどうなるやら)

不安と期待を抱いて。



## 17歩目 二度目の挑戦が始まる

新しい人生は、前世の四男の子孫の家から始まった。

さすがに五世代も過ぎると血筋が残ってるのか不安だったが、意外とこれが大丈夫だった。

もちろん、途中で元長男の血筋が断絶したり、他の子供達の血筋が細分化したりはしていた。

結果として血筋を引いた男子は十五人となっている。

これは新たに生まれてきたヒロフミと同年代の数である。

親の世代などはもう少し少ない。

だが、ヒロフミから始まり、そこから生まれた四人がそこまで多くなっていた事に少なからぬ感動をおぼえた。

自分の家がそれだけ発展してるというのを分かりやすい形で知る事が出来る。

それが今回のやる気にもつながっていく。

(今回もがんばるか)

いまはまだ母の腕のなかであやさされてるが、いずれ以前のように何かをやりとげてみようと思った。

元四男の家は、紙による記録を担当していた。

一族や集落の出来事などを記録し、それによって他の者達に貢献してるようだ。

紙も知識も貴重なだけに、これらを司ってる元四男の家はありがたがられていた。

記録の傍ら、読み書きや計算なども教えており、それが集落全体の教育水準をおしあげてもいた。

記録そのものは元四男の者達が専属で行ってるが、記録したもの

は村の者のほとんどが読むことが出来る。

それが村の発展にも寄与してるようだった。

何につけ、過去の前例があれば対策や手段を講じる際に役立つ。

過去のやり方をそのまま用いるにしても、工夫して新しい方法を見つけるにしても。

かつてどのように行い、どのような結果になったかが分かれば参考になる。

成功したならそれを踏襲すれば良いし、失敗したら別の道を考えていく事になる。

その見極めをするためにも過去の出来事を振り返る事が重要になる。

おかげで、同じ間違いを何度も繰り返す事を避けられる。

成功した手段の更なる発展も考える事が出来る。

そういう役割を担ってるという事に幾分緊張をおぼえた。

順当にいけば、家の仕事を引き継ぎ、それを発展させていくべきなのだろう。

だが、現状を見るとそれで良いのかと思ってしまう。

集落は発展し、かなりの大きさになってきている。

それも以前（約一百年前）に比べればであるが、それ故の問題も見えてくる。

周囲は田畑や牧場が広がっているのは良いのだが、少々手狭に感じられる。

拡大拡張の余地はまだあるが、ここから田畑に出向くとなるとかなり手間がかかるようになっていた。

村から最も遠い所にある畑まで出向くとかなりの時間がかかってしまう。

行って帰ってくるだけでかなりの時間がかかってしまい無駄が大きくなる。

それが理由で不満を持つ者も出てきている。  
そこを少しでも改善したいものだった。

(まずはここからかな)

とりあえず、それを解決する事を当面の仕事としていく。  
すぐにとりかかれるわけではないが。

まず、子供の段階では何を言っても意味がない。

ある程度成長するまで待つしかない。

どんな名案妙案であっても、子供の発言だとまともにとりあわれない可能性が高い。

なので、しばらくは様子を見ながら時期をみる事にした。

必要な技術を会得もしていかねばならない。

道具も用意しなければならぬ。

何より人を集めねばならない。

それらをこなすには時間が必要だった。

(どれだけ手間がかかるかな)

時間、労力、資本。

そして周囲の理解。

集めるにはかなりの手間がかかりそうだった。

しかしやるしかない。

まだまだここを発展させていかねばならないのだから。

## 18 歩目 手元の仕事からと思ったら意外な事が分かった

(まずは家の仕事からだな)

何をやるのか考えたが、手始めにそこからやる事にした。他の者達が期待してるのは、記録をとるという事である。それ以外の事をやり始めたら奇異に思うだろう。

本来の目的とは違ったものに従事せねばならないが仕方ない。最短距離をいければ良いが、そうでないなら迂回していくしかない。

まずはやるべき事やっつけていく事から始めねるしかない。それでも、何も無い所から始めるよりは楽なのだから。

記録のとりかた自体は難しいものではなかった。

元々はヒロフミが子供に伝えたものである。

基本は同じだった。

ただ、時間の経過と五世代分の積み重ねがある。

その間に変更された部分もある。

そのほとんどが改善された項目であり、決して悪いわけではない。むしろ子孫達の努力がみれて晴れがましい気分になった。

それらを身につけ、改めて記録という作業にのぞんでいく。

記録する事はそこそこある。

生まれればそれを記録し、死ねばそれも記録する。

誰がどこに住居を定めたか記録し、どこの家が潰えたかを記録する。

収穫がどれだけあったか、魚はどれだけ獲れたか、家畜はどれだけ

け生まれてどれだけ捌いたか。

伐採した木々と、新たに植林した樹木を記していく。  
何か変化があれば記録し、現在の状態がどうなってるかを把握しやすくする。

それを専門でやっていくので、意外と手間がかかる。

だが、手間をかけただけあって分かった事もある。

(こりゃ酷いな)

そう思う程に、田畑の権利が入り組んでいた。

とにかくメチャクチャだった。

どの畑が誰のものをしっかりと記録してあるのは良いのだが。

それを見るに、あまりにも飛び地が目立った。

図にしてあらわしてみると、実に点でバラバラにモザイク状になっていた。

畑は最初に耕した者の物としたために、新しい畑を作る度に飛び地が増える事になっていた。

そのため、かなり歪な形に入り組む事になる。

それらを整理すれば面倒も無くなるのだが、それをするのも一苦労になる。

畑の状態が場所によって違うのだ。

もともとの土壌の違いもあるし、手を入れてる者の素質や才能や努力の違いもある。

それらのせいで、取れ高が違ってきている。

単に面積だけではかる事が出来ない質の違いがあった。

なので同じ面積で交換しようとしてもそうはいかない。

誰かが一方的に損をしないように、となるとどうしても無理が発生してしまう。

集落から遠い畑への移動の他にもこういった問題があった。

(どうしたもんかな)

すぐに見つかる解決方法はない。

考えてる事に賛同してくれる者がいれば多少はどうにかなるとは思うが。

それでも簡単にはいかないだろう。

ただ、幾らか可能性がないでもない。

集落の規模と、そこから歩いていける範囲を考えたらそろそろ限界が見えてきてる。

ある程度外部に引つ張り出さねばならない頃合いだった。

(まあ、人も余ってるようだし、その辺りを焚きつければどうにかなるか?)

穏やかとはいいがたい考えであるが、上手く煽る事を考えていく。その方が上手くいきそうだった。

人間、欲を刺激すれば動く可能性が高い。

上手くそこを突いていきたかった。

(新たな田畑の開拓)

進める事が出来ればいいけど)

思いついた解決策は、かなりの大風呂敷だった。

## 19 歩目 人も物も引つ張っていく

記録を見ていて感じたのだが、それぞれの家で抱えてる人間が結構多い。

次男三男といった男手で、余ってる者が何人か見受けられた。

もちろん田畑の仕事で人手が必要なので何人かは確保しておかねばならない。

だが、それでも手持ちぶさた気味の人間が何人か見受けられた。

新たに田畑を作ろうにも、移動出来る限界まで拡大されてきたので、新規で作るのが難しい。

作れない事はないが、それだと移動時間がかかりすぎる。

そのため、新たな田畑を作るのに及び腰になっていた。

しかしこのままというわけにもいかない。

周囲を田畑や牧場で囲ってるために、町の拡張にも無理が生じてきている。

(新しく集落を作るしかないな)

ヒロフミの至った結論はこれだった。

今の集落から何人か引き抜き、新しい場所に集落を作る。

遠くの田畑に出向いている者達や、余りがちな人手になってる者を連れて新規に開拓する。

これなら周辺は新しい田畑だけとなる。

移動時間をとられる事も無い。

新たに開拓する手間はかかるが、それは新しい田畑を作るのも同じだ。

ならば、移動時間を減らすためにも集落を新たに作る方が建設的に思えた。

もちろん作るのは田畑だけではない。

集落を作るのだから家も造らねばならない。

それに建設中は他の事が出来ない。

やるなら収穫を終えて種まきが始まるまでの間になる。

また、畑を作るとなると更に一苦労だ。

川から近いと言っても、そこから水路を引いてくるのだから相当な作業量になる。

おそらく数年がかりの作業となるだろう。

まともな収穫が得られるのは、それから更に先となる。

だが、やるしかない。

この先人口が増えていく事を考えれば、今のうちにやっておかねばならなかった。

「というわけで、新しい集落を作ろうと思います」

まとめた考えを、まずは父親に提案してみた。

息子からの提案にかなり驚いたようだが、その説明を聞いて納得はした。

同時に、まだ子供だと思ってた息子がこんな提案をするという事にあらためて驚く。

なお、ヒロフミこの時十一歳。

さすがに仕事をおぼえては働きだす頃合いだが、集落の将来についての提案などを期待出来る年齢ではない。

それをやった子供に、父は唾然呆然とした顔をし、それでいてヒロフミの顔から目が離せないでいた。

「いかがでしょうか？」

そのままでは埒があかないと思ったヒロフミは父に問いかける。

言われた父は、それでも呆然としていたが、

「検討する」

と答えた。



本当に検討するかは分からないが、とりあえずこれで意見を伝える事が出来た。

それだけではなく、手近な者達にも声をかけていく。  
将来部屋住みというか、家の仕事を手伝う事を余儀なくされそうな者達に。

とうぜん田畑が集落から遠い者達の所にももちかける。  
大半は渋い顔をした。

新しい畑は魅力的だが、新たに作るのが面倒なのも知っている。  
それだけにすぐに賛同する者はほとんどいなかった。  
もちろん例外的に諸手をあげて賛成する者もいる。

今のままでは先がないと思ってる者ほどそれは顕著だった。  
何より、ヒロフミが言った事が一番大きい。

「集落を作って田畑を切り開けば、嫁ももらえるでしょう」  
それで目の色を変えたものもいる。

嫁ももらうというのは、一人前と同義である。  
所帯を持ち、自分の家を構えるという事になる。

長子相続を既に定めていただけに、次男三男にはそれが難しい。  
しかし、新たに切り開けばその可能性もある。  
そう聞いて奮起しないものはいなかった。  
移住希望者はこうして確保されていった。

しかし、人がいるだけでもどうしようもない。  
必要となる道具なども用意しなくてはならない。  
運搬手段も。

馬や牛がいれば良いのだが、あいにくと牧場にそれはいない。  
探しにいききたいところだが、捕獲するのが難しそうである。  
そこまでやってる余裕はないだろう。

いずれ見つけて捕獲し、家畜として飼い慣らしていきたかったが。  
(しょうがない。)

人力で運ぶか)  
せめて運搬が楽になるように運搬するための道具でもつくろうか  
と思った。

(担架みたいに、棒の間に板を渡したものでも作るか)  
本当は大八車のようなものを作りたいのだが、石器ではそこまで  
作る事はできない。

鉄器が欲しいところだった。

それも今後の課題である。

今は手持ちでどうにかするしかない。

何はともあれ資材集めに奔走しなければならない。

田畑はともかく家を建造して行かねばならない。

泊まり込みで作業する事にもなるだろうから、ある程度の家を建  
築する必要もある。

その為の材料となると結構な漁が必要だ。

必要な労力を考えると頭が痛くなる。

最低限必要な数がそろうまでどれくらいの間がかかるのかも考  
えてしまう。

(こりゃあ、本当に大事になるな)

あらためて目の前の問題を考えて頭を抱えなくなつた。

## 20 歩目 ここで衝突するのは実に痛かった

(まあ、こんなもんかな)

希望者の決定と必要な道具や資材の確定。

やるべき事の確認、作業手順の策定。

様々な問題は山積みになったままだが、どうにか新規開拓を開始出来るところまでこぎ着けた。

ここまで来るのは苦難の連続だった。

とにかく及び腰なのだ。

新しい事を始めようとすると、どうしても尻込みしてしまう。

新たに集落を作るといふ新事業にどうしても良いのか分かってないのが理由のようだった。

家を新しく建てたり、畑を新たに作っていくというのは今でも行われている。

しかし、これが見知らぬ土地でやるとなるとどうしても不安が出て来るようだった。

それを説得するのが大変な手間だった。

なんだかんだ言ってやらない理由を作ってくる者達をなだめるのは並大抵の労力ではない。

そもそも、理由があつて反対してゐるのではない。

やりたくなくて理由を作つてゐるのだ。

その理由を一つ一つ解きほぐして解決策を示しても、それで納得するわけもない。

彼等は理由や原因を突き止めてそれを解決したいのではない。

とにかく不安だからやりたくないのである。

そんな者達にどれほど言葉を費やしても無駄でしかない。

離せば分かるなんてのは、そうであつたら良いという理想でしかない。

もしくは、相手を言いくるめる事に絶対の自信がある者の台詞なのである。

人間、理屈や理路整然とした言い分などで動くものではない。それをどうにか動かしたのは、

「いい加減にしろ！」

と怒鳴りつけてからである。

残念ながら、勢いや威圧でしか動かない、話を聞こうとしないのも人間の持つ救いがたい本性であろう。

それでも、多少は言う事を聞く素地が出来てから話を進めたら、意外なほど話が円滑に進んでいった。

特に今の集落をの状況を省みて、このままで良いのかと問うた時は、居合わせたほとんどの者達が唸った。

「まあ、確かになあ」

「手狭になってきてるし」

「畑もなあ」

「遠くまで出なくちゃならないのは面倒なんだよな」

誰もが思い思いに問題を口にしていった。

腹のたつことに、それらは全てヒロフミが説明した事である。

本当に話を聞いてなかったのがこれではつきりした。

思わず、

「ふざけんな！」

と怒鳴った程である。

「今まで俺が言ってきた事ばかりじゃねえか！」

その剣幕に、何より言ってる事に多くの者が決まり悪そうな顔をした。

実際、彼等も分かっている。

自分が口にした事は、ヒロフミが何度も説明で言ってきた事だと。それへの対策として、新たな集落を作ろうと説明していた事を。

「ここに至るようやくそれを理解してきたもいた。

「それでもやらないのかよ」

ふてくされたように、というより腹が立ち、怒鳴り、そして皆の態度に呆れながらの言葉である。

質問や問いかけというより、自棄になつてるよつな声音でもあつた。

「いやまあ……」

「それはなあ……」

「さすがに、このままじゃあ……」

戸惑いの声をあげながらざわめいていく。

「なら、やるしかないだろ」

一喝する。

反論出来る者はいなかった。

「でも……」

それでも多少の度胸がある者が口を開く。

「本当にそれで上手くいくのか？」

「知るか！」

今まで以上の怒鳴り声をあげた。

「そんなに文句があるなら、もつと良い方法を出せ！」

反対ばっかで何もしねえで。

お前ら何考えてんだ！」

もう容赦など出来なかつた。

言つてる事や態度が、子供の駄々と大差ないのだ。

見ていて腹が立つ。

もとより人生経験でいえば、前世の分があるだけヒロフミの方が長い。

今回の人生において、目の前にいる者達の多くは年上だが、積み重ねた経験と記憶からすればほとんどが子供のよつなものだ。

しかし、まがりなりにも食い扶持を稼いで生きてる大人である。

そんな者達が、ただひたすらに反対だけを繰り返すのは見ていて

鬱陶しいだけである。

しかも、それが慎重さゆえでも、熟慮の果てでもなんでもない。ただただおっかなびっくりで何も考えずにやってる事である。感情的になるなどは思わない。

それは人として備えていて当然のものである。

その動きを否定するつもりはなかった。

しかし、それと無意味に反対しまくる事や、闇雲に賛成をする事は違う。

言いしれぬ不安や、唐突な閃きでもあるならともかく、反対のための反対に墮落してするような態度には怒りをおぼえるしかなかった。

「どうしてもこのままが良いって言うならしょうがない。

なら勝手にしろ」

もう付き合いきれないと思ってヒロフミは投げ出した。

目の前の者達を。

「あんたらはあんたらの出来る事をやっててくれ。

もう頼まん。

ただ、俺らも俺らでやりたい事をやる」

そう言っただけ希望者達と共にその場から離れようとした。

協力するつもりのない者とするんでいても時間を無駄にするだけである。

これから先が厳しくなるが、それもやむをえないと思った。

このまま反対してる連中と言いついて合っても何も進まない。

しかし、やる気のある者達とであるならば、ほんの少しでも先に進んでいける。

その方がまだしも建設的だった。

そんなこんながあつての今である。

こうなってしまうたのは残念であるが、今更どうにもならない。

さすがに多少は反省したのか、反対していた者達も協力を申し出

てきた。

だが、それをヒロフミは決して許しはしなかった。殊勝な態度を見せてはいるが、それでやらかした事を帳消しにしようという態度がみえみえだったからだ。

許せば何事も無かったように振る舞うのは目にみえている。そして、そのうち別の所で何かしらの問題を再び起こす。

果てしなく無駄な騒ぎを今後も事あることに繰り返すのだ。

一緒にやっていけるわけがない。

(もう、俺達だけでやるしかないな)

幸いな事に人数はいる。

現在、二十人ほどが賛同してくれている。

これだけの人数がいれば、それなりに仕事を進めていく事も出来る。

集落からの協力は期待出来ないが、そこには希望がもてた。

(当分は魚を獲って凌ぐしかないか)

畑から収穫が出るようになるまでは、そうするしかないとも考える。

そうやって気楽に考える事で、先行きの不安を打ち消そうとしていた。

(始めた時と同じになるだけだ。

どうって事ないさ)

それでも前回よりは大分有利である。

一緒にいく者達は、何も技術をもっていない前回とは違う。

畑を耕す事も、縄や道具を作ることも、川で魚をとる事も、家畜にしたイノシシを育てる事も出来る。

狩猟をしてる者達からも参加者がいるので、動物に襲われても対処出来る。

支援は見込めないが、ある程度はやっていけそうな気はした。

その年の収穫が終わり、秋も半ばを過ぎようという頃。川に沿って下っていき、開拓予定地へと向かう。事前に何度か下見はした場所である。

集落からはおよそ十キロほど離れた所になる。

そこにまずは、持って行けるだけの材料を運び込んでいく。もう後戻りは出来ない。

必ず成功させるしかなかった。

ヒロフミ、二度目の人生における十五歳の事だった。



## 21 歩目 寒さが身にしみる季節だからこそ

「それじゃ、やるうか」

数日ほど材料を運び込む事に費やしてから作業にとりかかる。

やるのは、家造り。

まずは居住出来る場所を確保する事が先決だった。

このままではいずれ冬もやってくる。

それまでには住み込める場所を確保せねばならない。

柱をたてて縄で材木を固定し、屋根に茅を葺いていく。

その周囲に堀をつくり、動物が襲ってこれないようにする。

今後の事も考え、建設する場所も決めながら建てていった。

無計画に家が建ち並んでしまってる集落の二の舞になるわけには  
いかない。

今後の発展もある程度見越しての建築をしていかなばならなかつた。

とはいえ、建ててるのは大人数が止まり込める少し大きめのもの。  
各自の家を造ってるわけではない。

建ててもせいぜい三軒くらいなので、そこまで場所に頭を使う必要は無い。

(将来は集会や会議の場所に使いたいな)

そういう用途を見込んでの建築ではある。

あるのだが、考えるのはせいぜいそれくらいだ。

ここをこれから作る集落の中心にしたいと思うが、それだけで  
良い。

今はまだ。

皆の家を建てるなど、それこそまだまだ先の事になってしまうの

だから。

その寝床も完成し、作業が本格的になっていく。

当面の食料として川にウケを設置しての魚獲りと、平地部分の草刈り、用水路作りが進められていく。

特に用水路は、水が冷たくなる前に造りたいと誰もが思っていた。それだけに最優先で作られていく。

冬から春にかけての、水の冷たい時期に作業をしたいと思う者はいない。

誰もが必死に作業に取り組んでいった。

その甲斐あつてか、一ヶ月もしないで水路らしい溝ができあがった。

見てくれは良くないが、用途を果たすには十分なものになった。

それがおわってから畑作りになる。

いまだ狩れずに残る雑草を、石器で掘り起こすように刈っていく。刈り取った雑草は堆肥にするために一カ所にまとめて積み重ねていく。

時間はかかるが、あとは腐敗して土に戻るのを待つだけだ。

虫もわいてくるので、住居からは出来るだけ遠くに置いておく。

それらが終わったあとに、畑になる予定の場所が出来上がる。

集落の畑に比べれば狭いものだが、こればかりは仕方ない。

あとは生い茂る森を切り開いていく事になる。

それはさすがに時間も手間もかかる。

冬から春にかけて地道に継続的にやっていくしかない。

木材も木炭も必要なので、どのみち伐採はある程度進める事にはなる。

開拓開墾のついでにそれらを手に入れていく。

冬に向かつて暖をとる事も重要になるので、可能な限り集めておきたかった。

(ストーブが欲しい。  
炬燵も)

特に後者は冬の寒さを迎える度に思い出す。

他にも、風呂がないのが地味に辛い。

お湯に身を浸すというのがこの時代では難しい。

お湯自体は沸かせば良いのだが、人間一人が入れるだけ湯船を作る事が出来ない。

陶器で作るには大きすぎるし、何より強度に問題がある。

檜風呂とまでいかなくても、木材で作るのも同様に難しい。

それが出来るほど鋭利な工具がない。

こんな所からも、鉄器の重要性を感じていく。

よりよい道具を作るには、優れた道具が必要になる。

石器ではどうしても出来ない事が多い。

文明を更に高度なものにするためにも、金属加工が必要になる。

なのだが、そこに手を出すのはまだ先の事になると覚悟はしていた。

ここでも人手が足りないという壁にぶつかってしまふ。

前回でも、田畑の拡張が難しかった原因である。

何かをやるにしても、そちらに回る事が出来る人がいなければ何もできない。

それに、田畑を耕して得られる糧が、そういった者達を養える程でなくては意味がない。

どれほど便利な作業道具を作れるとしても、そんな職人を養えなくては意味が無い。

当たり前だが、職人は直接食料を生産するわけではない。

そんな者を抱えておくためには、それだけの食料生産を上げねばならない。

今現在の農業技術では、その為にかかなりの耕作地とそれを耕す農

民が必要になる。

とても今現在の人口ではそこまで賄う事は出来ない。  
例えばロフミが鉄を作る技術を身につけても、宝の持ち腐れとな  
ってしまふ。

もちろん鉄製の道具があれば作業ははかどる。

石器に比べて作業の進みは早くなるだろう。

だが、石器に比べれば高い技術力が必要になるし、設備も作らね  
ばならない。

かかる手間の大きさと投入する物資などを考えるとおいそれと手  
を出す事は出来ない。

何より鉄を採掘してくる所から始めねばならない。

鉄鉱石を手に入れ、更にそこから鉄を取り出していく事になる。

どれだけの設備が必要になるか想像もつかなかった。

おそらく五人や十人では全然足りない。

何十人と必要になると考えられる。

三百人にもならない現在の集落では夢物語だった。

まずは人口を増やす事。

本当にそこから始めるしかない。

その為にも、耕作地を増やさねばならない。

拡大のために今後はあちこちに入植していかねばなくなるだ  
ろう。

今回の開拓は、その為の手法の確立が目的と言える。

入植にどれだけの手間がかかるのか、何が必要になるのかを知ら  
ねばならない。

壮大な実験である。

だが、今回成功すれば、今後の弾みにもなるだろう。

是が非でも成功させねばならなかった。

(ま、まだまだ先の話だ。

次の転生……でもまだ無理かもしれないし)

このまま順調に人が増えていって、食料生産に従事しない人間を抱えられるようにならねばならない。

その為の人数がどれだけ必要になるか想像もつかないが、やるしかないのだ。

(何千人くらいは欲しいよな)

厳密に計算したわけではない、大雑把に考えて出した数字である。最低でもそれくらいの人数は必要なのではないかと思えた。

あるいは、もっと大勢の人間が必要になるかもしれない。

となると、もう一度転生したくらいではまだ無理かもしれない。

ならば今出来る事をひたすらに押し進めるだけである。

(とにかく、畑をいっぱい作らないと)

ついでに、家畜ももっと殖えればと思う。

食用にする作業用にする、牛や馬がいればかなり出来る事が広がる。

特に今後あちこちに集落を作るとなると、移動や輸送に馬などが必要になるだろう。

騎乗もそうだが、馬車なども欲しい。

今だって、住居から畑まで遠い所に向かうには徒歩では難しいのだから。

他にも、畑を耕すのに、牛に鋤を引かせる事も考えられる。

食用以外でも動物の活躍を求めていた。

(それも、牛や馬が見つければ……だよなあ)

この世界にもいるかもしれないが、それがどこにいるのか分からない。

早く見つからないものかと思ってしまう。

手に入らないものを求めても仕方が無い事ではあると分かっている。

牛や馬にしろ、鉄などの金属などにしろ、今はまだ手が出せない

ものである。

そんな事で悩むのは無駄であろう。

求める気持ちをおさえる事は出来ないが、今は諦めるしかない。

(先の事より、まずは明日の事だしな)

頭と気持ちを無理矢理切り替えていく。

皆と共同で使ってる家から出て、居住とは別用途に使ってる小屋へと向かう。

作り自体はそれほど変わってるわけではないが、こちらは幾分小さい。

その中に入ると、蒸し暑い熱気が充満していた。

密閉性はさほど高くないので、熱気は結構逃げてるはずなのだが、散逸する以上の熱気と湿気が生み出されている。

「あ、来たんだ」

「おう、入れ入れ」

中にいたものがヒロフミを招き入れる。

「やってますね」

声をかけると、「ああ」と返事が来る。

「これが無いとなあ」

「夜も冷えてきたし、暖まんないと」

「石も焼けて、良い具合に湯気が出るぞ」

そう言って一人が瓶に入れた水を、近くにあった石にかける。

小屋の中心で焼かれていた石は、かけられた水をすぐに蒸気にしていった。

そんな石が、小屋の隅の方に置かれている。

水をかけられたそれらが水蒸気になって部屋の中はかなり蒸れていた。

蒸し風呂。

この小屋はそのためのものだった。

風呂を断念するしかなかったヒロフミが思いついたものである。  
焚き火以外で暖まる方法が出来た事で結構評判も良い。  
それに、意外と汚れも落ちる。  
体に触れた蒸気が水滴になると、汚れがどんどん落ちていく。  
これにはヒロフミも驚いた。  
とにかく疲れた頭を熱気にひたし、体を蒸気の中に置く。  
それだけで疲れが消えていくのを感じた。  
後で体をぬぐうのは手間だが、今はこの小屋の中で思考を停止し  
ておこうと思った。

## 22 歩目 前回は踏まえてよりよい形にしていきたい

翌朝、いつものように一日が始まっていく。

食事をとり、作業内容を確認し、神棚に向かって手を合わせる。

信仰や宗教というようなものではないが、一日がよりよき終わり方を迎えるよう祈るのは前世の頃から続いていた。

神棚も、何かしらありがたそうなものがあつた方が祈りやすくだろうと思つて作ったものである。

この世界に鳥居を持ち込んだのはやり過ぎだつたかもしれないが、他に何も思いつかなかつたからしょうがない。

恐ろしい程独創性がない自分にびっくりしたのも良い思い出である。

しかし、そうやって始めたものがこうやって続いているのを見ると面白いやら照れるやらとなつてしまふ。

だが、悪い方向に向かつてない事はありがたい。

一日を始める区切りとして用いられているのは予想外だつたが。

時間の経過の中で、そういつた要素が加わつたようである。

元々の要素はそのままであるが、それに反しない範囲で発展させてるようにも思えた。

出来ればこれが更に良い方向にのびていく事を願いながら、本日の作業に入っていく。

やる事はほぼ同じで、森を切り開き薪や木炭を作り、開けた土地を作つていく事になる。

元々木々のない場所はある程度手を加えてある。

まだまだ作業を続けるべきではあるのだが、それよりも燃料が先だつた。



冬になる前にある程度は確保しておきたかった。  
寒くなつてからあわてて燃料を手に入れるのは避けたい。

可能な限り外に出ないでいたいというのもある。

防寒具はないので、冬の寒さは本当にこたえる。

そんな時期は、可能な限り外に出ないで家の中に籠もっていたかった。

もちろんそんな事してる余裕は無い。

可能な限りの重ね着をして来る種まきの時期へと向かっていかなければならない。

田畑を作るのはこの時期しかない。

農作業に従事する時期はそんな事してる余裕は無い。

出来る限り拡大させて、少しでも収穫量を上げらるるようにならなければならない。

それでも寒さが酷い場合は外に出れない事もある。

冬の寒さはそれだけつらいものがあった。

今居る場所が豪雪地帯などでなくて本当に良かった。

ただ、新たに開拓を始めたので、作れる畑の広さも限られる。

二十人ほどいる有志の手が余るのは見えていた。

なので、最初のうちは手のあいた者が畑作りに回る事も考えていた。

一人一人が十分な広さの畑を手に入れるまではそうしていくつもりだった。

人手が必要な時期はともかく、そうでない時の方がはるかに多い。一刻も早くそういう状況から抜け出さねばならない。

確実に収穫を得られるようになるまで畑の拡大は継続していかねばならない。

その畑についても、出来上がったものを細切れに皆に分配するつもりはなかった。

元の集落で起こっていた、小さな畑が幾つも入り組んでる状況は避けたい。

その為にもある程度まとまった広さを一人が所有する事にしていかなければならない。

入り組んだ土地の所有で面倒が起こるなんて事を繰り返したくない。

もつとも、何年も何十年も経過すれば、それらは再び起こるだろうとは思った。

それはやむを得ない事ではある。

なので、そうなった時に問題なく譲渡が出来るようにしていけるようにもしたい。

かなり難しい事だが、考えはある。

どこまで通用するか分からないが、やるだけやってみようと思っていた。

それはそれとして、目先の問題として誰がどれくらいの広さを手に入れるかを決めねばならない。

土地からの収穫量は場所によって差が出るだろうが、せめて広さは同じにしておきたい。

面積による不平等さをなるべく出さないでおきたかった。

それはそれで収穫量に差が出てしまいが、実りが出てない時点でそれを計るのは難しい。

なので、まずは面積で一人当たりの割り当てを出す事にした。

耕せる広さはある程度分かっているので、基準に困る事は無い。

一人が耕せる広さと、それに加えて幾らかのおまけを付けるつもりだった。

将来、家族を持ち、子供達が生まれた場合に耕せる広さを考慮し

てである。

その面積は、このために得た技術の『測量』を用いて計っていく。

また、長さなどの単位も決めていく。

メートル法はさすがに使えない。

用いたいのだが、正確に一メートルを決める手段がない。

やむなく、適当な所から求めた長さを用いていく。

とりあえず、最小単位として指先の間接までの長さを用いる。

およそ二センチ程度であるそれを基準にして長さの単位を決めていく。

その長さの基準を示す原器を陶器で作り、それを元に測量を開始していった。

春が来る頃には、出来上がった耕地面積が割り出された。

それを元に割り当てられる広さをもとめ、所有者に割り振っていく。

割り当てについては、年齢の高い者からとなっていた。

早めに嫁をとれるようにするための配慮である。

年齢が同じ場合はくじ引きで決める事にした。

なんだかねで一番揉めにくい方法である。

諦めがつく手段とも言える。

そんなこんなで畑を手に入れた者とそうでない者が分かれていく。やむなき事だが、手に入れられなかった者達はやはり落胆していく。

いずれ耕せば自分の畑も手に入るとは分かっている。

そうであっても、出遅れた感は否めない。

誰を恨む事も出来ないが、やるせない想いを多少は抱いてしまう。

そういった者達にヒロフミは、

「頑張つて畑を作ろう」

と言っしかなかった。

その為にも、今年一年開墾に勤しんでいこうと呼びかけて。

## 23 歩目 いずれ収穫がしっかりとれるようになるまでだ

「しかし、畑を耕してるつつーのにスネかじりつてのもなあ」  
今の自分達を考えると何とも情けなくなる。

確かに田畑を耕してるし、将来は実入りも大きくなる。  
なのだが今は実家の仕送りでもうにか日々を過ごしてる。

開拓してる最中なのだから実入りなど無いし、その間は支援が必要なのは当たり前だ。

元の集落でも畑を新たに作ってる間は実家の支援が当たり前である。

何も恥じる事は無い。

なのだが、やはり独り立ち出来てない気がして情けなくなる。  
まして、啖呵を切って飛び出して来たのだ。

親からの仕送りに頼ってるのが情けなく思えてくる。

(まあ、あと何年かは仕方ないけど)

畑が拡張し、収穫が確実になるまではやむをえない。

もちろん、出来上がった畑からは作物がとれるようになる。

仕送りもそうなければ必要なくなる。

それまでの間だけである。

それまでは甘えるしかないが。

(早く自分らだけでやっていけるようにしないと)

その為に土をひたすらに耕していく。

雑草生い茂る平野を、食い扶持を生み出す畑にするために。

最初に一年目は予想通り大した収穫ではなかった。

それなりの広さがあるとはいえ、まだ土も作ってない畑である。  
種をまいても成長はさして期待出来ない。

これからじっくりと土を作っていかなば、大きな収穫はありえない。

雑草だって根気よく抜いていかなばならないのだ。

根っこを張ってる雑草を少しでも取り除かなばならない。

その隣で新たな畑を作りながら春と夏が過ぎていった。

秋に入れば今度は全員で畑作りとなる。

少しでも耕地面積を広げねばならないのだ。

休んでるわけにはいかない。

そうしてる間にも魚をとりにいたり、木々を伐採したりもする。

薪を手に入れ、耕作地を増やさねばならない。

やるべき事の種類はそれほど多くはないが、作業量自体はかなりの量だった。

二年目も大体似たようなものである。

二十人が食っていくために田畑となるとそれなりの広さが必要になる。

毎日毎日耕さねば必要な畑を確保出来ない。

石器の鍬を土に叩き込んでいってようやくどうにかなる。

それでも前年よりは耕作地が拡がり、畑仕事に従事してる者も増えた。

その分開拓に入る人間は減ったが、こればかりは仕方ないと割り切るしかなかった。

秋から春先にかけてで取り返すしかない。

明るい話もある。

その年の秋、収穫が終わった頃。

元の村から嫁が何人か来た。

先に畑を耕していた者達に嫁ぐ者達である。

新たな集落における最初の家族が誕生した。

早速畑の端っこに家を建て、夫婦となった者達の居場所を作る。全員で泊まり込んでる所にいさせるわけにはいかない。

夫婦には夫婦でいてもらうのが一番自然だ。

出来上がった畑の端に住居を造ったのは当初の予定通りである。なるべく畑にすぐに出られるようにするためだ。

元の集落のように、畑に行くまで時間がかかるという問題を極力解消するためである。

可能な限り畑の近くに住んでおく。

単純な事だが、これで幾らか問題の解決を図っていく。

元の集落は人が密集しすぎていた。

それはそれで良いのだが、適度な分散をしてないから弊害が発生した。

新たに作る集落ではその事への反省を盛り込んでいく。

そして三年目。

開拓を始めた二十人のうち半分が畑を耕していく。

それだけの人間が種をまき、作物を育てる事が出来るようになった。

残り半分が同じようになるまでにはもう少し時間が必要だ。

しかし確実にあとを追うことが出来る。

時間はかかるが、二年三年もすればほぼ全員が畑を持つてる事だろつ。

そう信じてヒロフミはひたすらに畑を作っていた。

しかしここで想定外の事が起こる。

開拓作業自体は順調に進んでいたのだが、それを聞いた元の集落の者達がこちらに興味を示してきた。

作業が進み、畑が拡大してる事が伝わった為だ。

仕送りなどをされてるのでどうしても接点は出来てくる。

また、畑が出来れば仕送りは不要になる。

それが順調に作物が取れた事を示していく。

聞きつけた者が様子を見に来て、出来上がった田畑を見て目の色を変える。

結果、新しい集落への移住希望者が出てきてしまう。

彼等も夢をみてしまうだろう。

もっと広い畑が手に入るかもしれないと。

他の者の畑がすぐ横にある入り組んで状態に彼等も辟易していたようだった。

それを聞いてヒロフミは提案をしていく。

いずれやろうと思っていた畑の整理方法を。



23 歩目 いずれ収穫がしっかりとれるようになるとなるまでだ（後書  
き）

今日も何回か投稿していく予定。

## 24 歩目 取り決めについての提案

「 という事でどうだろうか？ 」

あとはそちらがやるかどうかだけど」

一旦元の集落に戻ったヒロフミは、関係者を集めて説明をした。田畑を整理する方法についてである。

話を聞き終えた者達は全員驚いた顔をしている。

「 いや、それで上手くいくのか？ 」

「 ちゃんと払ってくれるのか？ 」

当然の疑問が出てくる。

ヒロフミとて疑問というかどうかなるだろうと思っっているくらいだ。

「 だから、約束を破った者は処罰する事にしようと言っている。

しっかり払わなかったら頭をかち割る。

受け取ったのに支払われてないと嘘を言ってる者も頭をかち割る」

「 なあ、それって確実に死ぬよな」

「 もちろん」

「 そこまでするのか？ 」

「 やるぞ。」

約束を破るつてのはそういう事だ。

まして今回は畑をやりとりするんだ。

その為の約束を破るんだから、死ぬ覚悟をしてもらわんと」

それを聞いて多くの者は怯んだ。

命がかかるとなれば当然だろう。

だが、ヒロフミの言ってる事も理解出来ていた。

畑を譲る約束をするのだからそれくらいの覚悟はしなくてはなるまいと。

また、その為の交換条件もある程度納得が出来るものだった。

「 もし、これで良いなら早速やろう。」

当事者同士が納得出来るならな」  
ヒロフミはそう言って全員に覚悟を問うた。

入り組んだ田畑をどうにかしようという話のために元の集落に戻ってきていた。

それが理由で新しい集落にやって来ようとしていた者達に別に道を示す為。

話には当事者だけではどうしようもないので、集落の代表者である長と要職についてる者達を呼んだ。

それらの協力も必要だったからだ。

立会人がいないと当事者達が揉めたときに解決が出来なくなるからでもある。

提案したやり方を当事者が受け入れた場合に、再度説明するのが面倒だというのもある。

公式に記録をとっておかないといけないから、集落を統括する者達が必要だった。

畑の交換における条件には、それが必要になる。

交換するにあたって、当然ながら収穫量の違いが問題になる。

誰だって作物がより多く手に入る畑が欲しい。

そして、交換するのが今までより成果が少ない場所などをもっての他だ。

成果の少ない土地も時間をかければどうにかなりはする。

土に堆肥をやって土壌を改善していけば改善はしていく。

それでも当分の間は収穫量が低いままである。

その時間差が辛いのだ。

土壌を改善・向上させてる間は成果が上がらないのだから。

成果の上がっていた土地は、それだけ手間をかけてきたという事

でもある。

そこまでして作ったものをおいそれと手放せるわけがない。  
なので、交換条件をつけた。

同じ広さで交換するのではない。

その土地からあがつてくる収穫量の一年分の作物を、元の持ち主に提供するという事を。

金銭の無い現状における売買である。

交換そのものは既に行われている。

魚や農作物を交換したり、狩りの成果と交換したり。

飼育してる家畜や、それからはぎとった革を手に入れたり。

だが、あくまで小規模というか、低額な範囲でのやりとりだった。  
土地の売買というのは初めてである。

なんだかんだで扱う物が大きく、また交換に値する価値ある物が  
全く考えつかなかったから為されてなかった。

思いつくのは広さであるが、それだけでは計れない収穫量という  
要素もからんできていた。

なのでどうにも上手いやり方を思いつかなかった。

金銭があればそれで解決も出来たのだろうが、無い物を求めても  
どうにもならない。

なので、手に入る収穫量で交換する事にした。

一年分としてるのは、今後ずっと収穫量分を支払うのも問題だっ  
たからだ。

交換は支払う限度が決まってるから成り立つ。

一度したら、それ以上は支払う必要無い。

そういう状態にもっていかねばならない。

でなければ、誰かが一方的に損をする結果になる。

こういった場合の負担は、可能な限り少なくする、あるいは一度  
限りにしなければ取引とは言えない。

負担も大きさを極力少なくしなければ、誰かが不当に搾取される事になる。

もちろん取引というのは完全に等しい条件で行われるものではない。

売った方も買った方も何かしら損をしてる。

そもそも、当事者のどちら側も思ってるものだ。

『高値で売りつけられた』

『安く手に入った』

概ねそんなものである。

だが、どちらも満足のいく所で納得しているものだ。

そういう条件をどうにか探っていくのが取引であり売買なのである。

ヒロフミが提案したのも、そういった取引の条件である。

お互いが納得………出来るかどうかはわからないが、妥当と思えるあたりを考えてみたものだ。

ただ、これをやるにはどうしても正確な記録が必要になる。

だからヒロフミの家がやってる記録という作業が絡んでないと意味が無かった。

まず、一年分の収穫量を正確に記録していなければどうしようもない。

それには過去の成果を調べる必要があった。

そこから出せる分量をはからねばならない。

だいたい毎年当たり外れはある。

狩猟や採取より安定してるといっても、天候などで作物の収穫量も変わる。

だが、大雑把な範囲は決まってるのだから、その範囲で支払う量を決めていく事になる。

これが理由の一つになる。

もう一つは、支払いにあたってどうしても分割払いが必要になる事に関わる。

畑一つの一年分の作物を一気に支払ったら、一年分の食い扶持が無くなってしまふ。

金銭と違って蓄えるのも難しいので、貯蓄もなかなか存在しない。冷蔵庫などの保存方法がないのだからやむを得ない。

なので、毎年の収穫から支払える分を提供していくしかなくなる。そこで、何をどれくらい支払ったのかをはつきりと書き出しておく必要がある。

支払ったのに受け取ってないと言ったりするのを防ぐためだ。これにはしっかりと記録が必要になる。

その年にどれくらい支払い、残りはどれだけになってるのかを。

その為に、第三者として記録係が必要になる。

そして、取り決めを守らなかった者への処罰。

より多く相手から支払いを得ようとする者や、支払いを踏み倒そうとする者は出てくるだろう。

作物の成果が少なかった年は一時的な停止措置をとるつもりではあるが、そうでない悪意の行為は決して許すわけにはいかない。

そういった行為があった場合の処罰をはつきり定める必要がある。だからこそ集落の代表者達にも集まってもらった。

何せ人に損害・負傷を負わせる事になる。

勝手に決めたとあれば様々な問題が発生するだろう。

だから、何らかの形で納得させねばならなかった。

最悪、死刑すらありえるのだから誰もが慎重になる。

「けど、こうでもしなくちゃしつかり守ると思えない。

滞りなく事を進めるためにも、約束を破ったら死ぬという事にし

ておかないと。

交換するのが畑なんだから、それくらいは覚悟してもらいたい」「ヒロフミからすればそれくらいの決心がないとどうにもならないと思った。

真面目に支払ってれば問題は無い。

受け取る側も、変な色気を出さなければ良い。

しかし、何にしる欲を抱くのが人間である。

長い支払期間になる事もあり、その間に邪心が芽生えるかもしれない。

それへの対処として刑罰を設定するしかなかった。

命がけで悪さをするのかと圧力を加えるために。

もちろん、そういった愚行をしなければ何も問題は無い。

繰り返しになるが、双方がおかしな事を考えず、支払いを滞りなく行っていけば良いだけの話なのだから。

それが出来ない、約束に押しつぶされる弱い小さな心の持ち主が出てしまうのが残念な事ではある。

そんな条件を出した事でさすがに色々と荒れた。そこまで厳しい仕置きは必要ないので、という意見がやはり出た。

しかし、人の弱さを知ってる者達もいて、時に厳しい態度も必要だという意見も出た。

意見はかなりの平行線を辿ったが、最終的には概ねこれらの通りにやっていく事で決着がついた。

一応の逃げ場として、畑の交換契約の場合に死刑という処罰を盛り込むかどうかを当事者が選択出来るようにした。

さすがに全ての取引を大将にするのは気が引けた結果である。

ヒロフミとしても、それならば仕方ないと諦めて、その提案を盛り込む事にした。

そんなこんなで畑の交換も始まっていった。

小さな畑が細切れ状態になつてゐる事に嫌気がさしていた者達の問題もこれでかなり解消された。

新たな集落にやつてくる理由はほとんど無くなつた。しかし。

それはそれとして、新規の畑を手に入れようという者達はいる。元の集落では拡大が困難だと思つた者達は、やはり新しい集落へと流れてきた。

ならばとヒロフミも条件を付けた。

そういつた者達に畑を分けるのは、先に開拓に入つていた者達の後になると。

それに納得して、記録として条件に賛同した事を残す事を求めた。破つた場合は処罰するという条件を加えて。

これが出来ないなら絶対に受け入れないとはっきり伝えた。さすがに死ぬとあつては多くの者が怖じ気づいていく。

しかし、本当に一部はそれでも良いと言つる者もいる。

ならばとヒロフミも記録をはっきり残してから新人を受け入れた。あとでもめ事を起こすようならばはっきりと処分するつもりで。



## 25歩目 やはりこついう者が出てきたかと嘆く

残念ながら問題を起こす者はやはり出た。

開墾した畑を割り振る際に、口を挟んできた。

その場は約束した事でやり過ぎし、後でこねて言い分を通そうとしたのだろう。

すぐさまヒロフミはその者を取り押さえさせ、処罰を実行した。

口を挟んだ者は驚き、必死になって弁明をはじめた。

本当に殺すのかと相手の情けに訴え。

本気じゃなかったんだ、と言いつきをし。

こんな事して良いと思ってるのか、と恫喝をし。

それらを全てヒロフミは懽然憤然として聞き流した。

「約束破ってる屑が偉そうな事言ってるじゃねえ」

全ての言い訳にただそれだけを返し、石斧を振り上げて頭に叩きつけた。

それを皆に見てる前で行い、約束破りがどうなるかはつきりと示した。

以後、最初の取り決めを破る者は出てこなくなった。

約束を破る事の危険性をはつきり認識したせいであろう。

そもそも約束を守るうとしてしている者にとつては何の問題にもならない事であった。

以後、畑の分け与えについてくだらない横槍を入れるような者はいなくなった。

对象的に、畑の交換を始めた元の集落の方ではそれなりに問題が発生していった。

ヒロフミが懸念した通りに、支払いの滞りや余分な支払いを求め

る者が出てきたのだ。

それらの半分は処罰を契約に盛り込んでない者達であった。

また、処罰を盛り込んでいても、執行者をなだめ、脅し、すかしで刑罰を執行させないようにした者もいる。

おかげでまともに支払った者が泣きを見る結果になった。

もちろん刑罰を執行した場合もあるにはあったのだが、そうでない場合も数多く残った。

執行する側に覚悟がない事が問題を拡大してしまっていた。

そこに至り、泣きを見た者達の多くはヒロフミの言っていた事の意味を理解した。

処罰が何の為に必要なのかを。

(だから言ったのに)

話を聞いたヒロフミはため息を漏らすしかなかった。

処罰をその時で選択するという事になれば、あの手この手で取り払おうという者が出てくる。

そういった者は、たいていの場合負担を踏み倒して利益を手に入れようとします。

受け入れる側はたいてい人がよいので泣き寝入りをする羽目に陥る。

世の中、悪意というのを無視していくわけにはいかないのだ。

そして悪意を実行しようとした瞬間に処罰を実行する覚悟が必要になる。

そして厳しくなければ処罰として成り立たない。

その厳しさが人のよい者達を及び腰にさせるのも確かだ。

そこまですなくても、というのが温情有る者の抱く感想であろう。だが、更に踏み込んで考えてもらわねば困るのだ。

処罰が実行されるのは悪意を実行した場合だけだと。

普通に取り引を行い、約束通りに事を運んでいれば処罰などされよ

うがないのを。

それを全く理解せず、起こった問題を放置するしかなかったのだからどうしようもない。

ヒロフミとしても救いようがなかった。

ただ、そうやって泣きを見た人間が再びヒロフミの所へと流れて来ようとしていた。

厳しい処罰を提案し、それを実行したヒロフミならば信頼出来るといつて。

「もうあんな目にあうのはごめんだ」

概ねそういつた言葉を口にしてきた。

そんな彼等をヒロフミは温かく迎える

事は無かった。

「ふざけるな」

それがヒロフミの放った言葉である。

「やられたらやり返せ。

取られたら取り返せ。

泣き寝入りするよな弱腰な人間なんぞいらん。

お前から強奪した連中を捕らえて処分してこい。

でなければ、お前らは同じ事を何度も繰り返す。

そんな厄介事の種なんぞ、ここにはいらん」

起こした問題を解決しない奴など邪魔でしかなかった。

もめ事は可能な限り減らしたい。

その為にはもめ事の原因を取り除くしかない。

今回、被害者達にはヒロフミとて同情している。

だが、泣き寝入りだけは絶対許さなかった。

「やった奴を成敗してこい。

でなければここにいる事は認めん」

ヒロフミからの条件だった。

言われた者達は、青ざめた顔をして退去するしかなかった。

その後。

元の集落に戻った者達の大半は泣き寝入りをした。

問題を解決するために集落の長などに訴えたりもしたが、ほとんどが無駄に終わった。

長や要職にある者達も、強奪した方を説得しに言ったのだが、聞く耳など持たれなかった。

話し合いでの解決を望んだが、話し合いにならないのだから当然である。

相手は、話し会おうとする人の好きにつけ込んでるのだが、その事に全く気づいてない。

そんな中で一部が強奪した者にやり返した。

土地を奪い、収穫物を奪った者を石斧や石鍬で滅多打ちにした。

集落はそれで騒然とし、報復した者を捕らえた。

騒動を起こしたという理由で。

その事を長や要職にある者は責め立てた。

元をただせば、強奪した者が悪いというのに。

しかし長達からすれば、相手を殺した者が、暴力を振るった者が悪いとされた。

それまでの経緯を悉く無視して。

争いというか、報復に至るまでの経緯など彼等には全く見えてないようだった。

しかし。

ここに来てヒロフミは動いた。

「そいつはこちらで引き受ける。

家族もだ。

邪魔するなら、あんたらを潰していく」

元の集落にやってきたヒロフミは、捕らえられた者達の引き渡しを要求していく。

仲間を引き連れて、武器を携えて。

その事に長をはじめとした要職にある者達は驚き、気色ばんだ。いったい何を考えているのだと。

怒鳴る彼等は無意識に思っていたのだろう。

自分達に従わないのはどこがおかしい。

何か間違ってるのだと。

そう思うのは上に立つが故であろうか。

彼等は自分達が間違ってる可能性については欠片も考えていなかった。

しかし、そんな事はヒロフミの知った事では無い。

出て来た彼等に手にした武器を向けて、躊躇う事無く用いた。

最近狩猟に出てる者達に提供しようと思っ作っていた武器、弓を。

原始的なものである。

飛距離も大したものではない。

鏃もなく、どうにか尖らせた木の棒を飛ばすのがせいぜいの代物だ。

しかし、遠距離攻撃武器である。

威力も小さいとはいえ、当たれば人に食い込みはする。

それを容赦なく使った。

それを受けた長の体に矢が食い込んだ。

そんな事をされると思っていなかった長は、苦痛の中に驚きを浮かべてヒロフミを見つめる。

「誰がお前の言う事なぞ聞いた。

俺は捕らえられてる連中に用があるんだ。

邪魔するな」

そう言っって掴まってる者を見つけて解放した。

縄で縛られたその者は、登場したヒロフミに驚き、縄を切っってい

った事に更に驚く。

そんな彼にヒロフミは、「行くぞ」と短く告げた。

「どうせここにはいられないだろう。」

だったらこっちに來い。

あんたはやるべき事をやった。

それならこっちも拒否する理由は無い」

そう言つて捕らえられていた者を促していった。

解放された方も、その後ろについていく。

どのみちここにはいられない。

だが、心残りはあつた。

「なあ、家族を連れていきたいんだが」

彼には妻子はいなかつたが親と兄弟がいた。

それらを見捨てるのはしのびなかつた。

だがヒロフミは、

「そいつらにはあんたを助けたか？」

助けないまでも、やってる事に賛同はしたか？

まさか止めようとしなかつただらうな？」

と尋ねた。

言われた者は何も言い返せなかつた。

黙認どころか、報復を止めようとしたのだから。

その沈黙でヒロフミもおおかたを悟る。

「なら駄目だ。」

やるべき事をやれない奴はいらない」

奪われてそのままにしておくような者などいらなかつた。

邪魔でしかない。

それは、強奪する者への協力なのだから。

たとえどれほど消極的な形であっても。

そういつた者を受け入れるわけにはいかなかつた。

「俺が認めたのはあんただけだ」

選別にかけるつもりはなかつたが、そういう形になっていく。

そういつた者を引き連れて自分達の集落へと戻っていく。  
射られた長や要職にある者、その場にいた村の者達はそれを見送  
るしかなかった。

下手に手を出せばやられる。

既に示されたその事実が、ヒロフミ達に手を出す事をはばからせ  
た。

その後も同様な事が何度か繰り返された。

ヒロフミはその都度報復をした者を連れて集落に迎えていった。

彼等には、後年出来上がった田畑を与えて集落の住人としていっ  
た。

が、その一方でもう一つの役目を負ってもらった。

処罰の執行者を。

田畑を耕してる時はさすがに無理だが、そうでない時期は持ち回  
りで担当してもらう事にした。

後年その一族が、刑罰の執行者の役目についていく事になる。

同時に、集落に受け入れる者達の基準がまた一つ出来上がってい  
った。

嘘を吐かない。

誠実である。

悪事を決して許さずに攻撃を加える。

そんな者達で構成されるようになっていった。

また、不当な利益を得ようとした者は、その一族を含めて侵入を  
許さなかった。

特にそういつた親を持つ者は断固とした拒否対象とした。

血のつながりを元に村に入り込もうとする可能性があったからだ。  
遺伝的にそういつた素質をもってるのではないかという危惧も出

されていた。

例え遺伝がないにしても、そんな親の下で過ごしたという教育環境が懸念された。

不安な要素がどうしても多いので、これらの要素を持つ者は入居を拒否していく事となった。

新しい集落への受け入れ条件は厳しくなっていく。

だが、そうしないと余計な騒動が起こり、元の集落で起こった事が再現される可能性が出てくる。

面倒なもめ事を受け入れる理由は無い。

他人への同情よりも、まずは自分達の生活が大事である。

己を損なってまで他人を助ける義務や道理はない。

そんな事をすれば共倒れになるだけである。

余談となるが。

元の集落はその後も傍若無人を為す者達が幅をきかせ、徐々に衰えを見せていった。

残るのが、不当な利益を上げるものと、それに泣き寝入りをする者だけなのだから当然であろう。

生産性が高まる事もない。

成果を横取りして儲けようという者が残るのだから。

自分が働くよりもその方が楽だと知ってしまったえばそちらに流れていく。

かくて真面目に働く者が割をくっていく。

そんな状況でやる気を持つ者が出てくるわけがない。

ほどほどに働くか、ヒロフミのいる集落に逃げるのが当然である。時折報復もなされていくが、その度に報復した方が捕らえられた。もとより、原因を考えずに騒動にした事を非難するのだから当然である。

そこに、不当に利益を得た者からの賄賂があるのだからなおのこ



とであつた。

踏み倒した利益の一部を長や要職にある者達に渡し、それで有利な結果を得ているのだから話にならない。

移住できる者は次々とヒロフミの所へと向かい、残るのは搾取に疲れた者と、自ら働く事を放棄した者ばかりとなつた。

ヒロフミの所も余裕があるわけではなかつたが、条件にあつた移住者はどんどん受け入れた。

人手は必要だつたからそれは助かつた。

何より、真面目に働こうという気概の持ち主がほとんどである。

田畑の拡大なども順調に進んでいく。

結果、新しい集落の人口は一百人に増大した。

元の集落が二百五十人だつたから半分近くが移動した事になる。

田畑が拡大するまで生活は苦しくなつたが、それも一時の事と割り切つた。

実際、田畑が拡大するに従い、生活は楽になつていく。

五年十年と時間が経過していくうちに、いつしか元の集落と新しい集落の能力は逆転していく事となつた。

## 26 歩目 全員に覚悟を決めてもらおうしかない

ヒロフミの生きてる間にそれほど大きな差は出てこなかった。

その時点ではまだ元の集落の方が人数は上である。

差は小さくなっていったが同等にはなっていない。

そもそも田畑の拡張中の新しい集落である。

既に十分な収穫をあげる田畑を保有してる元の集落にかなうわけがない。

しかし、なんだかんだ言っただけで流れてくる人間が原動力になって田畑の拡張はされていく。

かつての集落の陥った問題を参考に、それを解消していく方法を求めて実践もした。

今はともかく、将来の発展の可能性は大きく、いずれはより大きく発展していくと予想されていた。

(とはいえ……)

それでも釈然としないというか、慥然としてしまう事もある。

元の集落における問題もそうだが、それに対して自分の実家や一族があまり役に立ってない事だ。

自分の親兄弟に親戚。

元を辿ればかつての自分の血を引く者達である。

年上であっても子孫である。

それらが今回の問題についてうるたえてるのが何とも情けなかった。

(そこまで落ちたのか?)

もう少しまでもであると思っていたのだが、その予想は裏切られた。

自分が殊更優れてるとは思わないし、その子供の能力や才能もそれほど高く見積もってるわけでもない。

見下したり卑下してるのではなく、平凡な人間としてまずまずなら良いと思ってるからだ。

何も天才や秀才、異能の能力を求めてるわけではない。

しかし今の子孫達である親戚一同は、それすらも下回ってるように思えてならなかった。

(もうちよっとしっかりしろよ……)

そう思ってしまうのは高望みすぎなのだろうかと悩んでしまう。

嘆いてばかりでも始まらないので今後の対策や方針も考えていく。とにかく非道な事をしてる連中と、それに妥協してる者共を寄せ付けないようにしていかなばならない。

幸いな事にそれに立ち向かった者達がいる。

それらをまとめて今後の備えの中心としていきたいものだった。

また、元の集落とは絶縁状態にしておく必要がある。

関係を持てば絶対につけ込まれる。

向こうは宿め賺しに威圧と様々な手段を使って揺さぶってくるだろう。

それらを相手にしてられない。

何かしてきたら話しをせず、問答無用で叩きのめしていかなばならない。

そうでもしないと呆気なく蹂躪されるだろう。

逆にこちらから攻め上がるのは難しい。

まずもって人数差がある。

多少のちよつかいや攪乱工作は出来ても、正面切ったの戦いになれば分が悪い。

やれば確実に負ける。

まずはこの人数差を同等の所に持ち上げて均衡状態を作らねばな

らない。

その為にも、集落の更なる発展が必要だった。もっと広い畑と、それによって養われる人数が必要だった。となれば、やる事は一つである。

「これからの事を伝えておきたい」

収穫が終わった秋、ヒロフミは皆を集めて語った。

「知つての通り、俺達の元々の集落は悲惨な事になってる。

助ける事は、おそらく無理だろう」

事実を事実としてしっかり告げる。

聞いてる者達の表情は硬い。

出身地の悲惨な状況を聞かされてるのだから当然だ。

しかし、落ち込んで立ち直れなくなってるわけではない。

誰もが、強い意志を持っている。

ではこれからどうするのだ、という気持ちだ。

やられてやられっぱなしでいるつもり人間などここにはいない。

だからこそヒロフミは伝えていく。

これからやる事を。

「まず、この集落をもっと大きくしよう。

畑を広げなくちゃならない。

もっと多くの人間を養っていけるようにしなくちゃならない。

そのために必要なものを作っていかななくちゃいけない」

言われるまでもなかった。

今現在の畑の広さでは、人を養うのも難しい。

元の集落と同じくらいに拡大していかなば困ってしまう。

今も元の村からの支援があっけりぎりやっていけるのだから。

その分、元の村に残ってる者達に負担をかけてしまっている。

それらを少しでも早く解消するためにも、田畑の拡張改善は急務だった。

「その上で、更に川に沿って下った所に新しい集落を作らなくちゃならない」

これは少し意外ではあった。

今現在の集落をもっと大きくするだけで終わると思っていたからだ。

しかし、ヒロフミはそれで良いとは思っていなかった。

「ここはこの先、元の集落から色々とちょっかいが出されると思う。たぶんぶつかり合いにもなるだろう。」

そうになると、畑仕事どころじゃなくなる。

だから、安心して畑仕事ができる場所を作らなくちゃならない。

そのかわり、元の村からの仕掛けは全部ここで撃退する。全部だ。

そのつもりがある者だけ残ってくれ。

そうで無い者は、出来るだけ早いうちに新しい集落を作りについてくれ。

もちろん今すぐじゃない。

これから何年も先の話だ」

そうしなければならなかった。

最前線ではまともな作業は出来ない。

たとえ実際に衝突がなくても、それぞれの思惑がぶつかり合う場所では落ち着いて生産活動など出来ないだろう。

少なくともヒロフミにはそれが可能だという確証を得ることは出来なかった。

それならば、より安全な地域や地帯に新たな拠点を作った方がよいと思えた。

「そして、元の集落より俺達が勝ったら、あらためて取り返しにい

こう。

あそこをあのままにしておきたくない」

そう締め括って大雑把な方針の表明を終えた。

細かな部分についてはより詳しい説明が必要になる。

だが、これから何をして、最終的にどうするかは今言った通りになる。

『相手を上回るまで、ひたすらに拡大拡張を続けていく』

ただこれだけである。

そして、これを成し遂げるために、ありとあらゆる努力をしなければならなかった。

まず第一に、元の集落への想いや未練を断ち切らねばならない。

取り返しに行くと言っておきながらおかしな事である。

だが、いずれ取り返すにしても、それまでは敵と置いていなければならぬ。

でなければ、心に隙が出来る。

情にほだされる。

それが決壊・崩壊の始まりになりかねない。

「それまでは、身内であっても元の村の者との接触を禁じる。

背いたら、処罰だ」

強硬手段である。

ただ宣言するだけではなく、行ったら処罰するという具体的な対応をするのだから。

それが努力目標などという生やさしいものでないのは明らかだ。

この瞬間、身内との接触のほとんどが断ち切られる事となった。

「ただし、向こうから物資は可能な限り奪う。

あいつらは他の者から田畑を奪い、収穫を強奪していった。

だったら、俺達がやっても問題ない。

先にやってきたのはあいつらなんだからな」

明確な報復である。

やられたからやり返さねばならない。

損害を補うまで決して許してはならなかった。

でなければ一方的な損害を受けるだけになってしまう。

そんなもの、何一つ良い結果をもたらさしはしない。

いずれ自分達が潰えるだけだ。

元の村に残ってる、ただひたすらに争乱を理由に報復を禁じた者達が衰退していつてるように。

「これから先、元の集落からやってくる者は、連中の息がかかって可能性がある。

そうでない者もいるかもしれんが、見分けはつかない。

だから、やってくる者全員を送り返す。

「帰らなかった、処罰するしかない」

やってくる者に対しても厳しい処断を下す事になった。

これもまた、つけいる隙を与えないためである。

直接的な戦闘も怖い、もっと恐ろしいのは内部に浸透してくる敵である。

それは単純に攻撃するだけの軍勢以上の破壊力を持つ。

場合によつては、戦わずして崩壊してしまう事すらあるのだ。

だから、決してそんな者を内側に入れるわけにはいかなかった。

今は断絶をしていくしかない。

「それをいつまでやるんだ？」

質問が上がる。

「勝てるまでつてのは分かるが、それはいつまでかかるんだ？」

「分からん」

もっともな質問に正直に答える。

「少なくとも、こちらが向こうの五倍六倍つてなるまでは我慢するしかないだろうな」

「じゃあ、かなりかかるんじゃない」

「何十年とかかるだろうな、最低でも。」

「百年はみておかなとまずいかもしれん」

大雑把に考えてのものだが、ヒロフミはそれくらい時間がかかる  
と思っていた。

それくらいでなければ体制が整わないだろうとも。

「その間、連中も黙ってるとは思えない。」

何かしらやってくるだろうから、それを撃退出来るようにする。

皆もそれを覚悟してくれ」

締めくくりに一言添える。

「でなきや、元の集落で起こった事がここでも起こる。」

それはごめんだ」

言われて誰もが思い出した。

元の村で行われていた事を。

衝突は避けたいところだが、不当に強奪されるのも嫌だった。

どちらかを選ぶしかないなら、まだしも衝突の方が良かった。

それならば、自分を守る事が出来る。

「たぶん、このどちらかしかない。」

俺は戦う方を選ぶ」

言われて誰もが納得した。

するしかなかった。

やらねばやられるのだから。



**26 歩目 全員に覚悟を決めてもらうしかない（後書き）**

本日はここまで。

続きは明日。

出来れば多めに投稿したいけどどうなるかは分からない。  
なるべくやっていきたいが。  
さて、どうなるやら。

## 27 歩目 やれる事は全部やり、土台を作って次に回す

その後の人生は、元の村への備えと、次の集落建設に向けた行動に全てが費やされた。

どのみち生きてる間に全てが実現するわけもない。

出来るのは、最終目的の提示と、その為にやるべき事の策定。そして、今現在からやるべき次の行動のための準備だった。

可能なものは実現していくが、それもほとんど手がつかない。ただ、出来るだけの努力と準備はしていった。

何はなくとも田畑の拡大拡張は急務になった。

これが無ければ人口を維持する事も出来ない。

とにかく急いでいかなばならなかった。

手の空いてる者とはにかく土地を耕し畑にしていく。

用水路も同時に掘っていき、水を引き込んでもいった。

増えた人口が食糧事情を圧迫したが、人手の多さがここでは助けになった。

当初の予定以上の早さで畑が出来上がっていき、必要な収穫量を確保出来るようになるまで二年三年で到達出来た。

同時に嫁取りもどんどん進み、新たな夫婦と家族が誕生していった。

ヒロフミも例外ではない。

前回と同じく嫁を二人もらい、その間に子供をもうけていった。

その間に田畑は更に増えていき、同様に誕生してくる家族を十分に支え、次の世代を受け止めていく。

また、生まれてきた子供達の為にも更なる田畑の拡大が急がれていた。

子供達が大人になって働けるようになるまで、誰もが手を休める事無く作業に従事していく。

その傍ら、ヒロフミは川に沿って下った地域に次の集落予定地となる場所がないかを探っていた。

出来れば子供達が大人になるまでにはある程度場所を切り開き、田畑を作るようにしておきたかった。

猶予は十年から十五年。

他の作業と平行して進めねばならないので、意外ときつい工程になつていく。

それでも何人かの人間を見繕つて、川沿いに移動させて調査をしていく。

それだけで一年ほどの時間が経過してしまった。

残念ながら適度にかけてる場所はなく、木々を切り倒して場所を作らねばならなかった。

手間は平野を開拓する以上になる。

それでもヒロフミはそれを実行する事にした。

平地の確保ではなく、木材の調達を目的と考えればあまり手間とも思えなくなつた。

また、木材は壁を作る為にも必要になる。

元の集落との衝突を念頭に置き、防壁の用意は急務となっていた。それを作る為にも、大量の木材が必要になる。

野生動物の侵入防止もせねばならないので、ついでにといったところだ。

ただ、備えとしてはそれなりのものにはしていくつもりだった。

集落を覆うには木材が足りないが、それでも何も無いよりは良い。少しずつでも確実に備えを作っていく、やがて来る日に備えていかねばならない。

その一方で更に新たな集落を作る準備もしていく。

森の伐採を続ける事でとにかく場所を作る。

伐採した木々で家を造り活動拠点とする。

活動拠点が出来たら用水路を引いて田畑を作る準備をする。

何年間かかかる大事業である。

それを最初は数人で行っていた。

いずれより多くの人間を投入するつもりであったが、最初はそれほど多くの人間を割けない。

元々の人数がそれほど多くもないし、田畑から得られる収穫で作業に専念する者を養うのが難しいのだ。

これもまた時間と労力を費やさねば解決しない問題である。

しかし時間と共にそれらは解消されていく。

次の世代の子供達が大人になる頃には余剰の人員も増えている。

そうなれば、一気に次の集落の構築に着手出来る。

全てははそこからだった。

その間にも、元の集落からあれこれとちよつかいは出されていた。その全てをヒロフミは撃退し、決して集落に近寄らせなかった。

一方で元の集落に残った一族から情報を得て、最新の状況を可能な限り聞き出していた。

予想通りであったが、酷くなる一方である。

どうしようもない者達を強権を持って排除する事も出来ず、それどころか賄賂をもらって横暴を容認すらしていた。

真面目に働く者ほど損をし、必死になって作り出した収穫を根こそぎにされてる程だ。

それを見てどうにかしようにも、上から下まで搾取の旨みに飲み込まれ、とても是正できる状態ではなかった。

そんな状況を見かねて、ヒロフミはまともな者達にささやかな助

言をした。

その気がある者だけで、川上に向かっていき、そこで新たな田畑を作れと。

出来るなら集落を作ってそこで独自の勢力を作れと。

ヒロフミ達は新規の受け入れを遮断してるので、彼等が生き残るにはそれしかない。

他に生きる道もなさそうだった事もあり、元の集落の者達の中には、それを実行していく者も出始めた。

多分に同情から行った進言であるが、同時にそれは相手の内部分裂を促す事にもなった。

特に労せずして相手の勢力を削ぐ事が出来たのは有り難かった。

これで元の集落に残っていた一百五十人は更に人数を割り込む事になる。

逃げ出したのは三十人ほどであったが、それだけでヒロフミ達との戦力差は大幅に縮まる。

当然ながらヒロフミの一族も各地に分散する事となった。

元の村に残ってる者もいるし、新しい集落にもいる。

川上に向かっていった者達の中にも存在する。

どこでもそれなりに必要とされる技術をもってるので何かしら必要とされる。

元の集落に残ってる者は多分に墮落してる場合がほとんどであったが。

それでも何人かはまともな者もいて、かろうじて集落としての機能を保っていた。

無駄な努力ではあるが、そうやって少しでも形を保ってほしいとも思った。

今、集落が崩壊してしまったら、周辺に人が分散してしまう。

そうなったらヒロフミ達の所に流れ込んで来る者も出てきてしま

う。

今はまだそうなって欲しくなかった。

余計な問題が起こってしまい、勢力が二つに割れてしまった。

それは残念な事だが、それでもヒロフミはそれへの対応として長期間の対立を遂行していく土台を作った。

（冷戦かよ、まったく）

かつて歴史の授業で習った事をも出す。

それに比べれば規模は比べるべくもないほど小さいが、やってる事の内情は同じようなものだった。

しかもこちらは内部分裂である。

元々別の国家・民族だったわけではない。

なんでそれが、搾取する側とされる側の上下垂直に分かれ、あげくに前後左右という水平方向に分かれて対立してるのかと思ってしまう。

嘆きはひとしおだった。

しかしなってしまうものはしょうがない。

起こった事態に対処し、よりよい状態を目指すしかなかった。

その準備に費やした人生も終わり、再び死を迎えていく。

今回も四十年近く生きて、成長した子供達と、初めて生まれた孫の顔を見て息を引き取った。

まだまだ寿命が短い中において、長生きしたほうである。

## 28 歩目 言われてみればそうかもと思う事

「やあ、ご苦労さん。」

今回も凄いね」

四十年ぶりに聞く声が少々鬱陶しい。

死んで、再びやってきた死後の世界で彼は、記憶の中と変わらない姿で立っている。

そういう存在なのだろうからさして不思議とも想いはしない。

人間の尺度や考えでとらえる事の出来ない存在だけに、持つてる常識でとらえる事は無意味だろう。

ただ、あらためて見る事で、ああ自分は再び死んだのだと理解する。

「かなり上手く進めてくれたよ。」

これなら上手く成長していくんじゃないかな」

評価の声を聞き、いくぶん満足する。

しかし、やってきた事を振り返ると果たしてあれで良かったのかと思ってしまう。

「もっと上手く出来たんじゃないのか？」

対立して終わってるわけだし」

そこが気がかりではある。

もっと良い形で決着をつけられたのではないかと。

問題を発生させないで物事を進める事も出来たかもしれない。

それは無理だとしても、もう少し穏便な形で済ませられたのではないかとも思う。

強硬手段というか、やむなく厳しい方法をとったが、果たしてそれで良かったのかという思いもある。

そうするしかなかったし他の方法も思いつかなかったが、やはり多少の後悔はある。

しかし造物主は、

「しょうがないじゃん、あんなのと笑いとばした。」

「全部を制御するなんて無理だし。」

それに、期待していた通りの動きをしてくれたし」

思ってもいない言葉だった。

あれで良いというのはさすがに想定外だった。

「もっと穏便な方法とかが良かったんじゃないの？」

「いや、そうでもない」

ヒロフミの疑問に造物主は首を横に振る。

「むしろはつきりきっぱりと断ち切って正解だと思うよ。」

言っても駄目な連中ってのはいるから。

なんでそんな事するのは分からんけどね」

「そういうもんなの？」

「そういうもんだよ。」

お前さんが手こずってたというか、はっきりと拒絶した連中な。

あれはああいう風に生まれついたからどうしようもない。

損害を受けるのが確実なら、切り捨てるしかないでしょ」

「はあ……」

造物主　　神とは思えない言葉である。

もう少し気にかけるとか、教え導くよな言葉があると思ったのだが。

「本当にそれでいいのか？」

「いいって。」

どうしようもない連中なんて救っても仕方ないし。

バグとか不良品ってどうしても出て来るじゃん。

それを後生大事にとっておくか？

消したり廃棄するのが普通だろ。

再利用しようもないし」

「そりゃそうだけどさ」



「救いたっていうならそれも良いけどさ。」

それで結局自分まで駄目になっちゃ意味が無いでしょ。」

「まあね」

それはその通りだと思う。

救えるならともかく、やるだけ無駄な事に時間も労力も費やしたくない。

「じゃあ、ああする以外の手段はないでしょ。」

それで良いよ。

一カ所を救う為に他の全部が駄目になる理由もないんだし」

「いや、神様としてそれでいいのかよ」

「はい？」

造物主は意外そうな顔をした。

「なんで？」

「え？」

「別に構わないよ。」

悪いのや駄目なのが潰れていくのは。

自然な事じゃん」

今度はヒロフミが驚く顔をした。

「なるほど、そう思ってたのか」

ヒロフミが驚いた顔をした理由を一通りきいた造物主は、ようやく納得したという顔をする。

「慈悲と慈愛か。」

それと救済ね。

まあ、言いたい事は分かるけど」

それでも造物主は不可解な表情をする。

いや、説明を聞いたから余計にといふべきか。

「なんでそういう事になってるんだ？」

そっちの方が不思議だ。

別に救う必要もないし、義理や義務もないんだし」

「え、いや、え？」

ヒロフミは混乱していく。

彼のもってる常識からすれば、それで良いのかという思いが強い。前世、それもこちらに来る前の元の世界における行動を省みれば、ヒロフミがそんな事言えた立場でもないが。

それでも、多少は悩んでいたし、何が良いのかと考えもしていた。こちらにおける先ほど終えた人生における行動にも、だから多少の迷いがあった。

ああやって切り捨ててよかったのか、元の集落の人間をどうにかするべきじゃないのかと。

しかし造物主はそれを否定する。

そんなヒロフミの考えや常識に疑問すら抱いていた。

「そもそもさ、誰がそんな事言い出したの？」

慈悲やら慈愛やら。

そりゃ、助け合ってる者同士とかなら分かるけど」

「いや、だって、そういうもんじゃないの？」

「何が？」

別にそういう決まり事があるわけじゃないよ。

少なくとも俺はそういうの作ってないし」

「え……………」

「そもそも俺は世界は作っても、その上で誰が何をどうするかなんて決められない。

これは前にも話したと思うけど。

だから、君やあそこで生きてる者達がどんな振る舞いをしようと否定出来ない。

まあ、発展や繁栄を阻害するような事はしてほしくないけど。

もし出来るんなら、君が拒絶して排除した連中を真っ先に消すよ」  
さらっと恐ろしい事をあっさりと言う。

「俺は確かに世界を作ったけど、別に慈悲とか慈愛とかいうのを

たらしてるわけじゃないしね。

負担にしかならないのなら、そんなものをさっさと消すよ。

というか、そもそも神が人を救うってのが分からないんだけど」

「……………」

「それ、たぶん前の世界での話でしょ。

で、神が救うみたいな話になつてると思うんだ。

でも、別にそんな取り決めなんてないよ。

虐げたり蹴落したりはしないけど、救いもしないし」

あくまで世界を作っただけであり、作るだけしか出来ないならそんなものだろう。

「そもそもなんだけど。

神が救うとか言ってる、実際に神が救ってたの？

そっちの世界見ても、君の話を聞いても、救ってたのは人じゃん。

神が救うなら、神が出ていって助けなきゃ駄目でしょ。

それが出来てないって時点で、神の救済なんて無いって事じゃん」

「あ……………」

言われて知った。

確かにそうである。

助けていたのは人間であり、神ではない。

なのになんで神の救済なんだという話になるのか。

「それもそうだな」

言われてあらためて感じた。

確かにそこはおかしいと。

「あと、助け合いつて意味で慈悲とか救済とか言うならいいんだけど。」

でも、助け合ってたの？

一方的に助けてただけじゃん、話を聞くと」

「まあ、確かに」

「それってさ、略奪とか搾取って言うしかないよ。」

どちらか一方が片方に奪われているようなもんなんだから。提供とか貢ぐとかでもいいけど。」

でも、それでどんな見返りもらってたの?」

「……………無いな」

「うわ、最悪だ」

造物主は手を額にあてて上を向いた。

「じゃあ、助けるというか、提供する意味ないじゃん」

「確かにそうだな」

「しないで良いのにやるわけか?」

そっちの方がおかしいだろ」

「言われてみれば確かにね」

そこは確かにそうである。」

「何かしないとまずい理由でもあったのか?」

「理由つてのは特にないな。」

なんとなく、そうした方が良いつて考えてたから」

「なんで?」

誰かに言われたのか?」

「いや、そうでも…………。」

でも、子供の頃からそう教えられてた気はするな。」

何かのうちに」

「そう言い聞かせられたから条件反射で、って事なんだろうな。」

でも、やらなくても特に何も無いんじゃないのか、そついの」

「まあ、あまり良くは思われなくなるくらいか」

「いや、それって最悪だろ」

造物主は更に顔を歪ませていく。

「悪評がたつって、完全に制裁じゃないか」

「え?」

「そんな評判建てられた奴に、誰が近づくんか?」

それこそ救済や援助どころか、共同作業とかにも参加出来なくな

るじゃん。

「完全な排除行為だぞ、それ」

「あ……………」

再び気づいた。

確かに物理的な痛みを伴うような罰ではない。

しかし、その後の生活が著しく損なわれる。

共同生活から切り離される事により孤立化し、生活の負担は極度に増大する。

例え集団の中によつとも、極論すれば原始時代並の生活を強いられることになる。

他の者から切り離される、絶縁されるといはずい事だ。

それが評判一つで行われるのだから、確かにこれは大きな処罰と言える。

「助けなけりや制裁するつて事にしか思えんぞ。

もう、そうなたら脅迫じゃないか。

慈悲や慈愛なんて言ってるけど、とんでもない圧政や抑圧だぞ」

その言葉をすんなりと受け入れてしまう。

反論する材料がないのだから当然だろう。

言われてる事に全て納得してしまえるのだから。

「助け合いつていうなら、提供した分をちゃんと返してもらわないと駄目だろ。

同じものが返ってくることはないにしても、別の形で何か返さな

くちゃ

「確かにな」

「だからお前さんも、あそこで元の集落の連中を排除したんだろ」

その通りである。

ヒロフミが元の集落との縁を断ち切ったのも、一方的な強奪や収奪が理由だ。

そんな事をする連中とは付き合えない。

互いに納得が出来る、損が出ない形でのやりとりをしようとしな  
い者などは敵でしかない。

「だから、お前さんのやった事は間違ってると思うぞ。

少なくとも、被害を拡大させる事はなかったんだから」  
造物主の言葉が正しいかは分からない。

だが、その言葉が今は救われる思いだった。

「だからこっちに引き込んだんだしな」

28歩目 言われてみればそうかもと思う事(後書き)

本日、あと一つを投稿予定。

## 29 歩目 こんな考え方で良かったということか

「どづい事だ？」

気になる言い方である。

おそらくヒロフミをこちらの世界に引き込んだという意味であるう。

「言ったとおりだよ。」

そう考えるからこっちに引き込んでみたんだ。

あのままあっちの世界で輪廻に入らせるのはもったいないと思っ  
たからね」

「……すまん、話が飲み込めない」

「何の説明もないからしょうがないよ。」

でもね、そう考えてるといっつか、あっちの世界でああいう事をしてたのは見てたから。

だから、もしかしたらって思ってこっちに引き込んだんだ」

一つの世界において靈魂は生死を繰り返し成長していく。

そうして育った靈魂はやがてより巨大な存在になっていく。

なのだが、例外も当然存在する。

その一つが別世界への移動である。

たいていの場合、新しく出来た世界に存在する者達の指導者的な立場になるためだ。

全く新しい世界の場合、生まれた靈魂だけではなかなか成長しない。  
い。

なので経験のある存在を引き込み、新世界における指導者として  
靈魂達の成長を促す。

新事業に立ち上げにあたり、経験者や技術者を用いるようなもの



である。

ヒロフミもそうやって引き抜かれた存在だった。

「お前さんは結構特異な存在だったからね。」

「どうなるかは分からなかったけど、もしかしたらと思っただけで引き抜いてみた」

「じゃあ、何の期待もしてなかったってのか？」

「何とも言えないね。」

何せ、今まであまり見なかったタイプだから。

上手くいくか失敗するかも分からないし、そもそもどんな風になっただけなのかも見当つかなかった」

なかなか大雑把である。

「でも、だから試してみようと思ったんだ。」

「どんな結果になるにせよ、とにかくやってみない事には分からないから」

「なんか、いい加減じゃないかそれって」

「そうじゃなきゃ、色々な可能性を導き出す事は出来ないよ。」

もちろん、壊滅や全滅するような状況になったら意味がないけど、さすがにそうなってしまふ方向や傾向などはある程度分かっている。

作られた世界は一つや二つでないし、そこでの人の営みも数え切れないくらいある。

ある程度の傾向や類型などは把握出来ていた。

衰退・滅亡していくのが確実と思われるものは可能な限り除外していた。

そういう方向に向かっていくような考えを持つ靈魂などは決して引き抜きをかけられたりしない。

「でも、お前さんは今まで見た中でも異質っていつか珍しいっていつか。」

全くいなかっただけではないけど、あまり見ないもんだっただから  
「それで引き抜いたと」

「そついう事。」

どうなるか試してみたくてね」

何とも言えなくなっていく。

確かにそう多くはないだろうが、そこまで珍しいものだろうかと思  
う。

自慢できるような人生だったとは言えないし、もっと良いやり方  
もあったのではないかと思う。

あの状況ではあれ以上どうしようもないとも思ってはいるが。

「まあ、そんなお前さんがどんな風にやっていくか分からなかった  
けど。」

でも、上手くいけばかなりの成果を上げられるんじゃないかとも  
思っただんでね。

実際、上手くやってくれたし」

言いながら目の前のヒロフミの二度目の人生が終わった後の集落  
の様子を出現させる。

空中に浮かぶ画像表示は前回同様に鮮明だった。

その端の方に、集落の状況を示す数値が浮かんでる。

今回は、元の集落と新しい集落の二つが並んでいる。

「新しい集落の方は、元の集落から離反した人達全部の数値をまと  
めてあるから」

ありがたい解説のおかげで数値の意味もしつかり理解出来る。

その数値の推移がまた凄い事になっていった。

元の集落の方はほとんど何ものびていなかった。

耕地面積は人数が減ったので拡大は見込めないが、それにしても  
収穫高が伸びていない。

現状維持すらも出来ず、少しずつ現象を続けている。

それに対して新しい集落の方は確実に拡大増大を繰り返している。見れば更に新しい集落もつくり、新規の田畑も出来ている。牧場も拡がり、イノシシの数も増大している。

また、元の集落と接している所は壁の建築も進み、外部からの攻撃に対処出来るようになっていた。

最も近いだけに、最も影響があるのだろう。

そこが壁になって元の集落からの影響を阻止している形だ。

川沿いに下流の方に拡大していく集落は一つ二つと増えていき、三世代四世代目になる頃には四つに増加していた。

人口も全部あわせれば五百人を超える。

それだけでなく、用水路を延長して川から離れた所にも水を引き、そこにも田畑を作っている。

平野部を有効活用するべく頑張っているようだ。

川の上流の方に逃げた者達もがんばっており、二世代三世代で元の集落を上回る人口になっていた。

四世代目では用水路を延長して川から離れた内陸部に田畑を広げている。

これには、間の集落を迂回して交流を続けていた川下の集落からの技術提供を受けたらしい。

足踏みを続けている元の集落と違い、順調に発展しているようだ。った。

「これもお前さんが元の集落の連中を遮断したからだね。

あそこで受け入れてたらどうなってたやら」

造物主の言葉もそこそこに聞きながら、ヒロフミは目の前の画面を見つめている。

同じ所から始まったにも関わらず、これだけの差が出るとは思わなかった。

人口において元の集落が全くと言って良いほど増大してないにも

関わらず、川上と川下の集落は順調に発展していつている。

相変わらず元の集落は人口にして一百二十人あたりを推移してるのだ。

「色々考える事もあるだろうけど、この結果が全てだと思うよ。

あの時お前さんが元の集落の連中を助けなかったから、繋がりを遮断したからこうなったんだから。

もし続けていたら、全部が元の集落と同じ道を辿っただろうね」「想像したくもないが、そうなっていたかもしれないと思うと恐ろしく感じる。

「慈悲や慈愛なんてものにとらわれず、それを向けるべき相手を限定した事でこうなった。

それで良いんじゃないかな。

何を大切にするかを決めて、そうでないものを排除したからこうなったんだから。

それで不幸になってるのもいるかもしれないけど、そういうのは他の誰かを不幸にしてるだろうし。

そういうのを仲間はずれにするのはむしろ正解だと思うよ」

そう言って造物主は肩をすくめた。

「でも、そう思えない人が結構いるんだよね。

だいたいお人好しで、他の誰かを助けにいたりするんだ。

悪くはないけど、見境無く助けるのが問題だね。

結局助けなくてよい、助けちゃいけないようなまで助けて、あとで自滅するんだ」

「……………」

「一度は壊滅寸前まで追い込んで、反省した相手は許しちゃおうし。それで相手は勢力を盛り返してやり返す。

それでまた鎮圧して許して、後でやり返される。

その繰り返しがほとんどだよ」

造物主は呆れたようにため息を吐いた。

「君はそうしなかったからね。」

初めてって事はさすがにないけど、これまで見た中でも数少ない状態だ。

おまけに上手くやっている。

非常に珍しいよ、こういうのは

「他の所は違うのか？」

「今の所はね。」

でも不思議なもんでね。

君みたいに駄目だと思った相手を容赦なく切り捨てる所が意外と伸びてるよ。

もちろん状況次第な所があるから全部が成功してるわけじゃないけど」

「それでも上手くいってるんだ」

「ああ。」

まだ他よりはマシだよ」

何がどうなってるのか分からないが、色々とあるようなのは分かった。

（これで良かったのか）

そう思えるだけでも気が楽になった。

ここに留まらず、もっと良い道がないかとも思うが。

そんなヨシフミに造物主は思わぬ事を言う。

「お前さんが元いた世界の連中の影響も弾けるしな」

「え？」

29 歩目 こんな考え方で良かったといふことか（後書き）

続きは明日。

18:00と21:00で投稿出来たら良いが。

無理だったら19:00に投稿。

短編で新しいのを出したので、そちらもよろしく。

「異世界転移した現代人ががんばる話／試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989>

[du/#narrow#narrowN2989DU](http://narrow.narrowN2989DU)

### 30 歩目 今回はかなりまずい状況になっているようだ

三度目の人生。

再び始まる作業に、ヒロフミは何とも言えない気持ちになる。

今度ばかりは今までのように発展と成長だけで終わる事は無い。そうなるだろうと予想していた。

元の集落の状況と、今起こってる事態。

それを考えれば決して穏便に終わる事は無いと思っていた。

(やるしかないよなあ……)

赤ん坊として母の腕に抱かれながらそんな事を思う。

気分は憂鬱だ。

決して乗り気ではない。

だが、避けて通る事も出来ない。

発生してるの問題は放置していられるものではないのだから。

ヒロフミが生まれてくる直前(と言っても数年ほど前になる)から血なまぐさい事が発生している。

いよいよ追い詰められたのか、元の集落が川下や川上の集落を襲い始めたのだ。

収穫した成果を狙い、最初は泥棒のように奪い始めた。

それに気づいた者達が盗まれないように警備を始めると、今度はそれを殺して奪うようになった。

強盗殺人である。

これに当然抗議をしたが、元の集落の者達は、

『警戒などして邪魔するから死んだのだ』

『何もしないでいれば、誰も死なずに済んだだろうが』

と不可解きわまりない事を言い出す始末である。

元はといえば盗みに来るのが悪い、そもそも自分達の食い扶持を作らないのが問題である。

だが、そう言っても、

『作物が実らない』

『天候が悪い』

などの言い訳に終止して改善しようとしなさい。

川上も川下も多少の差はあってもそれほど離れた地域というわけではない。

天候に極端な差があるわけではなく、作物の実りに違いが出るといっわけでもない。

それらが完全に言い訳であり、嘘八百なのは疑いようもない。

実際、元の集落の様子を見に行った者達は、田畑がかなり荒れてるのを観察している。

手入れをした様子も見えず、雑草がそこかしこに生えている。

ちゃんと鍬が入ってる田畑もあるが、驚くほど少なかった。

何度か見た所、どうもちゃんと田畑を耕してるのはかなりの少数である事が分かった。

しっかりと仕事をしてる所はちゃんと成果をあげてるのだが、田畑全体をまかなえるほどの人数ではない。

その為、どうしても耕作しきれない場所が出てきていた。

それでもどうにかしようとしてるのか、種をまいたり苗を植えたりはしている。

しかし手入れが行き届かない状態でそんな事をしてても成果はあがらない。

ろくに成長もしない農作物は、本来あるべき成長も出来ず、大半が潰えていく。

それでもどうにか収穫の足しにしようとか刈り入れはされるのだが、全体からすれば微々たる量にしかならない。

結局集落全体を支える程の収穫にもならず、足りない分を川上や川下への強奪で賄うしかなくなっていた。



(どうすんだよ、これ)

造物主から事前に聞いてた事を思い出し頭を抱えなくなる。

あまりにも酷い状況に憂鬱にもなるうというものだ。

一応川下の方にひろがってる集落は、こんな元の集落との接触を断絶して独自に活動を続けている。

増大した人口と、それらがあげる収穫の大きさに支えら得た余剰人口が、更に新しい集落を作ろうというところに来て至っている。

その一方で、元の集落からの襲撃に対処するために武装した者達を配置しなくてはならなくなってしまった。

この頃になると、住居周辺は木の壁で覆われ、周辺のある程度もそうなっている。

田畑はさすがに全部を守る事は出来ずにいるが、その分堀を深め、柵で周りを固めている。

常時数人が見張りにつき、元の集落からの襲撃に備えていた。

川上も川上で、襲ってくる連中に対処するべく大急ぎで壁を作ってるどころだった。

農作業をしてる時期はなかなか進められないが、秋が過ぎれば大急ぎで柵や堀を作って堀を巡らしていく。

少しずつ少しずつ防備が出来あがり、対処能力は高まっていった。まだ完全ではないが、対策は大急ぎで進められていっている。用水路を造り、田畑を更に拡大しようという時期に余計な事に手を取られてしまっていた。

見かねた川下の集落から手伝いの人手がやってきてくれるからどうにかなってるようなものだ。

純粹に発展・成長に注ぎ込んでいれば、集落は更なる拡大を見る事が出来ていたであろう。

それが遮られてる事に誰もが憤りを感じていた。

そもそも、元の集落が発展していきければ、今頃もっと拡大成長してたかもしれない。

あり得たかもしれない可能性について考える事で、怒りが更に倍増されていく。

かような状況で元の集落への怒りが積み重なり、全ての決着を付ける事を望むようになっていた。

経緯が経緯なのでもう擁護のしようがない。

そもそも元の集落に残ってるのは、どこにも行けない者達ばかりであった。

川下はもとより川上からも元の集落の者達は拒絶されている。

まともな交易など出来るわけがない。

そもそも、交易というか物々交換しようにも、元の集落は何も産出していない。

そんな所と何を交換するのか、という事になる。

田畑を提供するといって来た事もあるが、それだと元の集落に定住しなくてはならなくなる。

そうなら出来上がった作物はどうなるのか？

出来上がった物が強奪されて終わるのではないか？

そういった懸念が常につきまとっていた。

なので、結局元の集落とは何の取引も出来ずにいた。

多少の見返りはあったとしても、それ以上に失う物が大きいなら付き合う意味が無い。

結局、元の集落と接触する意味など何もないという結論になる。

そして、強盗殺人。

これにより溝は決定的になった。

元の集落で、まっとうに田畑を耕してる者達もいるが、それらを酷使してる連中が酷すぎる。

悪い意味での上下関係、圧政を敷く者達と、それに虐げられる者達という形が出来てしまっていた。

また、強盗殺人を犯した連中を捕らえてみれば、圧政・抑圧をしいてる階層の者達だと判明する。

事がここに至り、もう放置しておくわけにはいかないという結論に至っていった。

前回の人生から一百年。

大きな問題を抱えた時代に突入していた。

### 31 歩目 それでもやらねばならない

憂鬱な状況であるが、日々の生活は営まねばならない。

今回、牧場の家に生まれたヒロフミは動物の世話をする事から仕事を始める事となった。

子供であってもやる事はある。

出来る事から始まり、仕事を一つ一つおぼえて日々が過ぎていく。その間に手に入れた経験値で技術を高め、ついでに先々を見据えて必要な部分をのばしていく。

『飼育』は必須として、『動物知識』に『調教』など。

必要と思える技術を、経験値が貯まる度にあげていく。

おかげで十歳になる頃には一通りの事が出来るようになっていた。体の成長をまたねばならない事もあったが、大人と同様の働きが出来るようになった。

その事に親を含めた周りの者達が驚いていく。

が、仕事が出来るとはこしたことはない。

普通とは違うのでの良さを喜びこそすれ、疎んだりしなかった。

この辺り前回と同じなので、妙な既視感をおぼえる。

おそらく今後もこんな調子なのだろう。

転生を繰り返して、記憶や経験を持ち越せるのは大きい。

また、血筋が続く事で持ち越しによる継承のロスが無く、家による資産の継続があるのありがたい。

再び最初から、一からやり直してないのはありがたかった。

ともあれ、ある程度の年齢になるまでやる事は同じだ。

おぼえるものは違っても、経験値を貯めてレベルを上げるのは変わらない。

今回やりたい事、やるべき事のためにある程度の準備をして、始める時期を目指していく。

概ね十四歳や十五歳になれば大人と認められる。

独り立ちにはまだ少々早いが、それでもある程度の自由が認められるようになる。

当然それは責任を果たした後での事になるが、それでも最良が認められるのは大きい。

それを待ってヒロフミはある事を進言した。

「もっと動物を集めてきたい」

牧場にいる家畜は現在イノシシが主流であるが、もっと増やしたかった。

このあたりに何がいるのかは分からないが、出来るだけ探索をして家畜になる動物を探してきたかった。

目星もある程度は付けてある。

身につけた動物知識のおかげで、家畜になりそうな動物がどのあたりにいるかは把握出来ている。

それを元に該当しそうな地域を巡ってみるつもりだった。

「どうかな？」

この時代の親、そして集落の大人に尋ねていく。

返事はさすがにすぐには出てこない。

しかし、すぐなく却下されるといふ事も無い。

いきなりの申し出に戸惑ってるのだ。

とはいえ、新しい動物が増えるならそれに越した事も無い。

それにこの近隣の地形なども分かればそれもありがたい。

いまだに探検はさほど進んでおらず、集落から離れた所がどうなってるのかは未知数だった。

それを知る良い機会にはなりえる。

その情報がすぐに必要になるといふ事は無い。

だが、集落の拡大拡張を考えた場合、周辺の把握は必要不可欠になる。

川下の集落も、その為にかなりの手間をかけている。

川上のほうも将来拡大拡張する時が来たら現地の調査をしていく必要がある。

今のうちにそれが出来るならその方が良い。

結局、やらないよりはやった方が得る物は大きいだろう、という結論に至る。

ヒロフミが進言してから一ヶ月。

承諾がおりた。

とはいっても、承諾がされたとはいえ何かしら援助があるというわけでもない。

必要な道具は自分で用意するのが基本になる。

あくまで許可は、他の日常業務をしなくても良いという事だけになる。

その分は他の者達が請け負うという事になるので、それ以上の援助はない。

何かしら欲しければ、頼んで譲ってもらうか、代わりに何かを提供するか労働するしかない。

対価の支払いは様々な形で求められる。

このあたりは仕方ないので、必要なものを頑張って手に入れるしかない。

幸いなのは、何時頃出発するということを決めてない事である。

なので必要なものを用意するだけの猶予はある。

その間に更に必要な技術も磨き、その時に備えていった。

「で、どうだ？」

準備の一環として訪れた場所で勧誘をしていく。

集落の偉いさんというわけではない。

重要な役割を担ってるのは確かだが、最近は必要性が薄れてきた者達でもある。

この集落が出来上がった時には重宝されたが、それも五世代六世代と経ち、時間にして一百年も経つとやはり必要性が低下してしまう。

けれど彼等はたゆまず仕事に従事し続けてきていた。

かつてのように本来の作業をする機会は減っていたが。

しかし彼等の能力があれば助かる。

「一緒にきてくれるとありがたいんだが」

そう行つてヒロフミは相手の返事を待った。

狩人達の。

31 歩目 それでもやらねばならない(後書き)

こんなの考えてる

「異世界転移した現代人ががんばる話/試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989du/>



### 32 歩目 彼らの力を得なければ

「俺達にか？」

「当然。」

「あんた方がいないと成功する可能性が減る」

「そういつて狩人達との話を続けていく。」

「かなりの遠出になる。」

「目的も決まってるってわけでもない。」

「でも、かなり広範囲を移動する事になる。」

「あんたらがいてくれると助かるんだ」

「ふむ」

「そういつて狩人達は考えこんでいった。」

「やるべき事については既に伝えてある。」

「それがどれだけ大変かも彼等は理解してるだろう。」

「だが彼等を引き込めなければ困難は跳ね上がる。」

「生きて帰ってこれるかもあやしい」

「だから絶対に引き込みたかった。」

「だが、わざわざ外に行く必要があるのか？」

「動物なら今もいるだろう」

「目的である家畜探しという事ならば確かにその通りだった。」

「わざわざ探しにいかなくても今いるだけで十分だ。」

「外に出て探しにいく必要性がほとんどない。」

「それもそうなのだが、ヒロフミはそれで終わらせるつもりはなかった。」

「今いるだけでも確かに十分かもしれない。」

「けど、他にも使える動物がいるかもしれない。」

それを見つけないにいきたくない」  
食用というだけではない。

牛馬による農耕の手助けや移動手段が欲しかった。  
羊なら羊毛も手に入る。

鶏なども手に入るなら手に入れたいところだ。

単に食べるだけでなく、その他の用途で用いる動物が欲しかった。

「その為にも、何がどこにいるのか調べておきたい。

狩人の皆が移動してる範囲だけじゃない。

その先にも向かってみたい。

そこがどうなってるのかを確かめてもみたい」

集落の上層部が考えてる今後の開拓地の下見である。

狩人達があちこち回ってるのでこの近隣はある程度把握は出来ている。

だが、その先の事も今のうちにある程度調べておきたかった。

幸いにも、他の人類との接触はまだまだ先の事となる。

それは造物主にも確認した事である。

(いずれ接触するにしてもまだまだまずと先だろって言うてたし。

その間にどうにかしておきたいな)

他の人類……部族と呼んだ方が良さかもしれないが、それらと接触した時に軍事で負けていたくなかった。

相手の出方にもよるが、いきなり戦争を吹っかけられるかもしれない。  
ない。

そうでなくても、力を誇示して威圧してくる可能性がある。

それらに対抗できるためにも、ある程度文明を成長させておきたかった。

科学技術や知識、社会制度などを。

こちらが強くなっていれば、相手も迂闊に手を出さないだろう。

もしかしたら平和的に接触してくるかもしれないが、そうでない時  
も考えておかねばならない。

その為にも、何がどうなってるのかを調べる必要がある。

「まあ、言いたい事は分かった」

狩人の方もヒロフミの言い分は理解してくれたようだった。

「だが、お前に外に出る力があるのか？」

「外で生きていけるのかつて事か？」

「そうだ。」

一度出れば数日は帰ってこれない。

その間の生活は村の中とは比べものにならないほど厳しいぞ。

それが出来るだけの知識や技術がなければどうにもならん。

体力の方は言うに及ばずだ」

「確かに」

そこはヒロフミにとっても懸念すべき部分だった。

最初にこの世界にやってきた時は、部族ごと放浪していた。

言ってみれば全員が狩人であり、野外生活の技術や知識を身につけていた。

しかし今は違う。

その頃に比べれば格段に文明化されている。

生活水準は向上し、生きていく為の負担がかなり低下している。

それに伴い、必要な技術や体力も変わってきている。

狩人達に比べればそれらにおいて大きく劣るのは確かだった。

技術レベルにおいてもそれは言える。

ヒロフミもある程度レベルは上げておいたが、狩人達にかなうとは思っていない。

だからこそ、彼等の能力を求めているのだ。

「そのあたりはあんた達に劣ってるよ。」

だからあんたらに協力を求めている。

俺だけでどうにかなるなら、わざわざ他の人間に頼んだりしない」

「……それもそうか」

そこは狩人も理解してくれたようだった。

多分に自負もある。

自分達が培って来た事に。

かつてに比べて著しく低下してしまった必要性への誇りもあった。  
ヒロフミの言葉はそこを刺激した。

「ならばどうする。」

お前が足手まといになるなら、色々と考えねばならないが

「申し訳ないが、俺を連れていってもらおう事になると思う。」

その為に頼んでるようなもんでもあるしな

「なるほど」

その言葉に狩人達は笑うしかなかった。

「正直なこった」

「嘘を吐いてもしょうがないからね」

「分かった。」

協力するのはかまわん。

だが、俺らも足手まといの面倒はごめんだ。

それなりの事は出来るようになってもらう。

それが俺達が付き合う条件だ

「分かった」

拒否するつもりはなかった。

相手の条件を受け入れ、ヒロフミは狩人の協力をとりつけた。

### 32歩目 彼らの力を得なければ(後書き)

こんなの考えてる

「異世界転移した現代人ががんばる話/試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989du/>

### 33 歩目 情報を集めるのが先

訓練は熾烈を極め………はしなかった。

将来を見越してある程度技術を身につけていた事もあり、ヒロフミが苦勞する所はそれほど多くはなかった。

もちろん体力面において劣るし、技術面でも必要な段階にまで到達してないものもあった。

しかし完全な素人というわけではなく、それなりに出来るのも確かである。

「こりゃあ驚いた」

狩人達は少なからずそう感じていた。

完全ではないが、最低限の事は出来る。

それは明らかだった。

「足手まといにはならないようだな」

素直に評価をしていく。

狩人としては物足りないが、野外活動においては必要なレベルに到達している。

これなら十分だと判断された。

出発をあらためて認められた事で準備が加速していく。

星肉などの保存食に、荷物を詰め込む麻袋に各種道具。

屋外での活動に必要な道具をかなり集めた。

狩人達が声をかけたおかげもあってか、一人でやっていた時よりも集まるのが早い。

おかげで出発予定が大幅に縮まった。

もっと時間がかかる、一年くらいは無理だろうと思っていたのでありがたい。

その分、狩人からの指導も熱が入る。

出発してからでは何も教える事が出来なくなるから、足りない分を今のうちにと考えてるらしい。

生きて帰ってくる為にヒロフミも必死になってくいついていく。

正確には経験値を稼ぐ為である。

何もしないでいるより、何かしら訓練や経験を積んだ方が貯まりやすい。

それを手に入れて更なる技術向上を目指していきたかった。

そんなこんなで出発となる。

過去の探索事例からある程度目標を決めて進んで行く事となる。

欲しいのは家畜になる動物なので、それらしき目撃例のある場所を目指していく。

周辺探索の為に狩人達が残した記述が役に立った。

正確な距離や方角は分からないが、それでも目安にはなる。

その中で、まずは牛や馬に見えるものを探していく。

それらを掴まえて持ち帰りたかった。

その為にもまずは調査である。

当分の間は狩人達の行動範囲の中になる。

何日か屋外で活動する彼等の移動範囲は広い。

その中にある動物の目撃情報から目的地はある程度絞ってはいる。

とはいえ正確な地図もないので位置を特定するのは困難だ。

狩人達も記憶を頼りに行動しているので正確な位置を明言する事は出来ないようだった。

ただ、おぼえてはいるので遭遇地点へ案内する事は出来るという。それを頼りにとにかく進むしかない。

幸いにも道に迷う事はほとんどない。

おかげでヒロフミも記録を付けるのが楽だった。

この時の為に身につけた『方向感知』の技術で進む方向も把握出来ている。

文字通りに方角を判別するものではなく、太陽や星の位置、切り株の年輪といった様々な情報からどの方向に向かっているのかを知る技術である。

これに測量技術を加える事で、おおまかな距離も分かる。

進んで行く方向と距離を図のように記し、辿った道の周囲の状況を書き込んでいく。

平原、森、丘といった単純なものだが、それを書き込んでいく事で大まかな地形が紙に写し取られていく。

今までは記録という言葉だけだったものが、図になる事で見やすくなっていった。

それと同時に狩人達が目撃したという動物の出現地点に近づいていく。

集落を出発して四日の事である。

運が良いことに、早速目撃された動物を見つける事が出来た。

「あれか」

遠目に見る四つ足動物に少し興奮した。

イノシシや鹿は見た事あるが、これは始めてだった。

しかし見た事のあるものだった。

直接接した事は無いが、かつてテレビなどで何度か目にした。動物知識に頼るまでもない程である。

(馬だ……)

思ったよりも小さなそれは、間違いなく馬だった。

予想よりも早く遭遇する事が出来てありがたかった。



今後の事を考えれば貴重である。

「どうする、狩るか？」

狩人が聞いてくる。

「彼等からすれば当然の考えだろう。」

しかしヒロフミは首を横に振る。

「いや、今回は情報を集めるだけだから。」

ここは無視して一度戻ろう」

残りの食料の事を考えると無理は出来なかった。

それに、狩人数人だけでは捕獲する事も難しい。

もっと大勢で追い込んでいかないと掴まえる事は出来ないだろう。

それは他の動物にも言える。

とにかく今は下見だけで十分である。

どこに何がいるのかが分かれば。

### 33歩目 情報を集めるのが先（後書き）

続きはまた明日で。

しばらく一日一回投稿になるかと。

それと、長編を書く余裕がないで、ネタをとりあえず短編で出してる。

「異世界転移した現代人ががんばる話／試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989du/>

### 34 歩目 折角だから人材を引き抜いてくる

その後も何度か下見を繰り返して、動物の種類と位置を特定していく。

あわせて周辺地域の大雑把な略地図も完成させていく。

今まで文字による記録や個人の記憶でしかなかったものが、目で見える形になっていく。

測量をしていったわけではないから大雑把なものになるが、無いよりははるかに良い。

今後はより正確な測量が出来れば良いが、当面はこれがあれば十分である。

そして、今回の探索に成果を元に、次の行動に移っていく。

見つけてそれで終わりではなく、そこから始まっていく。

見つけた動物たちを捕獲し、連れてこなければならぬ。

その為の道具と人数が必要だった。

やり方としては、動物を追い込み、その先で捕獲、という事になる。

追いかける方もそうだが、捕獲する方も人数が必要になる。

その為にも可能な限り大勢が必要だった。

また、捕獲するための網も欲しい。

出来るだけ丈夫なものが。

すぐに全てを用意する事は出来ないの、やはり時間がかかる。

探索に出る事を許可した村の者達も、さすがにそこまで手間がかかるかと及び腰になる。

やるだけの成果があるのかと疑問が出てくる。

そこはヒロフミも説得しにくい部分だった。

動物を用いて田畑を開墾すると言ってもすぐには信じられないだろう。

かといって食用にするにしても、イノシシを飼育してるのですので必要という事もない。

どちらかというと、周辺地形の把握が主な目的だった村の者達は、これで十分だと判断していた。

何も急ぐ必要は無いと。

実際その通りなので、これ以上ねじ込む事は出来ない。

家畜の増加については無理だろうかと思ってしまう。

だが、これできじけていては何も出来ない。

それから数日。

元の集落へと向かっていったヒロフミは、その中に侵入していく。襲撃を何度も受けてる川上や川下と違い、そういった脅威に全くさらされていないだけに警備は薄い。

野生動物が田畑を荒らしにくるのを見張る程度である。

その中にある畑仕事に従事してる者達の家屋に入り、中の者と対面していく。

最初は何事かと思つた彼等も、ヒロフミが川上から来たと言つと驚きながらも話を聞いてくれる。

切り出す用件は、ここからの脱出。

家族全員で逃げ出さないかという事だった。

この集落にいても先は無いらしい、時間が経つても解決する見込みはない。

それよりも、ここから逃げ出して川上に来ないかと誘つていった。突然の事なので誰もが驚いたが、すぐに誘いにのつてきた。

同じように他の家にも侵入して説得をし、数家族を連れて集落を離れる。

途中、見つかりそうになつて遭遇したものを始末したりもした。

持ってきた弓と石斧はしっかりと仕事をしてくれる。  
そのおかげもあり、ヒロフミは幾人かの家族を脱出させる事が出来た。

当然そんな事になったので周りは大騒ぎである。

余計なことを、騒動をもちこみおって、という意見が多数となった。

まあ、そうなるだろうなと思ってはいたが、想像以上に風当たりは強い。

どうせそのうちぶつかり合うんだからいいじゃないかと思うのだが、周りの者達はそう思えないようだった。

(肝の小さいこった)

そう思うしかない。

むしろ、相手の戦力を引き抜いて弱体化させたのだからそれで良いではないかと思ってしまう。

もちろん相手の敵愾心をいたく煽ったであろう。

しかしそんなの今更である。

もう衝突というか、何度も襲撃を受けてるのだから、いい加減腹をくくってもらいたかった。

(まだやられっぱなしの癖が抜けないのかよ)

もう何世代も前、川上に集落を作る事になった事態を思い出す。

元の集落ではやっていけないと逃げ出してきたはずである。

なのに対抗する気は無いように見受けられる。

数の上ではほぼ同等、むしろ上回ってすらいる。

戦力で見ればかなり有利になっている。

川下の集落とあわせれば数倍以上の人口比になっている。

それらをもつてすれば、一気に叩きつぶす事も出来るのだ。

にも関わらず攻撃を受けるのを怖がってるのが信じられない。

相手を挟み込んでるのだし、川上も川下も負ける要素が無い。

(それなのに……)

及び腰である事に泣けてくる。

いったい何をしてるのだと。

今回で元の集落の問題を解決しようと思っていたが、それも怪しくなってきた。

そんな集落の考えや方針を嘆きつつも、連れてきた者達の身の振り方を考えていく。

出来れば新たな田畑を切り開いてもらいたいが、そんな余裕もない。

まずは食べる物を確保せねばならない。

その為にも、狩人達に頑張ってもらわねばなくなる。

かつて川上に逃げた者達がそうであったように、当面の食料確保で狩人達の成果に頼らざるえなかった。

今回、再びそんな事態になろうとしている。

ただ、それに加えてもう一つやりたい事も出来ていた。

必要な道具と材料を確保してそれらを始めしていく。

そもそも、このために元の集落から人を無理矢理引っ張ってきたのだから。

網や縄を用意し、手順を伝えていく。

狩人にも参加してもらい、方法を煮詰めていく。

野生動物の捕獲のため、作戦が練り込まれていく。

やり方は単純だが、手順通りにやれるかどうかは未知数である。

一応何度か練習するが、どうしても動きが上手くいかない。

今までやった事がないから仕方が無いが、心配と不安が増えていく。

しかし、これをやらねば先はない。

確実に捕獲し、集落に連れてこなければならぬ。  
でなければ、逃げてきた者達の居場所がなくなる。  
ヒロフミも例外ではない。

これまでやってきた事を無駄にしない為にも、ここで成果をあげねばならなかった。

練習に時間をかけてる程の余裕もないの。

食料を分けてはもらっているが、それも長くは続かない。

本来なら田畑を耕して自分達の耕作地を作らねばならないのだ。

ヒロフミと一緒に動物の捕獲に向かっている時間はそれほど多くはない。

出来ればもつと練習をしておきたかったが、それもままならない。色々と不足した状態で、ヒロフミは動物の捕獲に向かわねばならなかった。

### 34 歩目 折角だから人材を引き抜いてくる（後書き）

続きはまた明日で。

しばらく一日一回投稿になるかと。

それと、長編を書く余裕がないで、ネタをとりあえず短編で出してる。

「異世界転移した現代人ががんばる話／試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989du/>



### 35 歩目 苦勞したが、その甲斐はあった

「それじゃ、頼む」

「分かった。」

そつちに追い込むから、上手くやってくれ」

狩人達と分かれ、ヒロフミ達は罾をはっていく。

罾を用意し、上手く捕獲できるように配置につく。

狩人がこちらに追い込んでくるまでそのまま待機となる。

長い緊張を強いられる。

それに押しつぶされそうになった。

始まった捕獲はやはり上手くはいかなかった。

狩人達が弓を使って追い込んでいくかが、動物の方もそう思う通りには動いてくれない。

それを上手く捕らえ、狙った方向に移動していくように包囲網を作っていく。

動物の方もそれを見て、空いてる方向へと逃げようとする。

そちらがヒロフミ達が潜んでる方向であるの言うまでもない。

どうにかこうにか誘導し、何とか罾を持った者達の所へと到着する。

なのだが、そこからがまた大変だった。

上手く罾を被せようにも、なかなかそうはいかない。

捕獲しようにも動物の方も必死の抵抗をする。

投げかけた罾が空振りに終わる事も二度三度ではない。

そんなこんな果てに、追い詰めた動物が逃げていく。

田畑に寄ってくるのを掴まえるのは違った難しさがあった。

「しくじったな」

「ああ、そうだな」

最初の一回目、予想通りに失敗した事に無念の声をあげる。

ただ、いきなり上手くいくとは思ってもしなかったもので、これはこれで良かった。

何がまずいのかも分かってくる。

「次は、あの部分を変えてみよう」

「分かった。」

なるべくこつちに誘導出来るようにする」

そんな会話をして再び挑戦する事になる。

失敗にへこたれてるなんて贅沢をしていられない。

成功するまで何度でも繰り返す。

それしかないのだから。

その後も何度か失敗し、一日が終わる。

動物たちの居場所を探し、突き止め、包囲して追い詰めていく。

その繰り返しの数だけ失敗をこなし、でも少しずつ上手く出来るようになっていく。

次こそは、次こそは、という気概が次第にわいてくる。

失敗を繰り返すのは決して褒められたものではないだろうが、技術や経験の蓄積と思えばまだ許容できる。

それに、繰り返された失敗は、良い意味での諦めと妥協をもたらす。

『まあ、次をがんばらばいいや』

その思いが余計な気負いを無くし、自然体に心身を近づけていく。思った通りに体が動き、全体の動きを掴めるようになる。

気づかない撃ちに成功に近づいていく。

そして、成果がようやくあらわれる。

作業を開始してから二週間。  
ようやく一頭の馬を確保した。

掴まえたはいいが、手なずけるのは簡単ではない。  
とりあえず手綱をつけて動きを制御しようとする。

当然抵抗するから簡単にはいかない。

人間よりはるかに強い力で振り切ろうとする。

それを強引に引つ張って村へと戻っていく。

仲間らしい馬がその様子を遠巻きに見ている。

助けようとしているのかも知れないが、近づけずに困ってるようだ。  
った。

もちろん気にしてられない。

ようやく確保した大事な馬である。

確実に集落に連れて帰らねばならない。

捕獲に参加した者達は、それで作業が終わったわけでない事をあらためて知る。

連れて帰るのもやはり一苦労なのだから。

連れて帰ったらそれはそれで問題が出てきた。

手に入った動物を見て驚く集落の者達は、すぐにもう一つの問題に突き当たる。

新たに手に入れた馬という動物、いったいどこに放り込めば良いのか？

イノシシの飼育場所はあるが、新たな動物の場所なんて存在しない。

当然ながら、これから作るしかない。

ここでもやはりヒロフミは、新たに連れてきた者達を動員して馬小屋作りに勤しまねばならなかった。

木を切り倒してきて小屋を造り、柵を作つて馬を逃がさないようにしていく。

もちろん馬も大人しくしてるわけではないが、それでも餌と水を与え続ける事で多少は大人しくなった。

気概を加えられないと思つて多少は安心してゐるのかもしれない。もちろんそうなのだが、それで馬を休ませるといふわけでもない。

これを見越して身につけた技術の一つ、『動物調教』を用いて馬をしつけていく。

この先馬には役だつてもらわねばならないのだから。

そんな馬についてきた他の馬を、狩人達や逃亡してきた者達が捕獲していく。

一度成功した事で完全にコツを掴んだのか、以前より短い時間で捕獲する事に成功していった。

馬は合計五頭になり、その分馬小屋も必要になる。

休む間もなく作業をしなければならなかった。

しかし、そうやって確保した馬が今後役に立つようになっていく。

ヒロフミの調教が進み、馬も大分簡単に扱えるようになった。

(そろそろかな)

馬を用いての活動を実践しようとしていく。

その為に木材と縄を用いてあらたな農具を作っていく。

前世から引き継いでいる工作技術がありがたかった。

それほど精巧なものは作れないが、十分に使える道具に仕上げていく。

誰もが始めてみるそれを不思議そうに見つめていた。

動物に引かせる農具である、鋤を。

35 歩目 苦労したが、その甲斐はあった（後書き）

続きはまた明日で。

しばらく一日一回投稿になるかと。

それと、長編を書く余裕がないで、ネタをとりあえず短編で出してる。

「異世界転移した現代人ががんばる話／試作品」

<http://ncode.syosetu.com/n2989du/>

### 36 歩目 働き者はありがたいが、その逆となると

「こりや凄いな」

馬に装着した鋤によって、土地がどんどん開墾されていく。鋤の威力は大きく、人間よりも簡単に土をおこしていった。

それを見て集落の者達は、動物捕獲に抱いていた疑問を消滅させた。

食用以外で動物を飼う事の意義を理解する。

百聞は一見にしかずと言うように、果てしなく繰り返される説明よりも、実際に目で見て体験する事に勝る説得力は無かった。

集落の者達は馬の有用性をいやというほど理解した。

それまでヒロフミのやつてる事への懸念や疑念などを忘れて。

出来ればこちらに貸してくれないかと言ってきた時、さすがに切れた。

「ふざけんな！」

と一喝したのもやむをえまい。

それに、集落の者達より先に貸さねばならない者達がいる。

「まずは元の集落から来た連中だ。」

こいつらの田畑を作らなくちゃならねえ」

至極ごもつともな言い分に、集落の者達も否とは言えなかった。

脱出してきた者達の食い扶持をしつかりと確保しなくてはならない。

そのためにも田畑が必要になる。

農耕馬による耕作能力が絶対に必要だった。

それを得た脱出者達の耕作は目を見張る早さで進んでいった。

当然馬を求める者達が加速度的に増大する。

成果を目で見た事が大きい。

おかげで狩人達に新たな仕事が回ってくる。

狩猟による食料調達の意味が極度に低下していた彼等は、新たに野生馬の確保という仕事を期待されるようになった。

もとより狩人の仕事内容は大きく変わっている。

狩猟から、田畑に近づく害獣退治になって久しい。

それだけ田畑の重要性が高くなったし、動物の肉が欲しければ牧畜でイノシシを飼っている。

狩猟の成果が必要になる事がほとんどなかった。

例外的に、川上に脱出してきた者達の当座の食料確保の為に、大急ぎで狩猟をしたくらいである。

それはそれで重要な役目だったが、常に必要とされてるわけではない。

動物の確保は狩人達にとっても、久しぶりの活躍の場になっていた。

馬が少しずつ集まり、調教も進んでいく。

馬小屋も増加し、放牧のために柵も作られていく。

十分なものではないが、少しずつ必要なものは作られていった。

それを見てヒロフミは、馬に乗る事を考えていく。

麻で作った縄と布で馬具を作り、それを用以て背中に乗る為に。

当然最初から上手くいくわけもない。

何度も失敗を繰り返す。

そうしながらだんだんと騎乗出来るようになっていく。

最初は柵の内側で乗り回し、コツを掴んでいく。

徐々にそれなりに乗れるようになり、普通に移動するには困らない程度になっていく。

障害物を飛び越えたり、といった事はさすがに無理だが。

それでもある程度乗りこなせるようになった。

行動範囲を広げる事が出来る。

同様の調教を他の馬にも行っていく。

一頭だけでなく何頭か騎乗可能にして機動力を確保したかった。行動範囲が広がり、今まで行けなかった所まで探検出来るようになる。

特に狩人達に乗ってもらい、行動範囲を広げてほしかった。

重要な戦力でもある彼等が迅速に行動出来るようになる利点ははかりしれない。

この先、元の集落との衝突が免れないだろうから、それまでに戦力の優位性を得ておきたかった。

騎乗の技術も身につけねばならないので手間も苦労もかなりのものになるが。

だが、ヒロフミが馬に乗ってるのを見て多くの者が興味をもっている。

狩人も例外ではなく、やってみないかと声をかけたら一も二もなく賛同してきた。

意欲があるだけでもありがたかった。

馬を手に入れてからの一年二年はそんな調子で過ぎていった。

その間に子馬も生まれ、牧場は拡大していく。

更に多くの馬も連れてきて、牧場の規模は結構なものになっていった。

田畑の方も順調に拡がり、脱出してきた者達にも粗方いきわたるようになる。

馬に乗っての探索も行われ、今まで行けなかった所まで出向けるようになる。

同じ時間探索に用いても、移動距離が違う。



無理をして動物を確保に出て良かったと言える。

良い事ばかりでもない。

この一年二年で元の集落からやってくる略奪者も数を増した。

農作業をした者達が一気に脱出したせいだろう。

生産に従事する者達が減り、収穫量は以前より更に減っているようだった。

それで田畑を耕すようになれば良いのだが、そうはならなかった。もとより他人を騙してかすめとる事を平気で行うような人間である。

自分が働こうという気は無く、他人のものを強奪する事に血道をあげていた。

そんな連中しか残らないものだから、自活するための手段がない。略奪によつてしか糧を得る手段がなくなっていた。

もちろん川上も川下もそんな彼等を撃退していくのだが、どうしても被害が出る。

盗まれ奪われた者達は、もうこれ以上放置するわけにはいかない。と覚悟を決めるようになっていった。

それを見計らい、ヒロフミは様々な所に働きかけていく。

### 37 歩目　ここまで来たらむしろ手を出さないのも一つの道だが

機が熟していく。

人口比は大きく拡がり、動員できる戦力は増えた。

弓と馬による戦闘力の差も大きい。

一番厄介なやる気・動機も十分に高まっている。

いずれ来たるだろうという瞬間がとうとうやってきた。

これでようやく元の集落に攻め込む事が出来る。

周りの人間から少しずつ説き伏せ、集落全体を戦闘へと向かわせていく。

もちろんそのかす訳ではなく、ヒロフミが先頭に立って戦う事を前提にして。

他人をけしかけるわけにはいかない。

賛同者がいないとどうしようもないが、全てを他人に押しつけたりはしない。

言い出した自分もしっかりと参加する。

それくらいの誠意は示していかねばならなかった。

でなければ他の者達がついてこない。

嫌でもなんでも率先してやらねばならなかった。

自分でやり始めた事ならば。

目的を達成したいならば。

嫌とは言ってられない。

幸いにも、というのもおかしいが、各集落のやる気は大きくなっていった。

特に直接の被害にあう集落は、これ以上の損害を出さないために早急な対応を求めている。

しかし、そこにも温度差は発生する。

川下の方に拡がる集落も危機感を抱いてるが、元の集落に接する所ほどではない。

なるべく急いだ方が良いとは思っていても、すぐに対応しようとは思っていない。

衝突するとなればどうしても損害が出る。

それを考えると及び腰になるのも無理はなかった。

このあたり、毎度のように襲撃をつけている集落と差が出てしま

う。

こればかりはやむをえない。

なので、やる気のある者だけでも対策に参加してくれば良いと  
考えていく。

もとより全員の参加までは求めてない。

少しでも多くの人間が参加してくればそれで良かった。

川下の集落全体で五百人を超える。

その一割だけでも五十人になる。

それだけいれば、必要にして十分な人数になる。

そんなこんなでどうにか人数を集め、元の集落に乗り込む計画を  
たてていく。

相手はかなり切羽詰まってるようで、略奪に来る間隔が狭まっ  
ている。

食べられる物がそれだけ減ってるのだろう。

襲ってきた者を迎え打って始末してるので、持って帰れる物も減  
っている。

人数が減ればその分持ち帰る量も減る。

足りない所にわずかな収穫とあれば、どうしても何度も出向くし  
かなくなる。

そして、出迎えの弓矢や石斧で人数を減らし、更に突入りは減る。

悪循環もきわまりである。

毎回一人二人と倒されていくので、集落の人数は更に減ってるはず。

詳細な人数は分からないが、ヒロフミが手引きして脱出させた時よりも増えているという事は無いだろう。

その後子供も生まれてるかもしれないが、想像する食糧事情では生まれた後の育成が可能とも思えない。

遠目に状況を確認かめに行った時にも、活気が全く感じられなかった。

田畑もほとんど手が入ってない。

というより荒れるにまかせているようだった。

少しくらいは作物を作ってると思っていたのだが、それらしき所もない。

まさか全くやってないとは思わなかったが、それにしても作物らしきものが見あたらない。

しなくても良い心配をしてしまうくらいだった。

こんなんで普段どうやって生活してるのかと思ってしまう。

それでも時折盗みに来るので、まだ何人かは生き残ってるはずだった。

どうやって生きてるのかは分からないが。

しかし、かなり追い込まれてるはずである。

倒した強盗の姿を見てそう思う。

よくこれで生きてるなと思う程やせている。

骨と皮といって良い状態だった。

最初の人生の頃、畑作に入る前の頃よりも酷い。

その頃も食料の確保が不安定で、体はかなり細かった。

ここ最近食料が安定したので、そんな状態は脱していたが。

まさかその頃に戻ったような姿を再び見る事になるとは思わな

かった。

しかし、それはある意味攻め込む好機を伝えてくれている。もし元の集落の者達が全員こんな状態ならば、大きな抵抗もなく攻め込む事が出来る。

損害を出すことなく掃討する事が出来るなら、それにこした事は無い。

もう少しすれば更に有利になるだろう。

酷い話であるが、相手の食料事情が更に悪化し、まともに動ける者が極限にまで減った所を狙う事も考えていく。

それまで襲撃に悩む事になるだろうが、いずれそれも止む。

動ける者がいなくなれば、確実に襲撃は終わる。

それが何時になるか分からないが、それまで待つのも方法の一つであった。

しかし、ここで思惑が外れる。

集落のほとんどの者達が攻め込む事に意見が変わっていた。

今までと真逆に。

元々攻め込む事に賛同していた者達が終結していたせいもあるだろう。

しかし、それ以上に今まで我慢してきたものが爆発した感がある。度重なる襲撃によって、怒りが爆発してもいた。

これ以上待つつもりは全く無いといった有様である。

今までの慎重さはどこに消えたのだと、ヒロフミは啞然としてしまふ。

意見がヒロフミと他の者達で逆転してしまっていた。

状況を鑑みてヒロフミが慎重になってるのに、他の者達は怒りが限界を突破してしまっていた。

これではどうする事も出来ない。

やる気が無いよりマシと思うしかなかった。

(けど……)

それでもやりきれない気持ちになる。

(結局、俺の意見とは真逆にいく事に変わりはないか)

かつては攻め込む事を否定され、今は慎重になる事を否定される。そうそう思い通りになる事などないとは分かってるつもりだったが、これはあんまりだと思った。

自分がやってきたのはいったい何だったのだろうと考えてしまう。

(まあ、やるしかないか)

最善とは言えないが、悪い事ではない。

やる気があるならそれを上手く用いていこうと思った。

何もしないで終わるよりは良いのだからと。

### 38 歩目 事態は思った以上に酷かった

「それじゃ、行こう」

集った者達を見渡し、先頭に立って歩いていく。

弓を手にする者、石斧を持つ者、馬に乗る者。

それぞれが与えられた役目に則って動き出す。

総勢七十人になる軍勢は、川上の集落に集まってから元の集落へと向かっていった。

全員緊張している。

これまで悪辣な所行を平然とこなしていた連中の所へと向かうのだ。

緊張して当然だろう。

何せ、物を奪うだけでなく、それを阻止しようとした者達に平然と襲いかかってくるのだ。

そんな連中の所へと攻め込むのだから、相当な損害を覚悟せねばならない。

奪いに来る時もかなりの獰猛さを破棄した連中である。

自分の居所を守る為なら、それこそ死にものぐるいになるだろう。かなり衰弱してるとは思うが、窮鼠猫を噛むである。

生存本能が爆発した場合にどんな行動に出るのかさっぱり分からない。

どれほど慎重になってもしすぎるという事はないように思えた。

しかし、その心配は杞憂に終わった。

拍子抜けするほど呆気なく元の集落に一行はたどり着く。

ここまで警戒らしい経過も見あたらぬ。

集落に入っても、誰かが飛び出してくる事も無い。

「誰も出てこないな」

「どうしたんだ？」

疑問の声があちこちからあがる。

それらにヒロフミは、

「油断するな」

と注意する。

「もしかしたら、物陰から奇襲をかけてくるかもしれない。

死角から狙われないように注意しながら進むんだ」

確実に安全と分かるまで油断は出来ない。

しっかりと確実に進んでいく。

住居の陰に何か潜んでないか、丈の高い草の中に誰かが隠れてないか。

家の戸口から飛び出してくるかもしれない。

とにかく見えない部分への警戒を怠れなかった。

家の中にも誰かがいるかもしれないと注意もしていく。

潜むならそこが一番手間がかからない。

最も警戒される場所でもあるが、外から中の様子が分からないというの十分脅威だ。

ただ、竪穴式住居なので、やろうと思えば中を覗くのは難しくもない。

壁でなく上から下まで茅葺きになっている。

それを外せば中を確認する事は簡単だった。

入り口から中に入る必要もない。

どうせ攻め込んできたのだからと遠慮無く茅を外していく。

もちろん全部を外す必要は無い。

中を確かめる事が出来ればそれで良かった。

そうして一軒ずつ中を確かめていく。

「……いない」



「こつちもだ」

「おい、ここもないぞ」

そんな声があちこちから出てくる。

もとより人口低下により空き家もあるだろう。

しかし、人の気配がこつちも少ないのも不可解だった。

他の集落を襲撃し、迎撃から逃れて帰還した者達が潜んでるはずだ。

それ以外にも、集落で待機してた者達だっているはずである。

それが何人かは分からないが、確実に誰かはいるはずだった。

一軒一軒調べていきながら、それらとの遭遇に備えていく。

そうしていくうちに、一軒の家で反応があらわれた。

「うわっ！」

驚きの声があがる。

何事かとそちらに目を向けた者達は、家の中から出て来る不格好な人影を見た。

かなり素早く動いてるそれは、しかし人間のものとは思えない動きをしていた。

四つん這い、というか、腕を地面につけて走っている。

ゴリラが地上を歩くときに似ていた。

それよりも更に歪であるが。

「なんだ……」

目にしたヒロフミは驚くというよりおぞましさを感じた。

人間は二足歩行で移動するものである。

状態や状況により他の体勢で動く事もあるが、一番楽に動けるのは二本の足で立ってる状態のはずだ。

それが、両手をついて移動してるのである。

見慣れないのもあるだろうが、不自然な体勢になっている。

それが歪さを感じさせた。

本来のあり方と違った形をしていたり、無理な事をしてるとどこかに違和感が出る。

ヒロフミ達から逃げてる者には、明らかにそんな違和感があった。どうしようと思ったが、無視するわけにもいかない。

「止まれ！」

とつさにそんな言葉が出る。

もちろん止まらない。

相手はさっさと逃げていこうとする。

「止まらないと撃つぞ！」

なおも制止を命じる。

止まらせてからどうするのかも考えず。

しかし、相手がそれでも止まらないのを見て、ヒロフミは弓を構え、矢を放った。

狙い誤たず相手に当たる。

鏃がついてる訳でもない、先を極力尖らせただけの棒なので貫通力はそれほどでもない。

それでも矢は相手にあたり、突き刺さる。

体から矢をはやした格好の相手は、それでも何とか逃げだそうと走り続ける。

そこにヒロフミ以外の者が放った矢が突き刺さる。

更に三本目が、そして四本目が飛んでいく。

何本も射貫かれた者は、それでも何歩か進んでいったが、そこで力尽きて倒れた。

誰もがそれで少し安心した。

脅威が確実に一人取り除かれた事で。

しかし、すぐに別の驚愕が一同を襲った。

「おい、これ……」

何者かが飛び出して来た家の中を見た者が蒼白になっていく。

いったい何が、と思つて同じように家の中を見た者達は、すぐに顔を背けていった。

茅を外して中を見れるようにしたり、戸口から中を覗いたりやり方はそれぞれだが、結果は同じだ。

そこにあつた者を見て、誰もが吐き気を催した。

ヒロフミも例外ではない。

「なんだ、これ……」

そう言つて家の中にあつたものを見ていく。

そこには横たわつた人が並んでいた。

人だつた、と言う方が正解であるが。

どれもが、息をしてないのが見て分かる。

生きていれば確実にある呼吸の動きがない。

全く何も動かずに停止している体を見て、それらが全て亡くなつてるのが分かつた。

だが、それだけが異常なのではない。

不思議な事に、横たわつてるものはどれもが欠損していた。

部位は様々だが、確実に体の一部が失われている。

いったいどうして、と思つたがすぐにとある可能性が頭に浮かんだ。

乏しい食料と、残り少ない人間。

それに対して、数は多くなつていく亡くなった者達。

予想するにしても最悪の事態である。

「……嘘だろ」

信じたくなかつた。

だが、その可能性が最もありえると思えた。

この状況で食いつなぐ為の、おそらく唯一の手段について考えると、それしかあり得ないと思えた。

口に出すのもおぞましい行為を。

そこまで追い詰められたのかと思ひ、そんなところにまで落ちぶれたのかと呆れる。

全ては彼等自身が招いた結果なので同情も哀れみもしない。

ただ、行き着いたはてに行つた食糧確保の手段に吐き気とは別のおぞましさを感じた。

同時に、そんな所まで墮落せざるえなかつた連中への怒りがこみ上げる。

(もう駄目だな……)

生き残りが何人いるか分からないが、例えいたとしてもそいつらとは相容れないと悟る。

「みんな」

どうにか立ち直り、周りにいる者達に指示を出す。

「もうこいつらと一緒にやっっていく事は出来ない。

絶対に無理だ。

皆はまだ同情するかもしれないけど、もうそんなの捨ててくれ。

俺はこいつらとは絶対に一緒にいたくない」

それを聞いて、大半の者は頷いた。

頷かない者も否定はしなかった。

「だから、誰か見つけたら始末してくれ。

絶対に容赦をするな」

周りからぱつりぱつりと返事がくる。

どれもが承諾を伝える声だった。

拒否する者は誰もいない。

それを見てヒロフミは更に指示を出す。

「この家……」

倒れた者達が横たわっていた家を指し、やるべき事を口にする。

「燃やしてくれ。

徹底的に。

他の家もだ。

中に何がしようといまいと関係ない。

ここにあったもの全部を燃やすんだ」

拒否する者は誰もいない。

ただ、黙々と作業が始まっていった。

39 歩目 呆気なく終わったが何があったのかを考えると憂鬱になる

その後、特に誰かが飛び出してくるといふ事はなかった。

おこした火に、屋根から抜き取った茅をかざして火を付ける。

それをあらためて竪穴式住居にくべて燃やしていく。

木材と茅による家は、呆気なく簡単に燃えていった。

次々に火が上がり、あたりに熱気がひろがっていく。

中に誰がいるかを確かめる事なく、ただひたすらに住居を燃やしていく。

例え誰かが残っていたとしても、それで躊躇うような者は今はいない。

先ほど住居の中にあつたものを見て、残ったかすかな遠慮や躊躇いは無くなった。

その途中で、住居の中から誰かが出て来る事もあつた。

炎の熱さに耐えられなかったのだろう。

そんな者達には遠慮無く矢が放たれていった。

地面に倒れ伏した者達は、石斧で止めをさされ、燃え上がる炎の中に放り込まれる。

全部で四回そんな事が行われ、それで集落の掃討は完了した。

ヒロフミの予想は若干外れていた。

もう暫く待てば襲撃者達はほとんど動けなくなるだろうと思っていたが、そうではない。

もう既にまともに動ける者はいなかったのだ。

生き残っていたのは全部で五人ほどだったようで、それ以外はもう亡くなっていた。

もしかしたら生き残ってる者もいたかもしれないが、それらも動

けなくなるほどに衰弱していただろう。

もう少し放置していれば、それがほとんどではなく全員になっていたはずだ。

かろうじて動ける者達もやがては衰弱し、そのまま自然に潰えていただろう。

それ程までに逼迫していたのだ。

もはやそれは壊滅と言ってよい状態だった。

人がいるという意味では、住居や拠点とは言えたかもしれない。

しかし、人が助け合って生きる場所を集落というなら、その機能は消滅していた。

今に始まった事ではなく、かつて他人の田畑を不当に強奪した時に。

それを撃肘する事なく認められた時に。

助け合いというのはその時に既に消滅している。

その代わりに登場したのは、一方的な搾取だった。

そんな状態が長く続くわけもない。

数年前まで、田畑を耕す者達が残っていた時までは何とか保っていたが。

それが失われた時に全てが終わったのだらう。

残ったのは、自ら何も生み出す事のない者達であった。

他人から奪う事しか出来なかったそれらは、最初は集落の中で、やがては集落の外に向けてそれを行っていった。

それでも手に入れるものは少なく、次々と多くの者が倒れていったに違いない。

やがてそれが最後の生命線になったのだらう。

状況から推測出来るのはそんな事だった。

残された数少ない記録などは回収し、住居などは悉く焼き払っていく。

無人の家も例外なく全てを。

痕跡があつた事を消し去りたい、という思いも多少はあつたが、それ以上に伝染病などが怖かつたからである。

その用途については考えたくないが、遺体が家の中に運び込まれていた事だけでも問題だつた。

当然ながら、腐敗して細菌が蔓延してる可能性がある。

一カ所に安置されていたならまだ良いかもしれないが、あちこちの家に引きずり回されていたらどの家も細菌が充満してる可能性がある。

確かめる手段は無いが、だからこそ最悪の状況を想定して対処するしかない。

最も手っ取り早い殺菌消毒の手段として燃やすしかないのだ。

茶毘も兼ねた炎で集落を浄化するしかない。

荒っぽいが、他に方法が無かつた。

そうして全てを灰にするしか、この場所の安全性を確保する手段がない。

憂鬱な作業が終わり一日が経過する。

次の日がやってきて昼になる頃に、川上と川下から代表者がやってきた。

集落の様子を確かめ、住居に火を放つ時点でそれぞれに使者を送つておいたのだ。

馬によつて移動した彼等は、徒歩の時とは比べものにならない早さで到着し、事情を伝えたという。

そして今、派遣された両方の使者が元の集落にやってきていた。

彼等は集落の様子を見て絶句していく。

「何とまあ……」

「本当に全部燃やしたんだな」

話には聞いてたはずだが、実際に目で見た印象はかなりのものだ



ったのだらう。

そして、それを非難するよりも、灰の中にまだ残ってる焼け焦げた遺体を見て絶句する。

伝えられたは暗視が本当だと理解したのだらう。

焼け残ってるそれらの一部が欠損してる事も、おぞましい説得力を補強していた。

「とにかく、これをどうにかしないとな」

「ああ。」

話し合いはその後だ」

何人が連れてきた者達と共に、穴を掘っていく。

遺体を入れるための。

人数が足りないので増援をよこすよう、あらためてお使いも出した。

ともかく、落ち着いて話しあうためにも、片付けるべきものを片付けねばならなかった。

何せこれから、この集落をどうするのかを決めねばならないのだから。

#### 40 歩目 別の形に変えるしかない

川下と川上の両方の集落の始まりとなった場所。

最初にヒロフミが転生した部族の定住した位置。

今や無惨に焼けた住居と、雑草だらけの田畑だけになったが、そこは彼等にとって特別な場所でもあった。

発展だけなら他の集落の方がよっぽど上回るようになったが、ここはこの一帯に根を張った者達の出発地点であった。

動かしようのない事実が望郷のような思いをおこさせる。

ただ、現地を実際に見た者達は、そんな感情だけではどうしようもない事を知る。

先に送った使者から話を聞いた者達は、早速増員を送った。

それなりに重要な立場にいる者達も何人が一緒に。

その彼等が、元の集落の現状と、住居の跡地に残る遺骸を見て顔をしかめていく。

荒れた田畑も含めて実際にそこを見た彼等は、所属する集落の代表者達に簡単な報告書を送った。

それが後にひらかれる後処理を決める会合に少なからぬ影響を及ぼした。

「どうにかしたいが」

「さすがにこれではな」

「希望者も減ったし」

「無理して立て直すのもなあ」

代表者達が集まってきて、元の集落跡地で今後どうするかを決める会議が行われる。

しかし話は全く進まず、悩みと迷いの籠もった言葉が何度も繰り返

返されるだけだった。

取り戻したのは良いが、かなり荒れてるので復活させるのが手間なのだ。

その為に投入せねばならない労力を考えると、無理してまで手に入れようという者は少なくなる。

ここに残っていた最後の者達がやっていたであろう事も、精神的なおぞましさを喚起させている。

おかげで誰もが遠慮がちになっていた。

その場にいたヒロフミも、そりゃそうだろうとは思った。

どうにかして取り戻し、再びここを生活出来る場所にしようと思っていたのだが。

(さすがにこれじゃあなあ……)

実際に直に見てしまったヒロフミは、ここに住み着こうとは思わなかった。

放置するのはもったいないが、また元通りにするための努力をする気にもなれない。

最初に始めた場所だけに思い入れもあるが、気味の悪さが先に立つ。

(いつそ墓場に……)

そうした方がまだ良い　　そう思ったところで閃いた。

住み着いたり再び田畑にしたりという手間をかける気にはなれない。

だが、それ以外の用途としてなら使っても良いだろうと思えた。

「あの、すみません」

思いついた事を伝えるため、話し合いをしてる者達の中で声をあげる。

全員が目が集まった。

「そうするしかないか」

「ここに住むつもりにもなれないし」

ヒロフミの提案に居合わせた者達は納得していく。

住むには抵抗があるが、提示された利用方法ならば問題なく使える。

他にどうすれば良いのかも分からないし、すぐに妙案が出て来るわけでもない。

「じゃあ、それでいくか」

決定がくだされる。

ヒロフミの提案はほとんどそのまま採用された。

もちろん正式な決定とは言い難い。

これを各集落に持ち帰り、賛同を得なければならぬ。

だが、各種楽の代表であり、ある程度の決定権も持つてると見なされる者達である。

決まった事はほぼそのまま用いられる事になる。

ヒロフミは、自分が言い出した通りに作業を進めていく事にする。やらねばならない事はあるのだから。

始まりの地であるこの場所は、集落として用いる事を断念する事にした。

そのかわり、各集落から出る死者を埋葬する墓地として用いる事となる。

居住地として用いる事には抵抗があっても、使用者を埋葬するなら問題は無い。

耕した田畑を放棄するのはもったいないが、どのみち回復に時間がかかる。

ならば、諦めて別の用途を探した方が建設的でもあった。

幸い、墓地以外での用途として、植林先としての使い方も考えている。

用水路もあるし、元は田畑である。

木々を育成するのに問題は無い。

それに、言つては何だが土に還るものを埋葬していくのだ。

養分にはことかかない………さすがにそう考えた時、ヒロフミは己の発想に頭を抱えた。

だが、植物も動物も人も、いずれは死んで土に帰り、養分に還元されていく。

自然の摂理の中に取り込まれるのは何もおかしな事では無い。

それを意図的に行うだけである。

また、死者を葬る場所であると同時に聖地として用いようかとも考えていた。

死者を悼む場所としてこの場所を祈りを捧げる拠点にしてしまおうと思つていた。

集落の始まりの地でもあるし、色々と逸話を盛り込むにも便利である。

今回の出来事も反省の材料として後世に伝え、良い意味での戒めに使うためにも便利である。

その為の施設も用意しておきたいものだった。

出来れば清潔で、可能なら神聖さをかもしだせるような何かを。

やはり人間は目に見える荘厳さや権威に弱い。

それを切り捨てる事は難しい。

ならば、よりよい形で利用していけるようにしたかった。

人をひきつけるものを用いて、よりよい方向に導くために。

いずれそれを悪用する者も出て来るだろうが、そうであっても何も用意しないよりは良い。

用い方一つで変わるなら、悪い事に使われた物も良い方向に舵を切る事も出来るだろう。

墓地をただ薄気味の悪い場所として終わらせるものも無い。

かつては生きていた者をしのぶためにも、埋葬されるといふ事に

意義を与えておきたかった。

もちろん、これまでに培われてきた様々な約束事や取り決めなどもちゃんと伝えていく。

礼儀というほど大げさでもない挨拶など、人として最低限身につけておくべき事も、死者への当然の態度としていくためにも。

今いる存在だけでなく、亡くなった者にも、目に見えぬ何かにも、その全てに相応の態度で接する事を伝えていかねばならない。

もちろん、まだ生まれてないこれからやってくる者達へも。

そういった様々な、森羅万象全てに示すべき態度を伝えていきたくった。

(残りの人生、それで終わりそうだな)

発案者として、埋葬地最初の責任者にされたヒロフミは、やれやれと思いつながら今後の事について考えていった。

その後、元の集落があった場所は墓地として利用され、同時に聖地として扱われるようになった。

また、川上と川下での区切りの場所となり、両者の接点ともなっていた。

馬も用いて陸地を探索する川上はその後内陸分を。

川を利用して海に移動した川下は沿岸にそって移動をしていく。

その境目として最初の集落のあった場所は機能していった。

墓地という事で無闇に踏み込む事が避けられたのも、植林地として物理的な障害になった事も大きい。

そして、木々に囲まれたかつて集落があった場所に建てられた社それがヒロフミの望んだ神聖な場所としての権威付けに役立つていく。

鳥居を持つ神社という、独創性の欠片もないそのたたずまいは、この世界における最初の宗教の発祥の地となっていた。

そして、これまでの経緯などをまとめ、起こった出来事を教訓と

して伝えていく事が、教義のようになっていく。

その後も様々な記録を残し集めていく事で、この地は精神的な部分だけでなく、知識の集積所としての面も持つようになる。

その端緒を作ったあたりで、ヒロフミは今回の人生を終えた。

#### 41 歩目 陰謀論のような気もするが

「なんか、色々あったな……」

息を引き取り、意識を失い、再び目をさます。

そしてやってくる死後の世界において、ヒロフミは終わったばかりの人生を振り返っていた。

避けられない衝突を考えての準備で始まったそれは、最後は宗教の創始で幕を閉じた。

凄まじい急展開に我が事ながらびっくりである。

どうしてこうなったと思う程だった。

「終わったら、馬で探検にいくつもりだったんだけどなあ……」

「そうだったのか？」

いつの間にかあらわれた造物主が意外そうな声をあげた。

「てっきり、あの集落を復活させるのかと思ってたけど」

「最初はそのつもりだったんだけどねえ……」

その気持ちは集落で見た光景が叩きつぶしてくれた。

「あんな所で生活なんて無理だったわ」

「でも、結局あそこに住む事になったじゃない」

「まあね」

それもそれで誤算だった。

ヒロフミとしては、必要な時以外は集落にいて、葬式の時だけ神社にいくつもりだった。

しかし、なかなかそんな暇もなく、結局神社で寝泊まりするようになった。

もちろん、神社が建立されるずっと前、植樹やなにやらで最初の集落が再開される頃からである。

「あれは酷かったわ。」

墓場で寝起きするようなもんだったし」



気分は最悪だった。

しかし人間とは慣れるものである。

だんだんと気味の悪さにも慣れ、そこで寝起きするのに抵抗がなくなつた。

「一緒に生活する奴が出てきたのも予想外だったし」

埋葬などの関係があるので、ある程度の人数は必要だった。

最初は集落から手伝いに来てもらっていたが、そのうち神社で寝泊まりする者が出始めた。

最後の頃には、そこで寝起きするようになっていた。

植林作業もあつたのでありがたかつたが、それで良いのかと思つてしまった。

「結局、集落みたいになつちまつたけど」

「まあ、終わり良ければって事にしよう」

「それでいいのかなあ……」

どうにも納得しきれなかつた。

人がここに住むのは無理だろうと思つていただけに。

「まあ、嫁さんももらえたからいいけどさ」

今後は宗教というか、祈りや教えを伝えていく役目になるだろう。

想定外であるが、血筋を残せたのはありがたい。

これでこの先の生まれ変わりでの幅が広がる。

意外な事も言われる。

「おかげでこちらとしても助かるよ」

造物主がそんな事を言い出した。

「お祈りとかで世界に感謝とかしてくれれば、その分こっちに力が流れてくるから」

「はい？」

「人とかが発展していく事でもこちらに力が流れてくるんだ。

けど、世界に祈りを捧げてくれたりすると、もっと力が与えられ

るんだよね。

だから、がんがん祈ってもらおうとありがたい  
造物主とはそういうものだった。

作り出した世界への祈りで、人の気力などが流れ込むらしい。

それを糧としていく事で、造物主も力を増すという。

「でも、それだと俺らの力が失われるんじゃないのか？」

「いや、生きてく上で気力の消耗とか回復はされるから。

回してもらうのは、そういう時の余りだ。

生命に関わるような部分までは取らないし取れないよ」

「ふーん」

本当かどうか分からないが、それを今は信じる事にする。

「でも、それで力を得たとして、こっちに何か良いことあるの？」

「多少は助力が出来るかも。

天候を変えたり、奇跡を起こしたり。

消耗も激しいから、そう何度も出来ないけど」

便利なのか不便なのか今一つ分からなかった。

だが、何も無いよりはありがたい。

「じゃあ、今度から手助けお願いね。

奇跡を信じてる」

「出来るだけ頑張るよ。

君らが繁栄してくれれば、こっちも力を得やすいし」

それに、と続ける。

「向こう側からの介入を防ぐ事も出来る」

造物主としてはそちらの方がありがたいという。

「今回みたいな事が起こりにくくなるから、出来るだけ祈りを忘れないでいてほしい」

むしろそちらのほうが重要なようだった。

理由として、最初の集落で起こった出来事があげられる。

あくどい事をして支払いを踏み倒し、相手のものを奪った出来事。あれも、外の世界からの影響があったという。

直接けしかけたというわけではないが、そういう行動に出るよう  
に影響を与えてきたという。

それほど大きなものではなかったので、効果は小さかったがそれ  
でも影響を受けるものは出てしまった。

おかげで今回のような損害が出たという。

「直接こっちに乗り込んで来ることは出来ないだろうけど、それく  
らいの事は出来るようだ」

「電波みたいなものなのか？」

「それが一番分かりやすいかもね。」

受信しやすい、波長が近い者には影響が出やすい。

あくどい事をした連中は、何かしら悪さを考えていたんだろうな  
だから影響を受けやすかった、受信しやすかった。

それで、今回の結果にいたっている。

「今後はそういう影響が出にくくなるようがんばるけど。」

でも、そのためにもお祈りを忘れずに」

どうにも勧誘っぽい言い方が気になる。

だが、とりあずそれを信じておくことにしようと思った。

祈るだけならたいした手間でもない。

それで何かしら見返りが得られるなら安いものだった。

もつとも、次の人生で宗教活動でもしなければ、そちらを中心  
にがんばるといわけにもいかない。

それはそれで大事なのだろうが、それよりも優先したい事がある。

もうちょっと技術の部分を底上げして、生活水準を向上させてお  
きたかった。

まだまだ足りない部分大きい。

お祈りについては、それらをこなしながらとなってしまう。

それでも、全体に少しずつ浸透してるからいずれはそれなりの効  
果も出るようになるだろう。

まずはそれよりも、技術や産業方面をどうにかしたかった。今後の発展の為に、その発端となる部分をどうにかしたいと思っ

た。

他の誰の為でもない、自分自身のためにも。

どうせこちらの世界で何度も生まれ変わる事になる。

その度に石器時代の状態であるのは勘弁してもらいたかった。

だが、黙っていても発展するわけもない。

少しでも楽な、文明化された状態になるには、それなりの努力が必要になる。

その為にも必要になる知識や技術などを作っていかなばならない。自然に出来るのを待っていても、いずれは誰かが発見や発明をしてくれるとは思う。

だが、待つてるだけでは何時になるか分からない。

少しでも楽をしたいなら、自分自身が動くしかない。

どうにもならない他の者達の動きを待つてるだけではどうしようもない。

ならば、最初のきっかけをヒロフミでどうにかするしかない。

その後の発展などについては他の者に任せていく事も出来るが、最初の一步はそう簡単にはいかない。

既にあるものの改良改善と、全く何もない状態で閃くのは大きな違いがある。

何もないところから何かを思いつくのは難しいし、思いついても形にするのも難しい。

しかし、例え粗雑であろうと始まりとなる何かがあればそれをもとに考えていく事が出来る。

最初の一步というのはとても大事なものだ。

それを与える事で、あとは他の者達の努力と奮闘に任せる事も出来る。

現に今まで作り出してきたものは、他の者達によって用いられ、拡大していつている。

幾らかの改良もなされてるものもある。

何にせよ、もたらしたものが生活水準をあげている。

そのおかげで集落は拡大し、必要な土台が出来上がりつつある。

人口が増える事で余力が生まれ、新しい事を始めるのに必要な人員を確保出来る。

それだけでもありがたかった。

この先更なる発展を目指していける。

「じゃあ、もう一回頑張ってくる」

「ああ、頼んだよ」

見送りの声を受けて、ヒロフミは次の人生へと向かっていく。

ただ、赤子から始めるのは面倒ではある。

やむをえない事だが、そこから十数年ほどの待機時間もある。

できればこの部分を上手く省略出来ないものかと考えてしまう。

無理なのは分かっているのだが。

## 42歩目 そろそろ道具が欲しい

「さてと」

生まれてから十五年という準備期間を終えて出発の時を迎える。

何回も転生してるので、ある程度コツを掴んできた。

おかげでさほど苦勞する事無く目的に向かつていける。

家がそれなりに裕福なのも幸いした。

最初の人生の時からずっと続くヒロフミの血筋は、長い時間をかけて着実な積み重ねをしてきている。

時折放蕩者が出てくる事もあるが、それは家訓として残したしきりにより、一族から追放としている。

おかげで極端な目減りはない。

そうやって作ってきたものが、転生の際の行動の踏み台になる。

何をするにせよ、多少は準備が必要になる。

それを一々集めるのも手間がかかるが、それを省く事が出来るのはありがたい。

最初の段階から色々がんばってきて良かったと思える瞬間である。

今回の場合、長距離の移動になるので馬が必要だった。

また、一人で活動するのも大変なので、供の者が欲しかった。

それも揃える事が出来た。

狩人の血筋の者達で、今は狩猟より探索を主な仕事としている者達だ。

既に狩猟の必要性は大分薄れており、本来の仕事を行う事は滅多にない。

集落や田畑に近づいた害獣を倒すのがせいぜい打。

しかし、狩猟のためにあちこちに出向いた知識と技術を磨き上げてきた一族になった狩人達である。

それはそのまま探索に用いる事が出来るものだった。ヒロフミの前回の人生で身につけた旅の技術も伝授されており、それも相まって野外活動における専門家になっている。それが四人同行してくれる。

心強い事この上ない。

そんな彼等と共に、ヒロフミは山野の探索に出向いていった。

当面の目標は薬草探しである。

栄養状態は改善されたが、いまだに死亡率の高い状況である。

特に大きな病気や怪我をした場合、助かる可能性はかなり低い。

それらを少しでも緩和するため、薬となる植物を手に入れておきたかった。

可能であるならば栽培も視野に入れている。

とにかく死亡率を少しでも低下させたかった。

その為の探索である。

必要な技術は既に身につけてある。

それらが薬草の自生する条件を教えてください。

あとは該当すると思われる地域を探すだけだった。

ただ、本来の目的はそれではない。

薬草も大切だが、それよりももっと大きな目的があった。

川に沿って上流に向かい、山へと向かっていく。

もともと山に近い地域であったが、更に奥地へと向かう。

集落の近くで見つかる薬草などについては既に確保していたので、そうではない場所への探索が必要だった。

川に沿っていくのは、目印があるから迷い難いからだった。

水をすぐに補給できるという利点もある。

また、そこから目的のものをみつけられればという思いもある。

(上手く見つければいいけど)

身につけた技術が発揮されることを願うしかない。  
今までそうだったように。

ただ、それはそうとして薬草である。

本来の目的の方はかなり手間がかかるのですぐにどうにかなるとは思っていない。

それに比べれば薬草の方がまだ見つかりやすいはずだった。

探索に出かけて何の土産もないのでは今後に差し障る。

何でも良いから、何かしら見つかって欲しかった。

ありがたい事に、旅は順調に進んでいく。

川上に向かい、山の中へと入り、更に奥へと向かう。

適度な所で野宿をして、薬草の探索に入っていく。

植生というか、生えてる条件についてはある程度頭にあるので目はつけやすい。

本当にあるかは行ってみるまで分からないが、目安があるのはありがたいがかった。

幸い、数日の探索で成果も幾つかあがる。

見つけたものを採取し、場所を地図に記していく。

とりあえず最初の探索は成功のうちに終わってくれそうだった。

本来の目的には及ばなかったが、十分な成果である。

(これなら、次も申請しやすくなるな)

今回の旅の目的はそこである。

探索は何の成果も上がらないのが普通である。

何かが見つかったりする事が少ない。

それでも未知の領域を無くしていくために必要ではある。

だが、全く何の成果もあがらないと、さすがに次をお願いしにくい。  
い。

やはり、それなりの結果が出たほうが次につなげやすくなる。



今回の薬草探しは、そのためのものだった。

次につなげて行けるようにする為の実績作りが目的である。そうしておけば、続けて何回かの探索に出かけやすくなる。

薬草探しを理由にしたのもそのためだった。

本来の目的に比べれば成功しやすいし、効果も確かめやすい。

そうそう薬草が必要な事態は起こりはしないが、まだしも利益として分かりやすいのも大きい。

本来の目的の方は、そう簡単に効果を確認出来ないので、結果を出すまでかなりの手間がかかると考えられる。

だからこそ、先にそちらを目的にする事が出来なかった。

何処にあるかも分からないし、探すだけでも手間がかかるのだからなおさらだ。

まずは探索回数を多めに確保出来るようにしておかねばならない。

そこまで考えていた。

それだけ必要としていた。

(見つかるといいけど)

かねて求めていたもの。

金属の鉱脈が。

それを探し求めるのが、本来の目的である。

#### 43 歩目 あれもこれもと求めてしまう

集落は拡大し、人口も増えた。

今や四千人を超えるまでに成長した文明は、しかしいまだに石器が基本である。

特別おかしなものではない。

加工が難しい金属器を用いるにはそれなりの技術力が必要になる。そんなものを簡単に作れるわけがない。

そもそも金属の存在すら知らない者達が、それを利用する方法を思いつくわけがない。

石器を用いてる方が、むしろ理にかなってる。

何せ、目に付くところにあるのだから。

だが金属はそうではない。

採掘して加工して抽出しなくてはならない。

そこまで手間をかけないとまともな形にならないのが金属だ。

利用しようと思うのも難しい。

そんな金属を使おうとしてるのだから、他の者に理解されるかどうか疑わしい。

実際に使う用になるまででありがたみを理解される事はないだろう。そんなものを探しに行くと言って納得されるわけがない。

だからこそ、迂遠な方法で金属の鉱脈を探しに出かけるしかなかった。

ただ、さすがにすぐに見つかるとは思っていない。

多少なりとも手がかりが見つかれば良いというくらいに可能性は低いと思っていた。

そうそう埋蔵されてる場所が見つかるとは思えないし、見つかった

たとしても手に入れるまでが長い。

下手すると何回か転生してこななければならぬかもしれないかもしれなかった。いくら技術を身につけてるとはいえ、それでどうにかなる程簡単ではない。

(せめて砂鉄からでも手に入れる事が出来ればいいんだけど)

川沿いに進んでいるのはそれを見つげる為でもある。

川の流れにのって鉱脈の中にある何かが流れてこないか、などという夢物語のような展開もあればと期待してもいた。

それくらい手がかりがない。

だからこそ、少しでも発見の確率を上げる為に継続的で地道な調査が必要だった。

薬草探しは、その点で便利だった。

これを理由にすれば、山奥に向かう事も出来る。

とにかく鉱脈探しのために外に出ねばならないから、その為の方便を作るだけで一苦勞である。

それだけの苦勞をしてるのだ、成果が出ないと困る。

困るというより、泣ける。

(見つかるといいけど)

今後の発展のためにも、どうにかして見つけたかった。

とはいえ、簡単に見つからないものだけに関わってももらえないのも事実。

まずは手を出せる所から何かをしていかねばならない。

薬草の方もそう簡単に見つけ出せるものではないが、探索のための手間はかけられる。

生えていそうなところを大まかに見当をつけ、後日探索のための拠点を作る事になる。

川の上流、山の麓に入り、少しずつ勾配を登っていきながら、それにふさわしい場所を探す。

木々の生い茂ってる所ならば炭焼き小屋を作って燃料供給の拠点にしても構わない。

そこを中心にして探索を続けるのも良いかと考えていく。何にしてもまずは腰を落ち着けないとどうしようもない。

一日二日で終わるような簡単なものではないのだから。

とりあえずは寝泊まり出来そうな所を探し、そこを拠点としていく事を考える。

第一回目の探索はそこで終わりにして帰途に就いた。

後日人を連れて作業を開始する事を考えなが一度集落へと戻っていった。

まずは数十人ほどを動員して、居場所を作る事を考える。

ついでに炭焼き小屋も建てて集落への供給を考える。

そうしながら薬草を探し、あわよくば鉱脈を見つけていきたい所だった。

#### 44歩目 最悪の結果は免れた

集落に戻ったヒロフミは一回目の結果を報告。

薬草などはすぐには見つからなかった事と、生い茂る木々を発見した事を告げる。

そこで木炭を作りながら薬草を探していきたいと告げた。

燃料の確保が必要だった集落の者達も賛成し、早速派遣される者達が編成されていく。

一ヶ月で人を集めたところで再び川に沿っての移動を開始した。

今回は徒歩の人間も多いので移動に時間がかかってしまう。

馬車があればと思うも、それを作る為にも金属の工具が欲しい所である。

その為にも、本来の目的を達成したいものだった。

現地に到着した彼等は、早速作業を開始していく。

木々を切り倒して場所を作り、小屋をこさえていく。

その一方で、倒した木々を使って木炭を作っていく。

ひたすらに木々を倒す者と傍らで、竪穴式住居が造られていく。

慣れたもので、木々を倒し骨組みを作り茅を葺いてという作業がどんどん進んでいく。

寝泊まりが出来る場所が出来上がり、必要な物資も運び込まれる。

田畑を開墾する事は出来ないなので、食料は集落からの輸送を頼らねばならない。

代わりに、周囲に生い茂る木々を倒して木炭を作り、それを供給していく事になる。

もちろん、いずれは薬草もそこに加わるだろう。

それが主力になるのは先の事になるが。

その中でヒロフミは金属を求めていかねばならない。色々大変な事になりそうだった。

当面の成果をあげるための木炭は割と上手くいった。

材料はまわりに大量にあるので調達は比較的楽である。

伐採して運び込んでくるのは大変だが、薬草探しほどではない。

これが薬草となると、何日か森や山の中を歩き回らねばならないから手間がかかる。

注意深く見なければ見落してしまうので神経を使う。

探索されていない地域なので地形すらも把握出来てないから余計に手間がかかる。

好んで山に入っていく事はなく、探索の必要性も薄いから今まで手つかずだった。

薬草探しがなければそのまま放置されていたかもしれない。

その薬草探しが順調であれば良いのだがなかなかそうはいかない。やはり簡単に見つかるものではなかった。

知識を頼りに探すも、該当するものは見つからない。

全く成果があがらないというわけではないが、一年目の成果はようやく一種類といったところだ。

おまけに鉱脈の方も見つかってない。

手間ばかりがかかって、目的の方の達成は難航を極めていた。

とはいえ、一種類でも薬草が見つかったのは集落からすれば快挙である。

何年もかけて何も見つからない事だってあるので、それに比べれば大したものである。

それに木炭の供給もなされている。

集落からすれば、それだけでも十分な功績だった。

ただ、何かを手に入れれば更に多くの、より大きな何かを求めてしまうものでもある。

更に何か出てくるのでは、あるいはもつと有益な薬草が手にはいるのではないかという期待が出てくる。

余計な圧力となってヒロフミに向かつていくのも止められない。期待は、達成されなかつた時に失望と怒りに変わる。

援助を引き出す事を容易くするが、その分達成出来なかつた時に求められる返済も大きくなる。

無ければ無いで困るが、ありすぎるのも考えものだった。

無償で何かしらしてくれるならありがたいが、そうそう虫の良い話もない。

提供されるにしても、必要にして十分な量や質を求める事も出来ない。

だからこそ、多少なりとも利点があると思わせるだけの何かを提示していかねばならなかつた。

ありがたい事に木炭を確保するために山の奥までどんどん進んで行く。

そのための炭焼き小屋も作り、居住地も作っていく事になる。

探索を進めていくためでもあるので、拠点となる場所を確保する意味もあつた。

そうでもして木材を確保しないと集落での消費に追いついていかなくなりつつあるのだ。

ヨシフミが生まれた頃は四千人だったが、既にそこから五百人以上増えている。

人口増加の勢いは留まる所を知らず、次々に新しい集落が作られていった。

田畑は拡大し、川から離れた所にも用水路を引いて耕作地を確保せねばならなくなっている。

当然様々な物資が必要となっており、それらの増産も考えねばならなかつた。

木炭も供給確保の為に場所を拡大しておかねばならなかった。一力所だけでは必要な量が確保出来ない。植林して使った分を補うにしても、即座に回復するものでもない。ある程度広い範囲を確保する必要があった。集落としての必要性がヒロフミの活動を助ける事につながっていた。

そんな調子で二年三年と時間が経過していく。どの人生でもそうだが、目的の達成までにかかる時間は長い。数年かかる事など珍しくもない。それだけ重要ということでもある。一回の人生で一つの目的を達成するのが限界だった。今回はそれが特に顕著に感じる。果たして生きてる間に鉱脈を見つける事が出来るのかと心配になる。

薬草の方は少しずつ見つける事が出来ていたが。  
(こりゃきついな)  
そもそも鉱脈がないかもしれないのだ。そうだった場合、探索そのものが無駄になってしまう。出来ればそうならないでもらいたかった。次の人生に持ち越しになったらつらい。

運が良いことに、そうなる事はなかった。探索に出て十年、ようやく目的の物を見つける。それだけかかったと見るべきか、たったこれだけの期間で見つける事が出来たというべきか。  
どちらであるかは悩ましいが、ようつやく見つける事が出来た。それだけでもありがたかった。



これからそれを利用出来る形にしてみかねばならなかったが。  
かかる手間と時間を考えると喜んでばかりもいられない。  
それでもまずは歓喜に震えて見つけた鉄を見つめ続けていった。

#### 44 歩目 最悪の結果は免れた（後書き）

今後について、活動報告を書いてくつもりなのでよろしく。

#### 45歩目 目で見て手で取るまで認めないからやるしかない

鉄と言っても砂鉄である。

もちろん鉄だけが塊で存在してるわけではない。

それが含まれてる岩を崩してそこから取り出していく事になる。

やり方は会得した技術が教えてくれるから問題は無い。

ただ、作るのに手間がかかりすぎる。

一人では絶対に不可能だ。

やってやれない事はないが、手間がかかりすぎる。

何とか人を集めねばならない。

とりあえず炭焼き小屋の人間から引き抜けそうな者を選んでいく。

そして、必要な装置を作っていく。

頭にあるものを形にするのは大変である。

自分一人で作る事は困難きわまりないので、図面を引いて示していかねばならない。

もちろん、いきなりそんな物を作ろうとしても無理である。

協力を募る事がまず不可能だ。

見た事もない物に出資したり手を貸すお人好しは少ない。

なので、とりあえず小さな形の物を作り、鉄を取り出す事から始めた。

目に見えた成果が必要なら、それを示さねばならない。

そして、鉄の有用性を示す必要がある。

一塊の鉄。

まずはそこが目標になった。

とはいえ、そんなものを簡単に作れるわけもない。

準備だけで一年以上かかってしまった。

そこから更に鉄を取り出すまでが一苦労。ようやく手に入れたのも、握り拳くらいの大きさにしかならない。相変わらず薬草探し（と木炭作り）を続行していたので、その合間にやらねばならず、手間は膨大なものとなっていた。

その割に得られた成果はさしたるものでもないように思える。なのだが、たったこれだけの鉄の塊が今のヒロフミには必要だった。

とりあえずこれを用いて斧を作る。

ここに居る者達にとって最も必要でありがたみを理解してもらうのにつつてつけだったからだ。

おそらく人類初めての鉄斧を渡し、ヒロフミは成果の報告を待った。

評判は一気にひろまった。

鉄斧を使った者はその威力に驚愕し、一日で石斧以上の成果を簡単にあげてきた。

「凄いぞ、これ！」

使用者の感想はその一言に尽きた。

石斧以上の切れ味と、程よい重み、抜群の耐久性でもってたちまちのうちに伐採をしていける。

おかげで他の者達とは比べ者にならない作業量をこなす事が出来た。

当然それは他の者達も知る所となり、鉄斧を使わせる、俺にもよこせと言いはじめた。

それを聞いてヒロフミは、我が事成れりと喜んだ。成果が見えれば一気に流れは変わる。

これで人を引き込むのが格段に楽になる。

鉄の採取と、鉄製品の量産が出来るようになった。

それからのはあつという間に話が進んでいった。

伐採作業から何人が抜いて砂鉄の採取にまわす事となった。当然ながら、集落の方には報せていない。

言ってもすぐに成果が伝わる事もないと予想しての事だった。説明に時間をかけるのがもつたいない。

それよりも、今いる人数から可能な限り人を抜き出して作業をした方が早い。

とりあえず数人で作業をして新たな鉄を得ていく。

それを用いて鉄斧を量産。

と言つても、数ヶ月がかりでようやく二つ三つの鉄斧を作るといふ程度であった。

それでも今までより格段に早く作り終える事が出来た。

その鉄斧を持った木こり達が為していく伐採速度は、石斧の数倍以上となつていった。

何人が引き抜いても、鉄の産出に人を割り振った方が早い。

それを見越して、ヒロフミは本格的な鉄の採取と抽出に乗り出していった。

後から入ってくる木炭作りでやって来た者達も後押しをする。

最初は木炭や伐採が仕事だと思っていた。ついでに薬草の探索が仕事だと思っていた後続達は面食らう。

しかし、直に目にした鉄の威力を見て考え方を即座に改めた。

人手の確保が可能となり、鉄の利用率が格段に上がる。

大型の溶鉱炉（いわゆるタタラ方式）を建設し、本格的に鉄製品を作っていく。

もちろん最初は斧だったが、すぐに木材を加工する為の工具にも用いていく。

鋭く固い刃物の作業効率は格段に大きい。

それらを用いて家屋などの作り方も変更していく。

のこぎりやノミによって木材に穴を穿つのも難しく無くなった。

木組み方式の建設が可能になり、今までより複雑で頑丈な作りの家も建設可能になる。

それよる建築も行われていった。

その鉄製品を集落にもたらずにあたり、いくつかの製品を作って持ち込む事とした。

鍬に鋤に包丁に鍋。

それと木工用の工具など。

思いつく者は何でも作り、それを木炭と一緒に持ち込んだ。

なお、持ち込むに当たって、始めて作った馬車を使った。

始めて見る場所に集落の者達は驚いた。

更に、持ち込まれた鉄製の道具の便利さに驚愕する。

加工された木材による建材も持ち込まれ、それによって建てられていく家にもびっくりした。

とにかく大きな衝撃を受けたようだった。

瞬く間にそれは集落全体に知られ、新たに作られた鉄製品を誰も求めるようになった。

ヒロフミはその採取の仕方や鉄の加工の仕方を、何一つ隠さずに集落全体に広めた。

独占する事が出来れば大きな利益を得られるのは確かだが、それによって今後誰かが特権的に振る舞う可能性がある。

そうなる事を危惧してのものだった。

今後転生してきた時に、鉄を用いる事が出来ないのでは困る。

それに、技術は程よく拡散されてもらわないと全体の発展につながらない。

どこかの誰かが自分の利益確保の為に独占しては困る。

その辺りの対策も考えていかねばならないと思った。

ただ、今はまずこの便利な道具を出来るだけ行き渡らせる事を考えていく。

あわせて、鉄によってもたらされる発展を考えていかなばならない。  
木材加工はこれまでとは比べものにならない程にはかどるようになる。

それを見据えた発展を考えていく事になるだろう。  
また、馬車も既に出来上がってるので、移動・輸送も変わってくる。

馬を始めとした家畜の利用も増えていく。  
探索探検の範囲も大幅に上がるはずである。

(とりあえず、これを神社に奉納しておくか)

前世で作った信仰対象の社に技術を記した書物をおさめ、後の時代にたたらすようにしておく。

もちろん一族の書く家にも分散させておくが、それだけだと心配だった。

一族以外の者達にもそうだし、なにより信仰対象として中立の立場(という事にしてある)場所におさめて保険にする。

信仰や宗教が力を持つ事も考えられるが、一応中立という建前にしてるのでそれを利用する事にした。

ここに入れておけば、誰でも閲覧が可能になる。  
少なくともそついう建前にはなっている。

また、宗教が変に固まらないように適当に分派させておく事も考ええていく。

今は無理でも、何らかの機会で作っておきたかった。  
確保しておきたかった技術はどうにか手に入れる事が出来て安心出来たが、それに伴った面倒も抱える事となる。

いつの時代でもそつだったが、やはりここから逃れる事は出来そうにもない。

上手く対策を考えていくしかなかった。

とはいえ、今生にて手に入れた鉄で念願が一つかなう。

加工できた木材によって作った風呂。

それに入る事が出来るようになった。

久しぶりにお湯に身を浸す気持ちよさを堪能出来た事が、この人生における最大の収穫だと思えた。



45歩目 目で見て手で取るまで認めないからやるしかない(後書き)

今後について、活動報告を書いてくつもりなのでよろしく。

#### 46 歩目 相手を意識して行動していく事になってきた

「まあ、こんなもんか」

「上等上等」

造物主の評価の声は軽い。

それでもやり遂げた成果には満足している。

「あれから凄い勢いで発展してるね」

「こうして見てもびっくりだよ」

寿命を終えてから戻ってきた死後の世界（と思われる場所）にて地上の流れを見ている。

鉄の発見による成果はめざましく、開拓も建築も全てが以前よりはかどっている。

開墾速度も画期的なまでに向上し、田畑の拡張は思った以上に進んでいった。

増加した人々の移住も馬車によってかなり素早く行えるようになってきている。

集落内では大八車が荷物の運搬に一役買っていた。

そして、家も以前とは画期的なまでに変わっている。

伐採した木を丁寧に加工作ることができるようになり、しっかりとした家屋を造ることが出来るようになってきている。

おかげで竪穴式住居からより快適な住居を獲得出来るようになった。

建築技術はまだまだ発展させねばならないが、今後の生活は更に良くなっていくだろう。

また、馬車により移動距離が飛躍的に伸びた。

物資の運搬も手軽になり、新たな地域への進出も手早く出来るようになった。

集落が始まった場所の周辺に固まっていた者達も、今後はより広

範囲に展開していくだろう。

当面は川の流れに沿って下流へと展開していく事になるだろうが、だが、馬を使った探索により、内陸部でも別の川が見つかった。結構離れた所にあるのだが、馬車を使えば移動はさほど苦にはならない。

そちらにも展開していく事も視野に入っている。

何にせよ、この先の人口増加にも対応出来るくらいに土地を利用しやすくなっている。

移動速度と開拓速度の向上は大きいな成果をあげている。

見つけた幾つもの薬草も成果を果たしている。

医療で用いられるそれらは傷病者を減らし、生存率に貢献している。

本来の目的ではなかったが、これを見つけてきた事も良い方向に影響していた。

「上手く発展してるようで何よりだよ」

造物主も喜んでいる。

「これなら、衝突が起こっても大丈夫だろうね」

不穏な台詞をくつつけて。

「前に言っていた、向こうの世界の影響とかいうやつか？」

「それに絡んでるよ。」

直接手は出してこれないけど、影響を与える事はできるからね。

考えとかだけをこちらに飛ばしておく事は出来る。

それを受診してる奴らが出始めてきた」

「そいつらがまとまって動き出してる？」

「ああ。」

君の所に比べればかなり出遅れてるけど、確実に進歩してきてるよ。

いずれ勢力が拡大したら衝突は免れないだろうね」

それを危惧してるようだった。

確かにそうなれば、損害は免れないだろう。

「そうなるまでにこっちも拡大しておくよ」

「そうしてくれ。」

でないと、こっちまで汚染される」

「……病原菌か何かかよ」

「似たようなもんだ。」

精神や考え方があいつらの方向になびけば、こっちもいずれ破綻や破滅に向かっっていく。

それは避けたい」

確かにそれは避けたかった。

苦勞して造り上げたものを壊されたくない。

「それって、こっちから跳ね返す事は出来ないのか？」

「難しいな。」

影響を遮断する方法はないし。

物理的に関与出来ないのがせいぜいだ。

それにしたって、こっち側と交信してしまえば、接続点を作られかねないし」

詳しい事は分からないが、とにかくこのまま放置はまずいようだ。

「でもさ、それならこっちから影響を与える事も出来るんだろ」

「まあ、やるうと思えば」

「だったらやってやれよ。」

やられっぱなしは性に合わん」

割と好戦的な事を言っ て造物主をあおる。

大人しく黙ってるなどするつもりも無かった。

やってきた奴にはやり返さない限り延々と続けてくる。

徹底敵に叩きのめして消し去らない限り。

だから、ありとあらゆる手段を使って反撃するべきだとヒロフミは考えている。

今回も例外ではない。

「無理なの？」

「今はさすがにな。」

もつと勢力が大きくなって下地が出来ないと」

造物主の力は作った世界の活力の大きさに左右されるという。

生命の根源からやって来た靈魂が拡大し、世界に満ちる事でやれる事も大きくなる。

他の世界への干渉も例外ではない。

「それが出来れば、向こうの世界にも影響させる事が出来るんだが」「じゃあ、がんばって勢力拡大させるわ」

あつさりとそう言った。

「出来るだけ向こうをひっかき回してやってくれ。」

邪魔してやれば、それだけこっちへの干渉が減る」

「それでいいのか？」

「時間稼ぎしてくれればいいよ。」

「こっちに何もしてこなくなれば、それだけやりやすくなるから」

「けど、そうなるこっちも世界に影響を与えにくくなるぞ。」

力を向こうの世界に振り分ける事になるからな」

「構わないよ。」

「とんでもなく悪くなるんじゃないかぎり」

それよりも、下手に他の勢力が拡大する方が厄介に思えた。

いずれ敵対する連中が拡大するよりは、多少世界の状況が落ち込んだ方がましに思える。

「世界の方に影響を出せないって事は、敵にまわる連中もその影響を受けるって事だろ。」

それなら最初の段階でここまで進める事が出来た俺達の方が有利だろ」

「まあな」

確かにその通りである。

世界に及ぼす影響が低下し、不利な状況が出て来る事になるだろ  
う。

それは確実にヒロフミにも及ぶ。  
同時に、他の全ての勢力にも及ぶ。

「だったらやろう。」

出だしで有利になったなら、俺達の方が上手くやっつけていける」  
被る損害を考慮しても、その方が利点がある。

そう考えての事である。

「まあ、多少はこっちも気にかけて欲しいけど」

「そこは考慮するよ」

そう言っ て造物主も決める。

「こっちの影響が悪く出過ぎない程度にがんばっておく。

その合間に向こう側にちょっ つかい出す事にするから」

「そうしてくれ」

さじ加減が難しいが、当面はそれで行く事とした。

「後は運任せだな」

「そうだな。」

俺が言うのもなんだが」

「なに、全部を思い通りになんて出来ないんだろ。

だったら仕方ない。」

出来る範囲で頑張るだけだ」

「そう言っ てもらえると助かるよ」

偽らざる本音である。

「こっちも少しは時間が稼げる」

「そうしてくれ。」

敵が手強くなるよりマシだ」

ヒロフミとしては、直接対決する相手が弱い方がありがたい。

「まあ、どれだけ不利になるかは実際に行っ てみて確かめてみるよ。

それからの事は、こっちに戻っ てから相談しよう」

「そうだな。」

そうしてくれ。

こっちも、そちらがどれだけ大変になっ てるのか知りたい」

造物主からはヒロフミ達の事を見る事は出来ても、実際にどういった事を体験してるのかは分からない。

創造主であつても万能ではないのだ。

出来る事とそうでない事、分かる事と知り得ない事がある。

それは他の誰かに確かめてもらうしかない。

「まあ、とにかく行ってくる」

そう行つてヒロフミは、次の人生に突入していった。

創造主は上手くいくようお願いながら見送った。

祈りはしない。

その相手はどこにもいないのだから。

願いが祈りの代わりである。

どれほど効果があるのかは分からない。

しかし、天の配剤ともいうべき何かが変わる事もある。

それは規則正しく運行される様々な法則への介入でもあつた。

造物主として自由に出来るものではないが、確かに何らかの違いを

もたらす事もあつた。

果てしなく偶然に等しい影響を行使してるだけだが、それでもや

らずにはおれない。

この先の未来のために。

万能で全能でもない彼に出来る、最大の努力だった。

46 歩目 相手を意識して行動していく事になってきた(後書き)

ここで一区切りして別の何かに手をつけようと思ってる。

尻切れトンボで申し訳ない。

今現在、次のものを書いてる最中のはず。

この後書きを書いている時点では、次のものはほとんど出来上がってないので。

まずは、やりたくても書き上げる余裕がないものを短編で投稿してるかもしれない。

今後についての詳しい事は、活動報告にて記載していくので、そちらを参照を。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8584dt/>

---

転生して異世界に指導者として出向くことになった

2017年8月31日14時07分発行